



見習いクロウの

最後の一年



「朝ダ！ クロウ、朝ダゾ！」

鳴き声と羽ばたきが聞こえる。くちばしで頬を軽く突かれ、クロウは目を覚ました。

まだ家族は寝ており、家のなかはとても静かだった。

カーテンを開けると、春の日差しが室内に飛びこんでくる。その眩しさと眠気が一気に吹き飛んだ。

「おはよう、ラーヴァ」

ラーヴァは、定位置に留まって朝食をねだった。クロウは棚から取ってきた相棒の食事を皿に出す。

赤い羽をパタパタと動かして、ラーヴァは言った。

「今日ハヘマスルナヨ！」

「うん、頑張る……」

クロウは棚の上に置かれた日めくりカレンダーに視線をやった。まだ昨日の日付のままだった。

黄色い数字が記された紙を破ると、その下から桃色が現れた。

ああ、とうとう月が変わってしまった。彼は溜め息をつく。三月が終わってしまうということは、彼にとっては特別な意味を持っていた。

もう時間はない。ずっと遠くにあったはずのタイムリミットはどんどん迫っている。一年後、次の三月が巡ってくるときに十四歳の自分がどうなっているか。そんなことを考えるだけで憂鬱だった。

けれども、ここで悩んでいてももうしかたない。現実を受け入れなければならなかった。

暗い気持ちを心の外に追い出しながら自分も食事を取り、ラーヴァを肩に乗せた彼は急いで家を出た。

空は快晴。どこからか花の香りがする。昔、この季節になると花を摘んだりして遊んだことをクロウは思い出す。こういう日は、日向ぼっこでもして夕方までのんびり過ごしたい気分だ。

高いところが苦手でなかったら、外壁の上にのぼって大地を見下ろすのも楽しかっただろうに。クロウは細く息を吐いた。

クロウが暮らすのは、空中に浮かんだ都市ジェミア。彼はその中央役所の片隅にある、鳥類局に勤務している。

彼は鳥使いの見習いだ。鳥使いは、鳥と意思疎通する能力を持ち、希少種の保護や公開、他の土地との交通・伝達手段となる鳥の育成と管理などを主に行っている。

ジェミアでは、鳥使いのような専門職は高い地位を得ている。その代わり、なるための条件は厳しく、狭き門となっている。

志望者はまず、初等教育の最後の年、十歳で適性検査を受けることから始める。希望の職種ごとにその内容は異なり、それぞれ条件を満たした生徒だけが中等教育の専門職コースへと進める。

最初の約一年間は一般教養と基礎実習に費やされ、その課程を修了すると今度は見習いとして働く。そこで無事に一人前と認められたら、晴れて正式に資格を得ることができる。これが通常の流れだ。

クロウも適正検査に合格し、実習を経て、鳥類局に配属された。父と同じ鳥使いを夢見ていた彼は希望に胸を弾ませていたが、試験よりずっと厳しい現実が待っていた。

「クロウ、もう一度やってみろ」

主任の声に頷いてみせたものの、手足の震えが収まらない。

靴の下では、灰色の羽毛を持った巨大な鳥がうんざりした様子で口を開く。

「オイオイ、シッカリシテクレヨナ。命令シテルノカシテナイノカワカリヅライ。ダイタイ、オ前ガ落ちタラ俺ノ立場ガ危ウインダゾ。チャント立テ」

「ごめん、ゲイル。お願い、もう一回つきあって」

ゲイルと呼ばれた鳥は溜め息をつきながら翼を広げ、地面を蹴って飛び立った。

彼は、レインアローという鳥種だ。大人四人ほどを軽々と運ぶことができ、ジェミアと地上とを結ぶ重要な移動手段となっている。小人数の急ぎの移動手段や、ちょっとした荷物の運搬に用いられている。

その操縦を担うのも鳥使いなので、見習いのうちに技術を身につける必要があった。そういうわけでクロウも長期間練習しているが、これがまったく上達しない。

浮上したレインアローにしがみついているのがやっとなで、とても先輩たちのように自由自在に動きまわることはできない。

クロウは高所恐怖症だった。地上が遠ざかった瞬間に全身が硬直してしまうのだ。頬や身体に強い風が当たるとよけいに恐怖が増した。鳥使いとしては致命的な欠点だった。

「高イトコロガ怖イナンテ、オ前、本当ニ鳥使イカ？」

「う、あ……」

返事もろくにできない。肩は硬直しているのに手には力が入らず、手綱もうまく使いこなせずにいる。

地面が遠くて、見下ろすと吸い込まれてしまうような錯覚を覚える。クロウは無意識のうちに目をぎゅっと瞑ってしまった。足に力が入らず、立っているのもやっとだった。

「ジェミア市民カドウカモ疑ワシイナ」

そのとき、ラーヴァが緩やかに飛びながら現れた。

「ホドホドニシテオケヨ、ゲイル。人間ヲフォロースルノモ鳥類局ノ鳥ッテモンダロウ」

ゲイルは鼻で笑う。

「鳥ト話セルダケジャダメナンダヨ。俺モココノ生活ハ長イケドヨ、コンナヤツハ初メテダヨ。コイツノ父チャントハ大違イダ。オ前モオ子サマノオ守リナンテ大變ダナ」

「オ前ナア！」

ゲイルは二度旋回すると、ゆっくりと降下した。

「坊チャン、今日ハココマデダ。コレ以上ハ無意味ダロ」

着地した瞬間、転げ落ちるようにしてクロウは芝生に降り立った。そのまま倒れこんでしまったかったが、上司の前だ。無理やり直立姿勢を保った。

「クロウ、いつまでもこのままじゃいけないだろう。どうにかならないか」

「.....ごめんなさい」

クロウは謝ることしかできなかった。

「やる気があるのは認めるよ。他の仕事も熱心だしな。でもな、ここまで怯えている人間に飛べなんて言えないよ」

主任も困ったように頭を掻く。

「みんな仕事を抱えているから、お前も戦力になってくれないと困るんだけどな」

鳥使いの条件は、鳥の声を理解できること。これは努力ではどうしようもなく、生まれつきの素質が物を言った。それゆえになり手は少ない。

鳥類局は仕事量に比べて人員が不足している。クロウですら、数年ぶりの見習いという立場なのだ。

だからこそ早く役に立ちたいのに、いつまで経っても役立たずでいる自分が情けない。クロウはますますうなだれてしまう。

「今日はもう、飼育舎でみんなの世話をするだけでいい。ゲイルは私が連れていくから」

主任に引かれながら立ち去る際、ゲイルは振り返って言った。

「高所恐怖症直セサインダッタラ鳥使イニナルノハ考エナオシナ。オ前サンノ人生、コレダケジャナイサ」

クロウはなにも返せなかった。ラーヴァを頭に寄せ、とぼとぼと移動する。

移動に使うレインアローと伝達に使うデューパールの二種は、昼夜問わず鳥たちが頻繁に出入

りするので、それぞれ専用の小屋を設けている。その横にある最も広い飼育舎には、それ以外のさまざまな鳥がケージや柵のなかに収まって暮らしている。その世話も重要な役目だった。

「ア、クロウ！ 今日ノ訓練ハ終ワッタノ？」

中庭に出ると、一羽のデューパールが寄ってきた。

「やあ、レイド」

デューパールは身体こそ小さいものの賢く、手紙を運ぶのに使われるのに最適とされている。その姿はかわいらしく、一緒にいるとほっとする存在だった。なかでもこのレイドは特別だ。

レイドはクロウが見習いとしてやって来るすこし前に生まれ、雛のうちから頻繁に世話をしていた。最近になって仕事を始めたが、気弱でまだ長距離の仕事は無理だと言われている。そういうところに自分を重ねてしまうときがある。

「うん。あとは大部屋の掃除だけして帰るだけだよ。デューパールの小屋当番は明日だね。レイドは？」

「僕ハネ、今カラオ仕事ナンダ」

「今から？」

クロウは思わず空と時計を見比べた。既に日暮れは近い。こんな時間にデューパールを出すことはあまりない。

「急ギナンダッテ。スミスサンガオ手紙書き終ワッタラスグ出発！ デモネ、オ返事ハ持ッテコナクテイイカラ、帰りハ楽ナンダヨ」

「そっかあ……。気をつけて行ってくるんだよ」

「ハイ」

レイドは小さな羽を動かし、事務室に向かって飛んで行った。それを見送っていると、ラーヴァが咎めるように言う。

「クロウ、特定ノ一羽トダケ仲良クナルノハ感心シナイカラナ」

「わかってるよ、ラーヴァ。でも、レイド見てると親近感わくんだよな」

ラーヴァはクロウの正面に移動すると、いきなり額を突いてきた。

「いてっ！」

「ソレデ、レイドニスラ追イ越サレタラ、オ前モウ終ワリダゾ！」

「うん……」

返事をしながら、クロウは飼育舎の扉を開けた。

食事の補充や清掃など、飼育舎の仕事のひとつひとは小さなものでも、全部こなすのは骨が折れる。そのせいか、先輩の鳥使いでも気が進まないと言う者が何人か存在する。クロウは、進

んで彼らの分の仕事を引き受けた。

普段役に立っていない申し訳なさもあるが、こういう地味な仕事が彼は好きだった。大変だけれども、隅から隅まで綺麗に整えて鳥たちに喜ばれるのは達成感があった。

ただし、鳥たちからいっぺんに話しかけられると一気に余裕がなくなる。

「ちょっと、みんな。順番、順番に話して！」

たくさんの鳥たちが生活している飼育舎は、クロウが入ると大騒ぎになる。そのとき抱えている不満や要望を彼に直接ぶつけてくるのだ。

「オイ、坊主！ ケージノ位置ヲ元ニ戻シテクレ。ココハ風ガ悪クテ嫌ダ！」

「今日ハ出タクナイ。当番変更頼ム」

「隣ノ新入り気ニ食ワン。サッサトドッカヘヤッテシマエ！」

各々が一度に好き勝手に喋ると幼学校以上の騒々しさになる。ただでさえ鳥の声は直接脳内に響くような感覚なのに、こうも一度にいろいろ言われると頭痛がしてくる。訓練で疲れたあとはなおさらそうだった。

「待ってったら。一羽ずつ！」

クロウも頑張るって声を張り上げるが、聞こえないのか無視しているのか、いっこうに収まる気配はない。

「オイ、野郎ドモ！ ウルセーダヨ、ウチノ相棒ガ困ッテルダロウガ！ コレ以上ギャアギャア騒グンダッタラ、焼き鳥ニシチマウゾ！」

ラーヴァが一喝する。一瞬静まり返ったかと思ったら、一斉に抗議の声があがる。

「裏切り者！」

「鳥デナシ！ ソレデモ翼持ッテルヤツノ発言カ！」

「黙レ！ ケタタマシク不平不満言ッテバカリノヤツノホウガヨッポド翼ノ誇リヲ捨テテルダロウガ！」

ラーヴァも負けずに言い返す。それで最終的にはみんなおとなしくなってしまうのだから、ラーヴァの発言力はありがたかった。元はクロウの父の相棒だけあって、鳥類局で飼育されている鳥たちの扱いは慣れたものだった。

ようやく落ち着いて本来の用事に取りかかろうとしたところで、扉が開く。

「おい、時間かかりすぎじゃないか」

「あ、ごめんなさい！」

先輩の鳥使いは、室内を一瞥し、息を吐く。

「さっき、廊下のほうまで聞こえてたぞ。どうしてすぐに収められないんだ」

クロウは黙ってうつむいてしまう。

「そうやって黙って待っていればやりすごせるとか思ってるんじゃないか？」

何も言わず、首の動きだけで否と答えた。

「お前がそうやって毅然としていないから、鳥たちになめられるんだ。飛行訓練だってそうだろう。もう見習いやってどれくらいになる？ いつになったら一人前になってくれるんだ？ うちにもう二人か三人鳥使いがいたら、お前、とっくに追い出されてるぞ」

それはクロウ自身も理解していた。自分がここにいられるのは、こんな頼りない人間でもいないよりはマシくらい人手不足だからだ。

「さっさと級持ちになってもらわないと」

見習いとして来てから、こういった叱りを何度受けたらろう。ささいなことでも満足にできないでいる。そうしているうちに時間ばかりがすぎ、在籍日数と能力の差は開くばかりだ。

クロウは自分が情けなかった。声だけ聞こえても意味はないのだと、ここに来てよくわかった。心をきちんと通わせられなかったら鳥使いとは呼べないのだ。

結局たいした成果もあげられず、その日の夕方、勤務を終えたクロウはとぼとぼと門をくぐって、自宅を目指した。

茜色の空には目もくれず、彼が地面に伸びた自分の影を見つめていると、ふいにすぐ横に影がもうひとつ現れた。

「よ！」

顔をあげると、友達のトーレスが立っていた。彼は初等学校からの同級生で、影を自由自在に操る影使いへの道に進んでいた。

十年に一人の逸材として注目されている彼は、一年も前に正採用となっていた。近ごろは、最年少で八級に上がるという噂も広まっている。

正式に専門職で働いている人々には、実績に応じて階級が定められている。一級から九級まであり、見習いを卒業した者は自動的に九級の位が与えられる。そこから八級になるまで、また数年単位の時間を要するが、トーレスはほんのわずかな期間でそれを果たそうとしているのだ。

性格や能力はクロウと正反対だが、面倒見がいいせいかトーレスはよく気にかけてくれる。クロウの数少ない友人だった。

「またひどい顔してるなあ。今日はなにがあった？ この時間だと残業もないよな、なんでそんな疲れた顔してるんだよ」

「なにも。なにもできなかつたんだ」

派手な失敗をした日よりも、なにも成功しなかつた日のほうが辛いときもある。また一日無駄に過ごしてしまったことにクロウは落胆してしまっていた。

彼の様子を見たトーレスは、クロウの手首をつかむ。

「ちょっとカフェにでも行こう。四月になっただろ、新作が出ているはずだ」

有無を言わず、引っ張って連れていく。その強引さが、今のクロウにとってはとてもありがたかった。

役所に付属しているカフェはジェミアで最も大きく、いつも人で賑わっている。

トーレスの言ったとおり、新商品が出ていたので、二人で同じものを注文した。

しばらくして運ばれてきたのは、桃色のクリームが美しい、紅果実のタルトだった。

四月に紅果実を口にしないのであれば、その一年にはなんの価値もない。昔、詩人がそう評したほど、春の風物詩となっている。

添えられた花卉は精巧な砂糖細工で、口に入れると花の香りが一瞬だけ広がる。見た目も味も

美しく、よく調和していた。

「これ見ると、春が来たって感じだよな」

トーレスの言葉に頷こうとして、クロウは固まってしまった。今朝、カレンダーをめくったときのことかふと頭に浮かんでしまう――次の春、自分はどのようにしているのか、と。

「おーい、クロウ？」

まったく反応を見せなくなったトーレスが、クロウの目の前で手をひらつかせる。

「ちょっと。私の作ったお菓子の前でそんな辛気くさい顔しないでくれる？ まるで不味いみたいじゃない」

いきなり声がして、少年たちは同時に飛び上がった。見ると、幼なじみで同級生のアンジェリカがムスツとした顔で立っていた。彼女は菓子職人としてここで働いている。

「ごめん、タルトは美味しいよ。また腕上げたね」

クロウは慌ててフォークを動かす。

「当然！ 級持ちになったんだもの」

同級生のなかではトーレスの次に優秀だった彼女は、冬に見習いを抜け出した。

誇らしげに胸を張ってみせたものの、アンジェリカの眉間にはしわがいつそう深く刻まれる。

「あと二回コンクールに入賞できたら、任せてもらえる仕事が増えるの。気合いも入るわよ。今は来月のことで頭がいっぱい」

この都市では、一年に数度、菓子のコンクールが催される。級持ちも見習いもこぞって参加するため、五月の大会はとりわけ規模が大きい。

「おお、さすがアンジェリカ。優秀だねえ」

トーレスの言葉に、アンジェリカは彼を睨む。

「まあ、それって嫌味よね。逸材さまはもう昇級も間近っていうじゃない」

「まあね、天才だから。俺に比べたらアンジェリカですら遅いくらいだ」

アンジェリカの苛立ちが目に見えて増した。

「あのね、影使いや鳥使いとちがって、菓子職人はコンクールでしかまともにポイントが稼げないの。これでも私だって最短でオリーブバッジもらえたのよ」

二人の服には、級持ちの証といえる金色のバッジが光っていた。ジェミアの紋章であるオリーブと、それぞれの職業の象徴を組み合わせさせた意匠のものだ。

これは身分証であると同時に、専門職に就く者たちの誇りでもあった。

「アンジェリカもトーレスもすごいなあ」

クロウはぼつりと呟く。とても同級生とは思えないほど、自分とは距離がある。

「クロウ、あんたはどうなの」

「え？」

「え、じゃなくて。今、点数はどれだけ貯まってるの？」

クロウは一瞬詰まったが、正直に言うことにした。

「五九三……」

「ええええ！」

アンジェリカの声が響く。周囲の注目が集まり、彼女はあわてて声を潜める。

「あと一年切ってるのに、どうするつもり？」

さすがのトーレスも顔がひきつっていた。

専門職見習いには、仕事の結果次第で評価点が与えられる。その合計が一五〇〇を越えると、晴れて正式に採用されるのだ。

ただし、これには期限が設けられている。クロウの場合は翌年の三月までにクリアできなければ、クビとなってしまうのだ。

見習いになって一年以上経つ。それでこの得点数はあまりに少なく、平均を大きく下回っている。

「ちょっと、いくらなんでも、それはないでしょ。なんでそんなのんびりしてるの」

「のんびりしてるわけじゃないよ。ただ、あんまりポイントもらえなくて」

アンジェリカは聞こえよがしに大げさに溜め息をついた。

「あんたって、昔から高いところがダメだったものね。木に上ったら下りられないし、城壁探検のときも一人だけわんわん泣いて」

「そ、それは昔の話」

「今、現在進行形でしょうが！」

それ以上はなにも言えなかった。

「別に、私は私で、あんたがどうなろうと構わないわよ。能力がなかったってことだもの。でも、おばさまにだけは心配かけないようにね」

母の顔が浮かぶ。彼女を喜ばせてあげたい、といつも思っているのにクロウは失敗ばかりだった。

店を出るとき、アンジェリカはクロウの家族用にと余ったケーキをいくつかこっそりくれた。彼女はクロウの母や姉とは仲がいいのだ。

「ううー、まだちょっと寒いな」

ちょうどジェミアは雲のなかに入ってしまったようだ。やや霏がかかったなかを二人で歩く。

「トーレス、今日はありがとう」

「別に。俺が甘いもの食べたかったのもあるし。本当はもっといたいけど、明日早番なんだ、ご

めんな」

「ううん、僕のほうこそ。今度、なにかおごるよ」

「見習いの安月給で？」

トーレスはけたけたと笑う。

「まあ、それは俺の昇級祝いに取っておこうかな。お前が級持ちになったら、俺もナッツフィッシュだろうがホワイトビーフだろうがなんでもご馳走してやるよ」

分かれ道で彼と別れると同時に、ラーヴァが空から下りてきて頭に乗る。

「ハーア、ドウセナラ別ノ店ニシテクレヨナ。コノアイダモ、アンジェリカノ嬢チャンガ邪険ニシテクルシ」

アンジェリカは菓子職人のせいか、動物の扱いには敏感で、仕事以外でもなるべく近寄らない。

「食べ物屋さんだからね」

「俺ハ綺麗好きダシ、歓迎サレテナイ店ニ入ラナイ分別モアルゾ」

「知ってるよ」

ついでに、アンジェリカが本当は動物好きなのもクロウはわかっていた。彼女は自分にも他人にも厳しいが、本当に意地が悪いわけではない、と。

気にかけてくれる人はたくさんいる。家族も、友人も、先輩も。ただ、自分がそれに応えられないだけ。

彼は首を軽く振る。

「僕、頑張りたいな」

「オウ、イツマデモ落ちコボレジャナ」

「うん」

ふと雲が切れる。姿を現した美しい月に照らされた石畳を踏みながら、クロウは帰路についた。

翌日、クロウはいつもよりも二時間早く起きた。ラーヴァのほうに後に目覚めたくらいだ。

どうせなら、と彼は出勤も早めることにした。すこしでも多く仕事をしたかった。

門をくぐり、廊下を進む。そして部屋に入ると、宿直の先輩が難しい顔をして帳面とにらめっこをしていた。

「おはようございます」

「おう、早いな」

「どうしたんですか？」

「いや……。クロウ、お前、昨日はデューパールの当番だったっけ？」

クロウは首を横に振る。

「だよな。うーん」

「……何か？」

「辻褄が合わない。おそらく、一羽戻らないままのがいる」

「ええ？」

クロウも帳面を覗きこむ。

記録によれば、現時点で不在なのは長距離で出されている三羽のみのはずなのに、小屋で数えてみると四羽足りない。

「みんなの話を総合すると、レイドが戻ってきてないようなんだ」

息をのむ。

記録によると、昨日は六羽が市のあちこちに飛ばされている。最も遅くに出立したレイドは、夕方近くに東支部への書類を届けに行ったはずだ。そして、夜には帰還したことになる。

「一羽出して、向こうの当直に聞いてみたんだけどさ、一応レイドは来たみたいだ。で、そのまま受け取るのを確認して、本部へ飛んでいったと」

書類の返事を持ってくる必要もない任務だったので、発覚が遅れてしまったようだった。

「まったく、間違っただか確認したことにして帰ったか知らんけど、まじめにやってくれよな」

なんとなく自分が責められている気分になってしまう。またクロウは視線を床に落とす。

「局長に報告しますか？」

「あーあ、最近専門職の風当たりも穏やかじゃないんだけどな」

そのときクロウが発した言葉は、本当に一瞬のひらめきによるものだった。

「僕、探してきましょうか？」

「え？」

「まだ始業まで一時間半あります。それで見つからなかったら局長の指示を仰ぎましょう。」

「ま、まあ。報告前に戻っていればそのほうが言いやすいけどさ」

「僕、行ってきます」

「……できれば、まだ内密で頼む。こっそりな」

うなずきながらクロウは局をあとにした。

右肩のラーヴァが声をあげる。

「オイオイ、本気カ？」

「このまま戻らなかったら問題だけど、今戻れば局内の注意ですむじゃない。それに、早く見つけたほうがレイドも……」

彼はまだ伝令鳥としては日が浅く、すこし甘えん坊な性格だ。そういうところが自分と似ているとクロウは思っていた。

外にずっとひとりぼっちでいたのならと思うと、心配でたまらなかった。

「ジェミア中、隈ナク探スッテイウノカヨ」

ジェミアは世界を基準にして見れば、けして巨大都市ではない。しかし、だからといって簡単に一周できるほど狭いわけでもない。

「事故が起きたのかもしれないだろう？ それなら発見は早いほうがいい」

「マツタク、面倒ヲ引キ受ケルコトダケハー人前ダナ」

クロウは耳を澄ます。しかし、そのなかにレイドの声はない。彼は朝日の上る東に向かって走り出した。

胸元から鳥笛を取り出して音を鳴らしてみるが、寄ってくるのは関係ない小鳥ばかりだった。

せっかくなのでそのまま声をかけることにした。

「ねえ、君たち。デューパールを見なかった？ これくらいの大きさで、レイドって名前なんだけど」

鳥たちは顔を見合わせる。

「サア？」

「東に向かったとか、東から中央へ戻ってきた、とか」

「デューパールナンテ珍シクナイシ」

その場の鳥が一斉に同意する。

「もしも見つけたら知らせてくれないか？」

「エー、イヤダヨ」

笑いまじりに言われる。

「お願い」

「俺たちハ別ニ保護対象ジャナイシ、ワザワザ鳥使イノ言ウコトナンカネー」

嘲る視線に、思わずクロウはびくついてしまう。それを境に、鳥たちの言葉がだんだんただの鳴き声に変わろうとする。クロウは必死に意識を集中させた。

「頼むよ、小さい鳥を放っておくような君たちではないだろ？」

「条件ハ？」

「え？」

「マサカ、無償デヤレットテ言ウンジャナイヨネ？」

先輩の鳥使いなら、なにか都合をつけたらう。しかし、クロウは自分の権限で彼らの満足する報酬が思いつかない。

このままでは時間が過ぎるばかりだ。気持ちばかりが焦る。

協力は諦めてしまおうか。しかし、同じ鳥である彼らがいれば、搜索範囲は広げられるし、ラーヴァの負担も減る。

クロウは反射的に口を開く。

「もしも君たちに今後なにか問題が起こったときは、僕が助けます」

「ハア？」

笑い声が響く。

「オ前、見習イダロ？ ナニガデキルンダ？」

「今具体的にはなにもできない。だって、君たちは僕がお礼に寝床や食料を与えても納得しないでしょ？ だから君たちが困ったときに力になるよ！」

勢い任せの言葉に、顔を見合わせる鳥の面々。

クロウは心臓の音が大きくなるのを感じた。こんなこと言ってしまっただ大丈夫なのか、不安でしかたがなかった。

「ソソナノ空手形ジャナイカ」

「バッカミタイ」

「イイヤ、大丈夫。コノ俺ガ保証スル」

それまで黙っていたラーヴァが突然口を開いた。

「コイツハ確カニドンクサイケドガ、真面目デ約束ハ時間ガカカッテモシッカリ守ル。ソレダケハハッキリ言エル」

皆が顔を見合わせて沈黙するなか、一羽の鳥が前に出る。

「ラーヴァ、ソノ言葉本当ニ信用シテイイカ？」

「イトモ」

「.....オ前ニハ昔世話ニナッタカラナ。ソレニ免ジテ今ハ協力シテヤロウ」

「あ、ありがとう！」

「礼ハ見ツカッテカラニシテモラオウカ。ソレト、サッキノ笛下手ニモ程ガアル。モット練習シロ」

その鳥が飛び立つと、他の鳥が慌てて追う。彼らは東を中心に広がっていった。

「上出来ダナ、クロウ。アイツサエ動ケバアトノヤツラハツイテクゼ」

「あの鳥は？」

「マア、昔カラノ顔ナジミダ。オ互イ長生キダカラヨ、ソレゾレノ縄張りニ顔ガ利クダケノコトヨ」

クロウは自分も駆け出しながら言う。

「ラーヴァ、ありがとうね」

「別ニ。ジャア、俺モ空カラ探スカラ、オ前ハ地面頼ムナ」

ラーヴァは風に乗って上昇した。その優美な赤い翼を見つめながら、クロウは溜め息をこぼす。

今、鳥たちが協力してくれたのは、クロウの器量ではない。ラーヴァの器量だ。

彼は己の無力さを感じてる。だからこそ、今はできる限りのことをしたい。

日が高くなりつつあった。時計を見ながら、東方面を中心に探す。

デューパールは、夜目はそこそこ利く。暗闇で迷っている可能性はあまりない。

考えられるとしたら、なんらかの理由で飛べなくなったか、どこかで捕まってしまったか。

クロウはもう一度鳥笛を鳴らす。しばらく耳を澄ませてみたが、レイドの声はない。

「クロウ、東ノ大通リニハイナイミタイダゼ」

路地裏を探していると、ラーヴァがやってきた。他の鳥たちの報告をまとめてきてくれたのだ。

「城壁周辺モ可能性ハ低ソウダ」

「まさか、外に出たってことはないよね？」

「マダレイドニハ無理ダロウ」

「イタァ！ チビッコイタヨ！」

一羽の鳥が急いで下りてきた。

「コッチコッチ」

くちばしで服をつままれ、引っ張られる。

そのまま進んでいくと、かすかに聞こえる声があった。

「助けテェ……」

小さいが、まちがいなくレイドの声だった。

「オイ、クロウ！ アソコダ、上ヲ見ロ！」

「なんであんなところに……」

見上げて、クロウは絶句した。

ラーヴァが示したのは、旧市庁舎の見張り塔だ。数年前に老朽化のため閉鎖され、役所としての役目は終えているが、ジェミアのシンボルとして今でも愛されている。

レイドはその軒にいた。まさに屋根の縁というべきところで、彼自身体勢が不安定で今にも落ちてしまそうだ。

「い、行かなきゃ！」

とっさに走り寄ろうとして、クロウはすぐに立ち止まってしまう。

周辺を取り囲む公園は解放されているが、旧市庁舎の建物自体は施錠されている。

「あ、鍵！ ど、ど、どうしよう！」

現在の中央役所に行けば、管理用の鍵があるはずだ。

いったん戻るか。クロウはうろたえて周囲をきょろきょろと見渡す。そのとき、視界を赤い影が駆け抜けた。

「コッチダッタラ行ケルゼ！」

ラーヴァの誘導で建物の横手に回る。

扉は施錠されているが、クロウほどの背格好ならぎりぎり上れて入れる窓があった。ラーヴァが近くの通風口から入り、ねじ式になっている鍵を器用に開けた。

クロウは背伸びして窓枠に飛びつき、腕に力をこめて自分の身体を持ち上げた。なんとか開けて窓のふちに肘をつき、そのまま身体を滑りこませる。

「ラーヴァ詳しいね」

「ソリャア、元職場ダカラヨ」

そのまま内部もラーヴァが案内する。建物のなかはとても静かだった。

いくつもの部屋を通り抜け、階段を上がり、ようやく塔の最上部にたどりつく。

窓から顔を出すと、地面から見上げたときに思い描いていたよりもずっと高い。

風が吹き、思わず一步後ろに下がってしまう。呼吸が荒くなるのは、ここまで走ってきたからだけではない。

怖い。こんなときでもまず出てきた言葉はそれだった。

とにかくレイドを保護しなくては。その気持ちだけでなんとかもう一度顔を出して、手を伸ばす。

「レイド」

呼びかけてみるが、焦ってしまって意識を集中させられない。じっと見つめているはずなのに

、視界にもやがかかったようだ。

「レイド！」

唇をとがらせて口笛を吹こうとするけれども、まったく音が響かない。かすれてしまう。

レイドは首を動かすだけで、こちらにやってこない。

もう少し近くに寄るべきだろうか。クロウは唾を飲み込む。

もしもあと少し身体を外に出したら、落ちるかもしれない。そう考えると同時に膝が崩れる。

慌てて窓につかまった。

その様子を見たラーヴァは、まず自分が近寄って様子を確認する。

会話するような声は聞こえるが、内容がわからない。クロウは深呼吸をして乱れる心を静める

。

「ウン」

ラーヴァは困り顔で戻ってきた。声がわかるとほっとする間もなく、悪い知らせが告げられる

。

「チョット怪我シチマッタミタイダ」

「え？」

「自分じゃ飛べナイナ、アレハ」

クロウは無意識のうちに立ち上がって、身を乗り出した。

「レイド！ 大丈夫？」

「クロウー、ココー、ココニイルノー」

クロウはラーヴァや集まってきた鳥たちを見る。いくら彼らでも、さすがに安全なところまでレイドを運ぶのは容易ではない。

望ましいかつ迅速に解決できるのは、クロウ自身が直接助けに行くことだが……。

よせばいいのに、クロウは芝生を見下ろす。ちょうど人気がないのは不幸か幸いか。誰もおらず静まりかえっている。

そのなかにある、石畳に囲まれたまっさらな緑の絨毯。クロウにはそれが、口を開けた魔物に見えた。塔の影が重なって暗くなっているから、なおさら不気味に思ってしまう。

「誰カ呼ブカ？」

クロウは青い顔でレイドを見る。あの位置ではそのうち落ちるかもしれない。それまでに応援を間に合わせるか、それとも――。

クロウは拳をぎゅっと握った。

「僕が行くよ」

応援を呼んで、助けてもらって。その間、自分は何をしている？ クロウは己に問いかけた。

すぐ行って助ければそれで済む話だ。ここまで来て、時間も手間もかけさせるくせに肝心の自分は何もしない。それがいやだった。

「オイオイ、ラーヴァカラ聞イテルゾ。高イトコロガ怖インダッテ？ 俺タチダッテ運ベルカモシレナイゾ」

「いや、人の手のほうが安全だ」

地上までの距離は遠く、足場は頼りない。あそこまで行くのかと考えただけで、全身がふるえた。

高いところは怖い。足がすくむ。けれども、クロウはどんなに不出来でも鳥使いだ。自分よりも鳥のことを第一に考えなければならない。

奥歯をかみしめて、彼は頼りない一步を踏み出した。

すぐに風にあおられる。ぎゅっと目をつぶってしまうと余計に平衡感覚がなくなり、ゆっくりと世界が回るような気分になった。そのまま真っ逆さまに落ちてしまう映像が何度も脳裏をよぎる。

進むには、きちんと目を開けるしかなかった。

身体をぴったりと壁につけて、ようやく歩けるくらいのスペースしかない。クロウは慎重に、ゆっくりと移動した。

不意に足が宙を踏むと全身が跳ねる。冷たい風と恐怖心で視界はどんどんにじむが、それでもクロウは止まろうとしなかった。

たった数分がとても長かった。

二歩、三歩、四歩……。歩みは遅くても確実に距離を縮めていく。

そしてとうとうレイドの目の前にたどり着いたときには、魂までが麻痺したように身体が硬直していた。そのまま碎けて崩れてしまいそうになるが、それでも最後の力をふりしぼる。

「レイド、来るんだ」

わずかなスペースに足をかけて踏ん張り、手を伸ばす。

レイドはひょこひょここと弱々しい足取りで移動し、クロウの手のひらに乗った。

「クロウー、アリガトオ。モウネ、スッゴク心細カッタダヨ。早くオウチ帰りタイ……」

「よかった……。怖かったね」

ほっとしたその瞬間、滑って足にかかっていた力が一気に抜けた。

「うわあああ！」

「オイ、チョット、クロウ！ レイド！」

内蔵がひっくりかえるような落下の感覚。遠ざかる塔の屋根。レイドだけは、と小さな身体をかばうように腕を動かす。

「クロウ！」

誰かが名前を呼んだ。ラーヴァの声でもレイドの声でもない。

身体になにかが巻きつき、勢いが止まった。そして、柔らかい何かが彼の身体を受けとめた。

「え？」

「間に合ってよかった」

ほっとした顔を浮かべながらやってきたのは、トーレスだった。状況を飲みこめずにクロウは呆然とするのみだった。

「トーレス？」

身体を動かそうとすると、バランスを崩して倒れこんでしまった。しかし、まるでプールに浮かんでいるような感覚だ。彼の下にあるのは、巨大な真っ黒の影。

クロウはあわてて手のなかを確認する。同じく自分たちに何が起きたのか把握できていないレイドが、ぽかんとくちばしを開いて固まっていた。

「無事、だった？」

「おいおい、びっくりさせるなよ。大丈夫か？」

トーレスはクロウの手を引っぱって立ち上がらせようとしたが、足元が安定しない。トーレスが一言呪文を唱えると、地面は元の石畳に戻った。

「これでよし、と」

「あ、ありがとう。今のは？」

「影の質を変えただけだよ。あー、早番でよかったー。お前、危なっかしすぎるよ」

自分の身体から離れた影の遠隔操作は容易ではない。しかも、こんなに大きな影を変化されるのは高等技術だった。それをいとも簡単にやってのけるトーレスは、確かに別格だ。

「トーレスってすごいなあ」

魂が半分抜けたクロウが吐息交じりにつぶやくと、トーレスは声に出して笑う。

「別に、これくらい。本気出せばもっとすごい技見せてやれるし。それに、お前だってできないって言いながら、一応六〇〇も貯めたじゃん。残りは九〇〇もないんだからさ、半年以上あれば大丈夫だって」

確かに彼だったらあっという間に得点を重ねてクリアできる数字だ。けれども、クロウにとっては途方もなく遠く思えた。

「それはトーレスだからだよ。……僕とは全然違う」

その言葉を聞いた彼は、クロウをまっすぐ見つめる。いつになく真剣な表情だった。

「俺は影を使える。お前だって鳥の声が聞こえる。同じだよ。素質がまったくないんだったら、

見習いにもなれないんだぞ？ もっと自信持てよ」

でも、鳥の声が聞こえるだけでは何の役にも立たない。

そう反論しようとする、バサバサと音を立てながらラーヴァが降りてきた。

「フー。マツタク、危ナッカシイナー。サスガノ俺モ、モウオ前ノ体ナンテクワエラレナインダカラ、シッカリシテクレヨ」

「ご、ごめん……」

しゅんとするクロウの肩を、トーレスが叩く。

「無茶はほどほどにな。今回は俺が助けられたけど、いつも側にいるわけじゃないからな」

「うん」

「でも、お前すごいじゃん。高所恐怖症治ったの？」

クロウは静止した。ようやく我に返ったレイドも小首を傾げた。

「……わからない」

今でも先ほどのことを考えると寒気がした。

「マア、火事場ノ馬鹿カッテトコロジャナイカ？」

「え、そう言っているのかな？ 僕、全然力出してなかった気もするけど」

「まあ、クロウが高いところ上っただけでも上出来だよ。さ、早く帰れよ。俺が関わったなんて言うなよ？ 仕事サボったってばれるから」

見回りに戻らなければならないというトーレスと別れ、クロウたちは鳥類局に戻った。

まさかあいつが、と級持ちの鳥使いたちは目を丸くした。クロウ自身、先輩たちでなく自分が役目を果たした事実信じられない思いだった。

こうして、無事にレイドを連れ戻したことで、久しぶりにまとまった得点をもたらすことができた。

仕事を終えたクロウは、影使いが所属している警護局へ向かう。カフェでケーキをおごるだけでは全然足りないが、友人には今の自分にできる精いっぱい礼をしたかった。

あのとき、トーレスがいなかったらどうなっていたらろう。考えただけで怖くなる。たまたま彼が近くにいたから、自分もレイドも無事でいられたのだ。

彼だけではない。ラーヴァや他の鳥たちがいなければ、クロウはレイドを助けるするどころか発見すらできなかったかもしれない。

まだまだ自分一人の力でできることは少ない。それを思い知らされた日だった。

ちょっとやそっと褒められてものんきに喜んでいる場合ではない。それでは一人前とは言えないのだ。

「もっと、しっかりしたいな……」

クロウのポイントは現在六一八。残り八八二。卒業期限まであと十一ヶ月。

季節というものは、すこし気を抜いている間に移り変わっていく。

ついこの間までまだ羽織るものが必要だったはずなのに、いつのまにか薄着でも平然と過ごせるようになっていた。

とうとう春用の上着にすら袖を通さなくなったクロウが朝出勤すると、先輩たちが数名、あわただしく動いていた。

「おはようございます、どうしたんですか？」

「ああ、おはよう。カイトさんが今日帰ってくるとかで、いろいろ整理」

クロウは目を丸くした。

「あれ、来週じゃないんですか？」

「いきなり切り上げたんだとよ。まったく、相変わらず気まぐれだなあ」

先輩が持ち上げようとした荷物を支えながら、クロウは呟くように言う。

「一年以上、下にいましたよね」

「ああ、鳥使いの普及目的だからな。四ヶ国はまわったんじゃないか？」

クロウはカイトの予定を頭のなかで数えて確認し、溜め息をついた。彼のことは苦手だが、仕事面に関して言えばむしろ敬意を持っていた。

ジェミアは他国からの旅行者が大きな収入源となっている。専門職はジェミア観光の柱であった。特に鳥使いや影使いなどはこの都市にしかおらず、注目される存在だ。

鳥使いも、鳥相手の仕事だけでなく、外部にジェミアをアピールする任務が発生する。ときには、今回のカイトのように地上にて鳥使いがどういうものかを広く知らしめる活動も行うのだ。

他に鳥使いの仕事といえは、学者らと協力して研究を行うというものがあるが、クロウはこちらのほうがまだ気楽に思えた。もともと自分は外部の人間相手の仕事を担ってはいないが、人前であれこれするのは緊張する。

ましてや、ジェミアを長期間離れるのはとても恐ろしく思えた。地上にかすかな憧れはあっても、クロウにはまったく別の土地に赴く勇気はなかった。

仮に地上出張の命が下されたときのことを考えながら、机を動かす。

そのうちぼつぼつと他の鳥使いも出勤してきた。そろそろ朝礼かというときになって、いきなり扉が開いた。

「くうー、やっぱり故郷が一番だねえ。地上はどうも重苦しい」

現れたのは、枯れ草色の長い髪をくくった青年。彼がカイトだ。

鳥使いたちは次々に挨拶する。気後れはしたものの、クロウも一応その輪に加わった。

「おかえりなさい、カイトさん。長いお仕事でしたね」

カイトはクロウに目を留めると、おおげさに目を見開いてみせた。

「あっれ、お前、まだいたの？ とっくにクビになったかと思った」

彼の言葉に、その場にいた鳥使いの何人かは笑顔を作り、何人かは顔をしかめた。

「俺が局長なら、とっくに追い出してるんだがな」

彼は嘲笑をはらんだ声で言い捨てる。

カイトは二十代半ばにして、十歳以上上の先輩に交じって五級までのぼりつめた実力者だ。いずれは局長になると目されている。しかし、その傲慢な性格を嫌う人間も少なくない。

「あ、えっと……」

彼と顔を合わせるといつもこうして絡まれる。反射的にクロウは下を向いてしまった。

カイトはおおげさに肩をすくめた。

「本当に見るだけでうんざりするツラだな。俺がせっかく鳥使いの地位を上げようっていうのに、同じ職業のやつに足引っ張られちゃたまらない。飛べるものも飛べなくなる」

「カ、カイト……ヤメヨウヨ。俺ガラーヴァサンニ怒ラレルンダカラサ」

カイトの肩で小さくふるえているのは、彼の相棒のリフルだ。

チラチラとこちらに視線を送ってくる彼に、ラーヴァは苛立った声を出す。

「オイ、リフル！ オ前ダッテコノ世界長インダカラ相棒ノ躰クライチャントシテオケ！」

「ゴ、ゴメンナサイ……」

萎縮するリフルを見て、カイトは口を開いた。

「クロウ、お前の鳥のほうこそ躰がなってないぞ。先輩の鳥への礼儀くらい仕込んでおけ。さすがにそれくらいはできるだろ」

彼は蔑むような視線をクロウに送り、横柄な態度もそのままに外へ出て行ってしまった。

扉が閉まると同時にラーヴァは爆発したように鳴いた。

「ケッ。ナンダヨ、アノ鼻タレ小僧ガ！ アイツダッテ新人ノコロハ別ニタイシタコトナカッタクセニ！」

ラーヴァはくちばしを開きつつ羽を思いきりばたつかせる。

「ラーヴァ、そういうことは言わないほうが」

「言イタクモナルワ！ 先輩ノ鳥ヘノ礼儀ダト？ オ前ハドウダッテ話ダヨ。モトモト俺ハロビンノ相棒デ、アイツラヨリモココデノ仕事ハ長インダゾ！」

キイキイとわめくラーヴァに、苦笑しながら局長が寄ってきて声をかける。

「まあまあ、ラーヴァ。お前にはロビンが亡くなってクロウが入ってくるまでは何年かブランクはある。そのあいだ、彼らはちゃんと仕事をこなしてくれたよ。だからその点は多めに見てやってくれよ」

「パロット！ 一応、俺ダッテ顔ハチョクチョク出シテイタゾ！ ソレニ、イクラアイツガソコソコ仕事デキタトシテモ、アノ態度ハナイダロ。昔ダッタラー」

「昔は昔、今は今。今のお前はクロウの相棒だろ？ クロウのためにも少し引いてやってくれよ」

それでもまだラーヴァは納得できていないようで、ぶつくさ言う。クロウは俯いた。

「ごめんね、ラーヴァ」

「ハァ？ オ前ガ謝ッテドウスルンダ！ 問題ハアクマデモアイツダロウガヨ！」

ラーヴァが興奮すると、その羽毛の色とあいまって炎のように見える。

彼がこうして怒ってくれるのはありがたいが、それ以上にクロウは申し訳なく感じていた。

最近先輩たちから小言を言われる回数が減ったものの、まだ自分の未熟なのだと思い知らされるのだ。

着地した瞬間、クロウはずっと止めてしまっていた呼吸を思い出す。胸が激しく膨らんではしぼみ、ふいごになってしまったようだ。

けれどもここで終わりにはしない。今の飛行の感覚はなかなか良かった。今日のうちに身体に覚えさせておきたい。

「ゲイル、もう一回」

「ハイヨ。マツタク、老体ニアンマリ無茶サセナイデクレヨナ」

言いつつも、その口調は以前よりもずっと優しくなった。それがクロウは嬉しかった。

レイドの一件以来、クロウは飛行訓練に力を入れるようになった。まだ腰は引けているし、時々飛び降りたくなるような衝動にも襲われるが、一ヶ月気を引き締めて続けているうちに、短時間の飛行ならなんとか形になってきた。

「でもなあ、まだ下との往復は難しいか」

訓練終了後の主任の第一声に、思わずクロウはゲイルの頭を見下ろす。

レインアローを操って地上へ赴くのも、鳥使いの業務のひとつだ。急を要する用事も多いので、速度も安全性も求められる。

ようやくジェミア内での短時間飛行に慣れてきたクロウには、まだ町の外に出での活動は荷が重かった。

「主任、僕、がんばります」

「腹くくって集中練習して、ようやくここまでだろ？ 今だって顔色が悪いじゃないか」

ふとクロウは自分の頬に手をやる。体温をまったく感じない。指で触れていることすら気のせいに思えてくる。

「無理に進めて事故でも起こすほうが、仕事できないことよりもよっぽど大迷惑だ。まあ、お前は成長してるよ。でも、今までよりはってだけだ」

主任は天を仰ぎ、時計を確認する。

「時間か。今日の訓練はここまでにしよう」

鳥たちの小屋の用事を言いつけ、主任はゲイルを連れて去っていく。

それを見送りながら、クロウはぽつりと言う。

「まだまだかあ」

押し殺した笑い声が聞こえる。訓練場の端に、カイトが立っていた。

「ああ、ああ。見てられないねえ」

クロウはどう反応したらいいのかわからなくて、ひとまず会釈だけする。

「お疲れさまです……」

「お前、もう十三だっけ？ 今までなにやってたの？」

クロウはなにも答えられない。

「正直さ、最初からだめなやつだって思ってたんだよお前のこと。ロビンさんの息子っていうから多少は期待できるんじゃないかって、前情報はあったんだけどさ」

カイトは芝生を踏みながらこちらに向かってくる。その肩ではリフルが居心地悪そうにしながらラーヴァの様子を窺っていた。

「いくらなんでも、こんなに使えないやつだとなあ。今も見ていたけどさ、一年でどれだけできるようになっているかと思ったら、あの程度か」

彼の言葉は鋭く尖っている。だから、まっすぐクロウの心に突き刺さるのだ。

「あの、教えてくださいませんか？ どうやったらちゃんと飛べるようになるのか」

「知るかよ」

カイトは顔をゆがめる。

「手綱を握ってちゃんと立つ。そんな当たり前のことだけだって。レインアローの背は狭いなんて言わせないからな」

ゲイルはレインアローのなかでも年長者で、体は平均よりもやや細いが、それでも大人の二人や三人くらいなら乗せられる。

「そこまでの高所恐怖症はもう病気だろう。辞退してもいいんじゃないか？」

「それは……」

「いいか、いざというときは自分よりも同乗者の安全を優先させなきゃいけないんだよ。それなのに、単独飛行ですらまともにできない人間なんて意味ない。そんなの外部に見られたら、俺の一年間がパァだ」

今まで我慢していたラーヴァもさすがに口を挟む。

「オイ、カイト！」

「お守りは黙ってろ！」

爆発音のような声に、クロウは思わず両肩を跳ねさせた。

「こんなどうしようもないやつが鳥使いなんてさ、いい迷惑だ。俺の美学に反してばかりだ」

彼の緑色の目がずっと細くなる。

「それともこう言ってほしいのか？ おお、クロウくん、君は本当に気の毒だ。高いところが怖いのはしかたない、ジェミア内の勤務だけやればいいよ」

見事な棒読みだった。

「そりゃあ、鳥の声が聞こえるなら確実に鳥類局勤務に回されるけどさ、そのまま市民を選んだ人間だったんだ。もしも役目を果たせないなら、諦めることだって責任のひとつだ。望まれてもいないのに、中途半端な仕事ぶりだけされても迷惑でしかないんだからな」

「それは」

「主任から聞いたけどさ、最近になってようやく訓練に力入れるようになったんだろ？ 俺からすると遅すぎるね。そういうところが気に障るんだ。ロビンさんもそりゃあ泣きたくなるんじゃないか？」

クロウは悔しくなった。カイトはかなり辛辣だが、そう言わせる理由があるのだから。

「まっすぐ立つ、手綱は中央、心を乱さない。あとは、レインアローに的確な指示をするだけだ。それすらできないんなら、鳥の声が聞こえてもお前には向かない仕事だったってことだ」

吐き捨てるように言うと、カイトは大きな足音を立てながら去っていった。

彼の言葉に、なにひとつ反論できなかった。クロウは拳を握る。

「僕、どうして最初からこれくらい一生懸命やろうと思わなかったんだろう」

努力は認めてもらっているし、少しだけであっても成果だって出ている。けれども、去年から今のような訓練を続けていたら、もっともっと先まで行けたはず。そう思えてならなかった。

心を満たす水に悔しさが落とされ、溶けて濁っていく。

「時間が経ってから気づくんだ。僕、そのときは頑張っているつもりでも、あとから考えると全然頑張ってなかった。もっと一生懸命になれたはずなのに……いつもそうだ」

見習いになったときから、今くらい必死に、限界まで努力していたら、きっとポイントだってもっと多く貯まっていたはずだ。そう考えると胸が痛くて涙が出る。

すでに緞持ちになっている同級生たちは、見習いになった当初から各々の仕事に真摯になり、真面目に研鑽を重ねていたのだろう。それに気づくと、クロウは自分が恥ずかしくてしかたがなかった。友人たちに心配される資格すらないのだと。

「イヤア、一年前ノオ前ハアレガ限界ダッタロ」

ラーヴァがクロウの紅茶色の髪の毛に突っ込むように降り立つ。

「マダヤレタッテ思ウノハオ前ガ成長シタカラダヨ。成長シタ分ダケ、モットヤレタッテ後デ言イタクナルモンサ」

「そうかな？」

「ソウダトモ」

頭上でラーヴァは頷くが、クロウには見えていない。

「過去ノオ前ハ過去ノオ前。確カニアマリ出来ハ良クナカッタガ、ソレナラ今カラガンバレバ イイ。ソシタラ未来ダッテ明ルイゾ」

ラーヴァは相棒の頭を思いきり蹴って飛んだ。彼の赤は空の色によく映える。

それを見つめながら、クロウは、不甲斐ない自分を恨んでいる場合ではないことを悟る。

けして怠けていたわけではない。しかし、いつかどうにかなるのだと心のどこかで甘えていたのは事実だ。

まだ見習いでいられるうちにそれに気づけた。それを自分への及第点とした。

いつものとおり鳥たちのわがままを聞きながら彼らの世話をしたあとは事務仕事。それをなんとか一区切りつけて、帰ろうと扉を開けると、トーレスが立っていた。わざわざ市庁舎の反対側にある警護局から鳥類局まできたらしい。意表をつかれて固まるクロウを気にせず、彼は右手を上げる。

「お疲れさん。どうよ、調子は」

「うーん、ぼちぼち、かな」

トーレスは顔をくしゃつかせて笑った。

「上等上等、今日給料日だろ、カフェ寄ろうぜー」

だいぶ日が伸びた空の下を二人で並んで歩く。鳥類局からカフェまでは、一度屋外に出る必要があるがそれほど遠くはない。

「トーレスはさ、大人になったら『一杯引っかけて帰ろうぜ』とか言うつもりでしょ」

クロウは苦笑した。

「もちろん！ あー、子どもって辛いな。俺たちだって仕事してるのにさ」

都市の条例により、十五歳以下の少年少女だけで夜間に食堂に入るのは禁止されている。それは専門職に携わっている彼らも例外ではない。

夕方のカフェが唯一彼らに許された寄り道なのだ。

「しょうがないよ。僕たちまだ十三歳だもん」

「あーあ、年齢ってやだねえ。まだまだ権限も信頼も少なくてさ。やりたいことはたくさんあるのに、若いて理由だけでなにもできないんだから」

トーレスの言葉を聞きながら、自分の場合は年齢が理由ではないなと思うクロウであった。

カフェでお決まりの席に通された二人は、予定どおり本日のおすすめ品を注文する。それからすぐに、糖瓜と黄果、杏、粒薔薇をふんだんに使ったゼリートライフルが運ばれてきた。透明なゼリーの欠片が涼しげで、迫りくる夏を感じさせる。

「あ、いらっしゃい」

給仕役はシャーロットという名の少女だった。彼女はクロウたちの同級生で、アンジェリカと同じく季節菓子職人の道を進んでいる。まだ見習いだが、もう少しで級持ちになれるという。

「今日はシャーロットか。トライフル作ったのも？」

「ええ。まあ、ちょっと感想言ってくれない？ アンジェリカのケーキ食べ慣れてる二人に出すのは尻ごみするけど」

スプーンでグラスの中身をすくって口に入れる。舌の上でクリームを溶かしながら、ゼリーと果物の食感を噛みしめる。

「うん、美味しいけどさ」

トーレスは首を捻る。

「無難ていうか、定番の味って感じ。まあまあかな」

シャーロットは苦笑いする。

「職人殺しな感想ね。クロウは？」

「そうだなあ。クリームもゼリーもフルーツも生地も滑らかっていうか。コリコリしたのがあると面白いかも」

「なるほどー」

シャーロットは小さな紙に意見を書き留める。

なんだか、いつもとちがう。落ちつかない。

クロウは厨房があるはずの、奥の扉を見やる。

「アンジェリカは奥？」

「ああ、今日はお休み。……最近調子悪いから」

「え、どうして？」

知らないのか、という呆れた視線をシャーロットは寄こす。

「五月にコンクールがあったでしょ？ そのとき、アンジェリカ、入賞できなかったの」

「あー、確かにあいつの名前なかったな」

狼狽するクロウとは対照的に、トーレスはのんきにトライフルを掻きこむ。

「え、そうなの？」

「クロウ、あなた幼なじみでしょ？ そういうのはちゃんとチェックしておきなさいよ」

自分のことに精いっぱい反省する。最近は顔を合わせない日が続いただなんて言い訳しても虚しい。

「ずっと入賞はしてたからね。それでいきなりこれだから、あの子結構へこんじゃってさ」

「ま、あいつプライド高いからな。たまには挫折も必要なんじゃないの？」

「あら、トーレスこそ挫折するべきではなくて？」

「俺、天才だからさー、挫折したくてもできないんだよねー」

高らかに笑うトーレスの頭を、シャーロットは指で弾いた。同学年の女子は彼に容赦ない。

「すぐに回復するといいんだけど」

シャーロットの言葉は、クロウの思いでもあった。

アンジェリカはいつも活発で、文句を言いながらもテキパキと問題を対処する。そんな彼女が

仕事に支障が出るほど沈んでいるとは、めったにないことだった。

「僕……近所だし様子見に行ってみようかな」

「やめとけやめとけ」

スプーンを持った手を左右に振りながらトーレスは顔をしかめた。

「へたに近づくと逆鱗に触れるぞ」

シャーロットは瞬時にトーレスの後頭部を狙って拳を振りおろした。そして、クロウに向き合う。

「まあ、私も今はそっとしておいたほうがいいと思うわ。へたに気を使われると、もっと頑なになっちゃう子でしょ」

彼女の言うとおりであった。妙なふるまいで刺激すると逆にこじれてしまう。

トーレスの言葉に従ってしばらくの間そっとしておくことにしたクロウだが、アンジェリカへの心配はひそかに募っていった。

その日、鳥類局はいつも以上に忙しい状況だった。翌日から五日間、局はほぼ空になる。地上の鳥類学会との会議で、鳥使いたちが出払うのだ。

残るのは、クロウを含めて三人だけだった。

「おい、そこの。ちょっと来い」

珍しくカイトがまともな話しかけかたをしてきた。クロウは緊張しながらも側に寄った。

「ほい、これとこれとこれと、あとこれも」

いきなり書類をいくつもリズムカルに渡される。

「え、こんなに？」

山となった紙の束を腕でなんとか支えながら、クロウは目を丸くした。それを見て、カイトはにやりと笑う。

「あたりまえだろ」

不敵という言葉がぴったりの表情だ。

「レインアローに乗れないやつなんか、置いておく価値はない」

そう言われては返す言葉もない。

カイトは人差し指をまっすぐクロウに向ける。

「それ、俺たちが帰るまでにやっておけよ」

驚いたクロウは、うっかり書類を落としかけてしまう。

「え、五日で、ですか？」

「でなきゃお前なんか頼むものか」

見下した視線が突き刺さる。

「それくらいしてくれなきゃただの給料泥棒だからな。そうだろ、級なしくん」

カイトの襟でさりげなく光るオリーブのバッジを見てから自分の胸元に視線を移すと、なにも言えなくなってしまう。

彼はそのまま出発の準備のため離れていく。クロウはひとまず預かったものをすべて自分の机の上に置いた。

五日間、ほとんどの業務がストップしてしまうということで、事務仕事は多いのはしかたない。明日からと言わず、今日やれることは、会議の用意を手伝う合間にさっさとやることにした。

ちょうど時間が空いたので集中して書きものをしている最中、いきなり肩に手を置かれて悲鳴をあげてしまった。

「おいおい、こっちがびっくりだよ」

呆れた声は聞き慣れたもの。

「あ、トーレス……」

彼は手にいくつかの紙束を持っていた。

「ほい、これうちの部署からの届け物……って、ええ？」

トーレスはクロウの机の上を見て目を見開く。クロウの座高よりもさらに高い山が出来上がっていた。

「なに、これ、ぜんぶお前の仕事？」

「うん……」

トーレスは呆れたような声を出す。

「いくらなんでもこれは多すぎないか？」

「先輩たちがいない間は、僕がその分働かなくちゃ」

トーレスはこっそり耳打ちをしてくる。

「俺にできることある？」

彼は事務仕事もそつなくこなす。一瞬ありがたく思ったクロウだが、首を横に振る。

「他の部署の人には」

「あ、そっか」

本当だったら、手伝ってくれると言う人全員の手を借りたい。しかし、それではいけないのだ。

「……また今度さ、カフェに一緒に行ってよ」

「おう、お疲れ会でもしような」

出ていくトレスに手を振りながら、クロウは机を見渡す。

レインアローに乗れるとは堂々と言えない今は、こういう仕事をするだけでしか貢献できない。理想は遠く離れていて、ついそちらへと走りだしたくなるけれど、だからといって自分にできることを置き去りにしていたら意味がない。それなら軽蔑されるに決まっている。

こめかみを押さえて気合いを入れ、クロウは書類の山と夕方まで格闘しつづけた。

三人体制の初日、ラーヴァはいつもより早めにクロウを起こした。こんなときに寝坊なんかしてられない。

雑務が溜まっているのは憂鬱だが、それだけに集中できる環境にはなっているので、最悪でもなんでもない。そう思いながらいつものように事務室の扉を開けた。

「おはようございます」

すでに居残り組の先輩、シーガルとクレインが来ていた。神妙な顔でなにかを話している。

「どうしたんですか？」

「おお、来たか。さっそく問題発生だ」

クレインがげんなりとした口調になる。

「ワイズ家が急にお見えになった。現在はホテルのサロンでのんびりしているらしいが」

「え、ワイズ家の方ですか？」

ワイズ家は世界的に高名な富豪である。ジェミアに別荘を持っており、たびたび訪れている。一家そろって特に鳥使いや影使いがいたく気に入っているらしく、来るたびに案内役を求めてくるのだ。

「いらっしゃるお話ってありましたっけ？」

「お嬢さまがいきなり、それこそ昨日今日でジェミア行きを決めて乗りこんできた、らしい」

「金持ちはいいねえ。それで、警護局も、鳥使い一人出せって言うんだよ。あいつら、うちがどういふ状況か知ってるくせに」

シーガルはぼりぼりと頭を搔く。

会議は大規模なので、人手があればあるほどいい。本来なら鳥使い全員で赴きたいほどだが、人員不足でジェミアが空になっても困るということで、無理を言って三人残した状態なのだ。

もともとクロウが下に連れて行かれる可能性はほとんどないとしても、残った以上は仕事に全力で取り組みたい。

鳥類局から一時的に人がいなくなってしまうので、外部の人間相手の仕事はすべて受け付けな

いことになっている。

しかし、今回話を持ってきたのは、ジェミアにとっては重要な客だ。政治的判断で、特別に対応することになった。

「ど、どうするんですか？」

「お嬢さまをお迎えしたことがあるのは、このなかではクレインさんだけだからな。今回はよろしくお願いしますよ」

クレインは苦い顔をする。

「俺、あの人苦手なんだよな。経験を積むためだ、シーガル行ってこい」

「いやいや、先輩にお譲りしますって。それに俺、ちょっと風邪ぎみだし」

二人が互いに押しつけあうせいで、室内に不穏な空気が満ちてくる。

「せっかく今回居残り組になったんだ。のんびりさせてくれよ」

「えー、事務は事務で結構大変だって言ってたじゃないですか。そんな仕事させられませんって」

「不毛！ ナンデモイイカラサッサト決メロヨ」

ラーヴァがそう口を挟むものだから、両者の視線が自然とクロウに向いた。

クレインはいつになく真剣な表情で口を開く。

「……クロウ、せっかくだから」

「だめです！ ワイズ家をクロウ一人に任せるなんて、俺ら減給ものですよ」

結局、穏やかではない話しあいの末、クレインが相手をするようになった。

「お前はいいよなあ。楽な仕事だけですむんだから。見習いって立場に感謝しろよ」

クレインは呪いの言葉を口にしながら、警護局へと向かう。

「大人げないなあ……。まあ、クロウ、せっかくだ。ちょっとは手伝ってやるから」

「あ、ありがとうございます」

「いって。二人でこの自由を満喫しようぜ」

自由になれるのだろうか。クロウはまだまだなくなならない未処理の書類を見ながら冷や汗をかく。

「……でも、大丈夫ですかね。二人ですよ」

「実質俺一人だよ」

クロウが青ざめると、シーガルはあわてて冗談だと強調する。

「まあ、何も起こらなければ大丈夫さ」

「……だといいいんですけれど」

昨年もクロウは居残り組だったけれども、今は状況が違う。ちいさな不安が心の隅でちりちり

と燃えていた。

そしてそれは見事に現実になってしまった。

会議の二日目にあたる、その翌朝。机に向かったクロウは時計を見やった。本来の出勤時刻から三十分以上経っているのに、室内にはクロウ一人だった。

クレインは引き続き直行直帰でワイズ家の案内をする予定だからいいとして、クロウと一緒に局で待機当番となっているはずのシーガルがまだ来ない。

「ラーヴァ、ちょっと見てきてくれる？」

「オウ」

廊下側の窓から出ていくラーヴァを見送りながら、クロウは溜め息をついた。

いつもは鳥使いと鳥で賑やかな、この時間の鳥類局。そこに自分一人でいると不安が募っていく。事務仕事だったらもう教えられなくてもできるけれども、他に人がいるかいないかだけで心の安定度が異なってくる。

そういうところが未熟なのだなと思って、情けなさに笑いをもらすと、ラーヴァの声がいきなり飛びこんできた。

「クロウ、クロウ！ 大変ダ、来テクレ！」

クロウは飛び跳ね、すぐに扉を開けた。そこでラーヴァにぶつかる。

「痛っ！」

「悪い、デモスグ来テクレ！」

「クロウ、頼ム！」

シーガルの相棒もやってきた。

二羽に言われるまま廊下を走って角を曲がると、シーガルが壁に背を預ける形で座りこんでいた。

「シーガルさん？」

「.....おはよう」

「今朝カラスゴイ熱ダツタンダ。ソレナノニコイツ、来ルツテキカナクテ」

クロウはシーガルの腕を取って自分の肩で彼の身体を支えた。

「医務室へ」

「あー、そっちはいいから。とりあえず事務室まで頼む」

「え？ でも.....」

「大丈夫だから」

彼はクロウの手を振り払って事務室へ行こうとするので、しかたなくクロウは言うとおりにした。

長椅子にシーガルを寝かせると、水と冷やした布を用意した。

「季節の変わり目だからかな。元々ちょっと咳とかしてたんだけど、昨夜から急に.....」

「あの、帰ってもいいですよ？ 僕、いますし」

シーガルの不穏な視線。クロウはその意味を悟り、苦笑いになってしまう。

「頼り.....ないですか？」

「うん.....」

頷こうとしたシーガルだが、それだけで目眩が起こってぐったりとしてしまう。

「あ、やっぱり無理ですよ。とりあえず、一日だけなら僕が事務室番していればもつでしょうし、明日はクレインさんも手が空きますし、今日は休んでください」

ひどく苦しげな顔をしたシーガルだったが、渋々了承した。

「ラーヴァ、悪いけど医務室に連絡してくれる？」

「ハイヨ」

ラーヴァの背を見つめて、シーガルは呟いた。

「まあ、さっきは頷いちゃったけどさ、本音を言えばこういうときお前でもいてくれてよかったよ。さすがに一人も局にいないという状況は避けたいしな」

普段はいてもいなくても変わらない扱いを受けているせいか、その言葉だけでクロウは幸せになれる。

「こういうときにしか、役に立てませんから」

「まあまあ、確かにそうだとすると、そういうときは素直にありがとうとだけ言っとけばいいんだよ」

シーガルとともに力なく笑おうとした瞬間、けたたましい羽音とともに鳥用の出入り口が開いた。

ラーヴァかと思って顔を上げたが、そこにいたのは地上に連れていかれたはずのデューパール、ブレットだった。

「あれ、ブレット？　なんで戻ってきたの？」

「急ニ資料ガ追加デ必要ニナツタダトサ。デューパールノ飛行記録、過去二十年分」

「ええ？」

クロウはブレットを眺める。過去二十年分といったら、そうとうな量だ。いくらなんでも、デューパールの身体じゃ運べない。

「誰カニ持ッテキテホシイミタイダヨ」

クロウは一度も会議に参加していないから実情をよくわかっていないのだが、会期中の鳥使いは想像以上に多忙を極め、一人でも欠けただけでも負担が増すらしい。できれば避けたい、居残り組になりたいとこっそりこぼす者もいるくらいだ。

本来なら地上に赴いている誰かが来るべきなのに、それができないからこうしてデューパールをよこしたというわけだ。

「ど、どうしましょう？」

シーガルに尋ねると、彼の顔色もますます悪くなってしまった。

「今日中ニダッテ」

追いうちをかけるようにブレットが付け加える。

会議の日程を確認する。確かに、明日の朝一番にそれを必要とする集まりがあった。会議の準備も考えると、間に合わせるためには遅くとも一時間以内にはジェミアを出なければならない。

シーガルが地上まで行くのは無理だ。現在の彼の身体への負担が大きすぎる。

では、クレーンを呼び戻すか？　しかし、他部署とともに、ジェミアにとって重要な客をもてなしているのだ。しかも、わざわざあちらから鳥使いを、と指定されている。

シーガルがこうなっている以上、クレインに出てもらったらクロウがその相手を代わりに勤めることになる。しかし、クロウは鳥使いとして客と接する術もまだ身につけていない。

不足の事態とは常に起こるもので、そのときはすみやかに対処をすればいい。けれども、その流れを自分が邪魔な栓となってせき止めている。解決できるものもできないままだ。

頭数を満たすのでは意味がない。役に立たなければ。

(僕が飛べたら.....)

クロウは自分の手を見る。いつのまにか肉刺ができていた。この一年間はけして見ることのなかったものだ。

彼は意を決して口を開いた。

「ぼ、僕、行ってきます！」

「クロウ、お前には無理だろ」

「でも、他にいないじゃないですか！」

「ちょっと、俺がなんとかするから」

シーガルは立ち上がろうとしたが、すぐに目眩がして、再び長椅子に倒れこんだ。目は虚ろで視界も不明瞭、足に力は入らず直立すらできない状態だ。

「がんばります」

「でも、お前、まだ地上との往復訓練.....」

シーガルはクロウの訓練の進行具合を把握している。会場のある都市まで行くなど、まだ彼には無理だと考えた。

「訓練は.....」

「コレヲ訓練ニシチマエバイイ！」

ラーヴァが飛んできた。

「背ニ腹ハカエラレナイ！ クロウヲナントカ役立タセルシカナイ！」

ラーヴァの言葉に、シーガルは朦朧とした意識でつい頷いてしまった。

「落っこちるなよ、クロウ。お願いだから目覚めの悪いことには」

「はい！」

この申し出は、自分にとっては大それたものかもしれない。

そんな気持ちを覚悟の裏に押し込めて、クロウはレインアローの小屋に向かった。

他の鳥小屋とはちがい、ここは既に近い。それぞれのスペースでのんびりとくつろぐことができる造りだ。

レインアローも会議に連れていくので、居残っている鳥も少ない。

扉を開けると、待機組の数羽がこちらを向いた。

「オヤ、ロビンノ息子ジャナイカ。イッタイナンノ用ダ？ 今ハオ掃除ノ時間デハナイダロウ？」

鳥たちはけらけらと笑う。クロウが高所恐怖症でレインアローをまともに乗りこなせないことは、彼らもよく知っている。

「どうしても地上に行かなくてははいけないんです。誰か、乗せてください」

ますます笑い声は大きくなった。

「君ハマダ練習中ダロ？ 落ッコトシタラ僕ラガ責任取ラサレルカモシレナイダゼ？」

「大丈夫、落ちないから」

のそのそと歩いてきたのはゲイルだ。

「言ッテオクガナ、少年。確証ノナイ『大丈夫』ハ約束トシテ成立シナイダ。オ前ハナニヲモッテ俺タチヲ信用サセルンダ？」

ラーヴァがくちばしを開けるのを察知したゲイルは、そのまま彼を制するように続ける。

「オット、ラーヴァ。オ前ノ助けハ禁止ダ。俺ハコノオ坊チャンニ聞イテイルンダ」

ゲイルはあらためてクロウに向き直る。

「オ前ノ様子ハ、普段カラ背中ニ乗セテイル俺ガヨクワカッテイルサ。頼リナイ甘ッタレダッテネ。コウイウノハ平時ノ信用ガ物ヲ言ウ。ソレデ、オ前ハドレダケ自分ガ信ジテモラエルト思ウ？」

クロウは口をつぐんでしまった。どれだけきれいな言葉で見栄をはっても、ゲイルにだけは通用しない。普段から背中に乗せてもらっているから、それは身にしみてわかっていた。

集中練習を始めてから、彼はクロウのことをすこしは見直してくれた。けれども、まだ未熟なのは事実だった。

「でも、僕は行かなきゃいけないんだ」

「コンナツマラナイトコロデ命ヲ落トスコトハナイ。他ノヤツガ飛ベナイナラソレマデニシテオケ」

「いやだ！」

クロウはきっぱりと言った。

「確かに僕は甘ったれで臆病で役立たずだけど、かんじんなときでもそれを理由にやりすごしたくはない！」

それは、春のレイドの一件でも同じだった。

能力がないのは事実だ。しかし、それに甘えていてはいつまで経っても見習いのままだし、いづれはその身分も失ってしまう。

どうせなら、やれる可能性があるものはやってから嘆きたい。

クロウはしかとゲイルを見つめる。ゲイルは、首を左右にゆるく振った。

「ジャア俺ニ乗レ」

「オイオイ、ゲイルサン。平気カイ？」

「マア、俺ダッテ上ノヤツヲ振り落トサナイ技術クライハアルカラナ」

クロウは思わずゲイルに抱きついた。

「ゲイル、ありがとう！」

「マツタク、ソノ思イキリノ良サトイウカ、妙ナ無鉄砲グアイハ親父ニ似タナ」

クロウの腕をくぐり抜けて、ゲイルは外に向かった。

「デモナ、クロウ。ソウイウノハホドホドニシテオケヨ。デナイト早死ニスルゾ」

その言葉を聞いたクロウは、一瞬返す言葉に迷ったが、頷いて自分の意思を示した。

「デハ行クカ。安全ベルトダケハ気ニシテクレヨ」

レインアロー専用の発着所に向かうと、クロウは心臓の音を意識してしかたがなかった。

ここに来たのは見習いになってから数度だけ。出発の手続き担当者にすら顔を覚えられていないくらいだ。

飛び出した足場の先には、なにもない。空と呼ばれる空間が広がっているだけだ。

手前の待機場所からでもわずかに遠い地面が見える。ゴーグルで覆った目が涙で濡れる。

「啖呵切ッタノハオ前ダ。シッカリヤッテモラウゾ」

ゲイルは平坦な口調で言った。

「操縦ハ最低限デイイ。落チナイコトト方向ノ指示サエ出シテクレレバ、調節ハヤッテヤルヨ」

「お願い……します」

「イザトナッタラ俺ガ指示ヲ出スカラナ」

ジャケットの胸元からラーヴァが顔を出す。彼も地上まで飛べなくはないが、負担が大きいのでクロウの服のなかに収まっている。

「イイカゲン世話焼キモホドホドニシテオケヨ、過保護スギルゾ」

ゲイルは呆れたような声を出す。

「飼イナラサレタ動物ダッテ、野ニ放ラレレバ、自分デ食糧ヲ確保スルヨウニナルンダ。デナイト死ヌカラナ。コイツハ素人デハナクテ、見習イトハイエ鳥使イダ。ワザワザ過剰ナ世話ヲスルノハ愚カシイコトダゾ」

ラーヴァは唸るような声を出したものの、しぶしぶ引っ込んだ。

ゲイルは首を動かし、クロウを見やる。

「坊チャンヨ、ラーヴァヲ使ウノハ最終手段ニシロヨ。自分ガ鳥使イダッテイウ自覚ガアルナ

ラナ」

「……わかった」

係員が走ってきた。

「風も視界も大丈夫、すぐに出発できるよ」

普通なら嬉しいはずのその言葉が、鉛のように重くのしかかる。

「サテ、行クゾ。オ前モロビンノ息子ナラ、風デ遊ブ余裕クライ見セテミロヨ」

ゲイルは即座に足場を蹴り、翼を広げる。

「うわあああああっ！」

クロウは思わず悲鳴をあげた。

上も下も右も左も前も後ろも、彼らを取り巻くものはなくなった。大地は遠い。雲を横目に、ゲイルは下降しながら進んでいった。

不思議な浮遊感。ゆるやかな重力で引っ張られ、身体が伸ばされねじれていくようだ。

勢いで、足が何度もゲイルの背から離れては落ちた。

ゴーグルの下の目が濡れる。なんどか瞬きをして、クロウは涙を追い払う。

春にレイドを助けにいったときとは比較にならない。今までの飛行訓練のときよりもずっと地面は遠い。ここはまぎれもなく空なのだ。今まで自分が拒んできた、行きたくても行けないと思っていた世界だ。

手綱を持つ手の感覚はすぐに失ってしまった。ベルトで固定しているとはいえ、この指を動かしたら宙に放り出されそうな気がしてたまらない。委ねるものがなにひとつ存在しない世界に囲まれているのだ。

風が頬に当たると身震いがした。この空気の流れの感触が、恐怖心を煽るのだ。

遥か下では、瑞々しい緑色の草原がきらめいていた。しかし、それに見とれる余裕など皆無だった。

このまま目を閉じてしまいたい。

クロウが強張ってしまったのを察したのか、ゲイルは手近な雲の上へと移動した。

「ホラ、チャント指示シテクレヨ。コレデモ加減シテヤッテルンダゼ」

溜め息まじりの言葉が胸に刺さる。

「ココデノンビリシテイタラ、ナンノタメニワザワザオ前ガ出テキタノヤラ。ソノママ待ッテイレバ、誰カニ任セラレタカモシレナイモノヲ」

彼の言うことは正論だ。ここで立ち止まっていたは、なんのために志願したのか。クロウは震える指で服のなかから航空図を取り出した。

「太陽があっちで……ゲイル、西へ向かって。あの湖をひとまず目印にして」

「了解」

ゲイルは旋回して、さらに高度を下げながら前進した。

今度は意地でも悲鳴をあげない。けして恐怖心を捨てたわけではない。ただ、ゲイルをこれ以

上呆れさせたくないだけだ。

せっかく四月から訓練に打ちこんで積み重ねてきたものを、ここで崩すわけにはいかない。

ふと浮かんだのは、先日のカイトの言葉だった。

「まっすぐ立つ、手綱は中央、心を乱さない」

クロウは丸めていた背中を伸ばす。そして、手綱を正しい位置に動かす。

彼は何度か意識的に呼吸を繰り返した。肺に冷たい空気が流れこむ。

だんだんと頭のなかのなかが鮮明になっていく気がした。

四月のときのことがふとよみがえる。

レイドを助けたとき、塔の高さにすら怯えてクロウはなかなか進めなかった。しかし、そこで目を閉じてしまえば平衡感覚が狂い、余計に足が動かなくなってしまった。

(そうだ、進むんだったら……ちゃんと目を開ける)

痺れたような両手を握り直して、歯を食いしばり、クロウは地上を目指した。

逃げるように、太陽は遠くの山の端へと移動していく。クロウは、会場の時刻に合わせた時計を確認した。

「現地の日暮れまでに着けるかな……」

「ソリャア、オ前サン次第ダ。俺ハ主ノ指示通りニ飛ブカラナ」

レインアローは、自らの意思を持たないわけではない。しかし、彼らは自分たちが人間の移動手段であることを、生まれたときから教えこまれている。本来は、鳥使いの命令を優先する生き物なのだ。

クロウはゲイルのことをよく観察する。クロウは己の指示が適当ではないことを自覚していた。十分では命令の細部を察して、ゲイルは飛んでくれている。

乗せてくれたのが彼でよかった。クロウは息を止めがちな喉をわずかにゆるめる。

恐怖はまだ残っている。しかし、最初の感情の高ぶりは気づかぬうちにだいぶ落ちついていた。

ジェミアであろうと空中であろうと、ゲイルの背に乗っているのは一緒。そう思うことで徐々に身体の緊張をほどいていく。

いつのまにか、小さく見えていたはずの地上のものが、かなり大きく感じるところまで来ていた。雲も同じ高さにはほとんど見あたらない。

上方を見れば、ジェミアはもう遠く、この状況では確認が取れない。

「クロウ、アトドレクライカ判断ツクカ？」

服のなかでラーヴァが小さく鳴いた。

「うーん……」

航空図と目の前の景色を見比べながら計算してみるが、どうもうまくいかない。

「今ノ調子デイクトギリギリダナ。暗クナッテカラ着ク可能性ガ高イ」

「ゲイル、わかるの？」

「俺ダッテ現役ノコロハ世界ノアチコチヲ飛ンデイタモノサ。オ前ダッテ経験ヲ重ネタラ、コレクライ簡単ニ割り出セルサ」

そこまでになるのに、どれくらいの月日がかかるだろうか。本来よりも一年近くあとに、ようやくこうしてレインアローでジェミアの外に出ているクロウにはまったく想像がつかない。

「ゲイル、もうすこし飛ばせる？」

「吐クナヨ？」

ゲイルは翼を数度動かし、矢のように飛ぶ。クロウはまた身体を縮ませようとしてしまったが、今度はまっすぐ立とうと必死で踏ん張った。

夢中になりすぎて、空の色の変化にも気づけなかった。

世界有数の大都市の、幾何学模様になっている町並みを見つけ、クロウは事前に聞いていた地点を目指す。

鳥使いたちが寝泊まりする場所は、レインアローが降り立てる場所が確保されているからわかりやすい。クロウたちは脇目もふらず、一直線に飛びこんだ。

「うわっ！ あっぶねえ！」

盛大に砂埃を舞わせてから思い出した。地上に人がいた場合、着陸する前に合図を交わさなくてはならないのだ。怪我人が出なかったのは幸いである。

クロウはゲイルから滑り降りて、先輩たちに書類を収めた箱を手渡す。

「も、持ってきました……」

「クロウ？ お前が来たのか？」

頷くクロウに、周囲にいた先輩の鳥使いたちがそろいもそろって驚きに満ちた顔になる。

クロウが事の次第を説明すると、間が悪すぎると呆れた声が各々からこぼれた。

「そういうときはまずクレインの指示をあおぐべきだったな。警護局が絡んでいるんだったら、彼らに事情を話せば折り合いをつけてくれただろうに」

言われて初めて、そのことに思い当たった。経験不足のまま追いつめられて、勢い任せで出てきてしまった事実が恥ずかしい。

主任は苦笑する。

「まあ、ひとまずこれで安心だ。助かったよ」

書類を渡す。それで、自分たちに暇などないことを思い出した鳥使いたちはあちこちに散っていく。

「それにしても、クロウ。お前、ちゃんとレインアローに乗れるようになったんだな」

「あ、はい……う、うええ」

安心して気が抜けたのか、吐き気と頭痛が一気にやってきた。

「お、おい……」

「ちょっと、そいつどっかに連れて行けよ。鳥使いが飛行に酔って倒れたなんて、笑い物だぞ」

カイトが、汚れを見るような目つきになりながら言う。

主任がクロウを担いで医務室まで運んだ。

「しゅ、主任……。なんとかなりました」

「うーん、それはどうだろう」

主任は苦笑いを浮かべる。

「まあ、とりあえず実績は作ったわけだ。来週からはもっと練習を増やすぞ。覚悟しておけ」

もはや返事をする余裕もなかった。クロウはそのままゆるやかに意識を失った。

結局、クロウはその晩、夢も見ないほど熟睡した。起きてから、図太いやつだと先輩たちから次々にからかわれてしまった。

そして一足先に、彼はジェミアへの帰路についた。

「う、どんどん地面が……離れて……」

振り返ることはできない。そうしたらきっと目がくらんで気を失ってしまうから。

「オイオイ、普通ニ考エタラ下リノハウガ怖イモンダロウガ」

ゲイルの言葉に、ジャケットの襟元から首を出したラーヴァが口を挟む。

「気が抜ケタンダナ。マア、デモヨ、オカゲデ点モラエタンダカラヨカッタジャナイカ」

「うん。かなりおまけしてもらったけどね」

クロウは朝の出来事を回想する。

非常事態とはいえ、クロウが単独で地上まで飛行し、会議の助けとなったことを局長は評価してくれた。

今までが今までだったせいでよく働いたように見えただけかもしれないが、久しぶりに大きな加点となった。

嬉しくなったクロウがまっさきに向かったのはカイトのところだ。

「カイトさん、このあいだ言われたこと、できました」

「は？」

「まっすぐ立つ、手綱は中央、心を乱さない」

カイトは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「お前な、赤ん坊じゃないんだからさ。そんなことできたくらいで喜ぶなよ。かなり恥ずかしいこと言ってるぞ」

クロウはまっすぐカイトを見つめる。

「カイトさん、僕、ぎりぎりまで頑張ってみたいんです」

「ふん、今さら頑張ったってしかたないんじゃないか？」

カイトは乱暴な足取りで行ってしまう。それを、リフルが慌てて追った。

「カイトさん……」

「アンナヤツノコト気ニスルナヨ」

ラーヴァは変わらずカイトに対して不満げな様子を見せたが、クロウは以前よりも苦手意識がなくなってしまった。

まだ完全に克服したわけではないが、今回の件は大きな自信になった。

飛行訓練のレベルアップを検討すると主任は言った。ジェミアに帰ったら、机の上に積んだ書類と戦いつつ、自主訓練もしておきたい。

「またよろしくね、ゲイル」

ゲイルは返事をしなかったが、そこそこの機嫌の良さで飛んでいるのはわかった。まだ下の大地は見られないけれども、クロウは誇らしい心地で帰還の軌跡を描く。

ふと、草の匂いが大地から上ってきたような気がする。今の気分と同じ、さわやかで胸がすくような香りだ。

クロウのポイントは現在七一一。残り七八九。卒業期限まであと九ヶ月。

夏になると、陽光の勢いは増す。そういうときは雲が待ち遠しかった。雲に入れば、暑さも和らぐ。こういうときは、快晴よりも曇りのほうがジェミアでは喜ばれた。

同じ時間に出ているはずなのに、春とは違い、空は真昼のように明るくなった。眩しさでつい目を細める。

「ラーヴァ、大丈夫？」

相棒は力なく返事をする。彼は暑さに弱かった。

「クソー、噴水ニ入りタイ！ 思イッキリ水遊ビシタイ！」

その気持ちはクロウもよくわかる。ジェミアは真下にある土地よりも比較的涼しいが、それでも住民にとって夏は暑いのだ。

「兄さんが言ってたんだけど、地上では夏になると海に出かけるんだってさ」

「海ッテ、大キナ水タマリノ？」

「そうそう、あれ、地上で見るとすごい迫力なんだって。それでちょっとしょっぱいんだ。それで、みんなで泳いだりして遊ぶんだって」

ジェミアから出たことはほとんどないクロウにとっては未知の世界だ。

「今度さ、川に行こうよ。川だって涼しいよ」

「今度ジャナクテ今行キタインダ！」

ラーヴァを宥めていたクロウは、角を曲がったとたんびっくりしてしまう。最近顔をもったに合わせなくなってしまった幼なじみがぼんやりと立っていた。

「あ、アンジェリカ。おはよう」

クロウは手を控え目に振った。しかし、アンジェリカは不機嫌そうに彼を見ただけで、返事をすることもなく行ってしまう。

一瞬おぼえた違和感に首を傾げ、彼女の荷物に金色の光がないことにクロウは気づいた。

級持ちとなった専門職従事者に贈られる、オリーブバッジ。これは身分証にもなるので、常に携帯している者も多い。アンジェリカは、私服のときはたいていバッグにつけていた。しかし、今はどこにもない。

覇気のない友人を見つめて、クロウは細い溜め息をこぼす。

「もうずっとああだよ。顔色悪いし、まだ落ちこんでいるのかな」

「別ニ、アノ嬢チャンハ前カラアンナ子ダロ。アンナニ目ヲ吊リ上ゲテイタラ、ソノウチ顔ガ裂

ケチャウンジャナイカ」

けたたましく笑うラーヴァを、クロウはとがめる。

「ちょっと、そんな風に言わなくてもいいじゃないか」

「オ、昔カラオ前、馬鹿ニサレテタジャナイカ。ナンデ庇ウンダ？」

馬鹿にされていたわけではない、とクロウは口をとがらせる。

彼女とは幼学校に入る前からのつきあいだ。

三歳のときから既にクロウはいじめられっこで、いつも他の子らにノロマだのグズだのとからかわれていた。

そんなとき、必ず走ってきて「いじめはよくない」とみんなを叱るのがアンジェリカだった。利発な彼女は、子どもたちの中心に存在した。

正義感に厚く、弱きものには慈愛にあふれ……と思いきや、彼女はクロウに対しても怒った。そのころから早口だった。

「どうして言い返さないの。怒りなさいよ。馬鹿にされたくなければ、きちんとすればいいでしょ。ボールは怖がらずちゃんと取る、はさみはきれいに切る、人の言うことはちゃんと聞く！」

問題点はわかっているのに解決できない。それで揶揄されたら泣いてしまう幼なじみは、彼女にとって腹立たしいものだった。

「リフジンっていうのはね、女の子に生まれたとか、髪の毛がまるまってるとか、お父さんお母さんがいないとか、どうしようもないことを言うの！」

アンジェリカは自分なりの基準を設けていた。相手自身の責任の範囲で悪いことや情けないことをしたときだけ怒るのだ。

そのはっきりとした性格が、クロウは好きだった。自分が優柔不断で態度があいまいになってしまいがちだからか、どんなときでもはっきりしているアンジェリカは接していて気持ちのよい人物だ。自分にもかなり辛辣な意見をぶつけてくるとはいえ。

だから、そんな彼女が意気消沈している現状は心苦しかった。

なんどか彼女のもとを訪れたりしたが、今のように拒否されるばかり。確かに、けして親しいとは言えない間柄になってしまったが、それでもクロウは彼女に元気になってもらいたかった。

「同ジ専門職デモ、鳥使イト菓子職人デハ勝手モ違ウダロウ？ 確カニ、アノオ嬢チャンガツンツンシテイナイトナダカ落ちツカナイガ、相手ノ領域ニ踏ミコムノハホドホドニナ」

鳥使いにはコンクールというものがないし、クロウも芸術の分野にはそんなに明るいわけではない。

「オ前ハ、オ嬢チャンガ困ッテ、頼ッテキタトキニ誠心誠意コメテ助ケテヤレ。アレコレ構ッテ

ヤルダケガ友人ジャナイト思ウゾ」

「……うん」

クロウは空を見上げる。太陽がまぶしく、空の青はっそう鮮やか。夏がきたのだと実感するはずなのに、クロウはあまり明るい気分になれなかった。

どこかで、窓鉦の涼しげな音が鳴っていた。

地上の主要な国に夏が訪れると、ジェミアへの観光客は増加する。ラーヴァは暑さに呻くが、それでもジェミアのほうがずっと過ごしやすいのだ。

そうなると店はどこもかしこも旅行者でいっぱい、地元の間が外食できない日すら存在する。

鳥使いも観光客相手の仕事に人手が割かれてしまう。

観光客の相手は主に先輩たちの仕事なので、クロウはその分、鳥たちの面倒を見なければならぬ。

「ナア、クロウヨ。俺モソッチノ飯ガイインダガナア」

「だめだめ。病気がひどくなるよ」

鳥たちは相変わらず彼にわがままをぶつけるが、クロウもあしらいがうまくなった。

気持ちに余裕が生まれたことを、彼は実感する。前は、鳥使いとして力がないからせめて鳥たちにはよく思われたかった。しかし、彼らに対して甘くなったり、卑屈な態度を取ることが誠意ではないとわかってきた。

「アーア、最近ノクロウ、ツマンナーイ」

けらけらと笑う声が小屋全体に広がる。

「悩ミトカナイノ？」

「悩み……？ うーん」

思い浮かんだのは、アンジェリカのこと。もう久しく彼女のつんけんした声を聞いていない。それがなんだか寂しかった。

「ナニナニ、好キナ子デモイルノ？」

「いや、別にそうじゃなくて」

「心配シナイデ。私たち、アナタノ先輩ノ告白ニ協力シタコトモアルンダカラ！」

若い鳥たちが騒ぐ。

「誰？ 誰？ 現役？」

「ドウヤッテ？」

「誰トハ言ワナイケドオ、エット……」

鳥たちは異様に盛り上がる。デューパールやレインアローとはちがい、彼らは小屋のほかには、鳥類園か研究所など決まった場所にしか行かない。そのせいか噂話が大好きだ。

「あの、みんな、静かに」

「ダーイジョウブ、大丈夫。ア、モウオ仕事終ワリダヨネ。帰ッテイイヨ。アトハ好キニシテルカラ」

こうなったら埒があかない。クロウはなにも聞こえないふりをして、そのまま中庭に出た。

鳥たちは興奮しているのか、扉を閉めても声は筒抜けだった。どうしようか考えていると、真っ赤な顔をしたクレインが走ってきた。

彼はクロウには目もくれず扉を勢いよく開け、何かを怒鳴っている。クロウはそのまま聞かなかったふりをして事務室に戻った。上司には、大部屋のあとデューパールの小屋という順で回ったということにしておいた。

他の仕事に人手を割かれ滞ってしまった事務仕事を日暮れまでに半分終わらせ、その日の仕事を終える。通用門に向かうクロウの頭を、力の入っていない手がそっと触れた。

「よー。お前もこんな時間まで残業か？」

いつになく疲れた様子を見せるトーレスだ。影使いは影使いで、夏は忙しい。余所からの人間が増えると治安の悪化が心配される。見回りでずっと市内をぐるぐると移動するのだ。

「クロウ、なんか食べにいかない？」

「いいよー。今日僕が多めにもつよ。好きなの食べなよ」

日が長くなっていたから忘れがちになるが、食堂に入るような時間の余裕はなかった。そこで、いつものように市庁舎のカフェへと足を運ぶ。

カフェに入ると、すでに満員だった。せわしなく早歩きするシャーロットと目が合う。

「あ、二人とも。いらっしゃい……と言いたいところだけど、ごめん、今日は市民より観光客優先なの」

「えー、俺たちのささやかな喜びを奪うのかよ。同期のよしみじゃん、ちょっと顔きかせてくれないかねえ」

おどけてみせるトーレスの足を、シャーロットは軽く踏んでやる。妙な声をあげたトーレスがしゃがんでも、彼女は気にもとめない風に言う。

「また明後日来てよ。あーあ、アンジェリカに戻ってきてほしいわあ」

クロウはうつむく。

「……アンジェリカ、今朝会ったけどまだ元気ないみたい」

シャーロットも暗い顔を一瞬見せるが、すぐに笑顔をつくる。

「あ、そういえば近所よね。ついでだから、アンジェリカの家を持って行ってほしいものがあるんだ」

シャーロットは事務員を呼ぶと、自分は給仕に戻っていった。事務員が渡してきたのは、大きな封筒だった。

それを預かったクロウは、トーレスとともに店を出た。途中で立ち寄った屋台で、ナスとトマトのグリルライスを買って食べたのちにトーレスとは別れ、彼は自分の家の方角へ向かった。

寄ったアンジェリカの家の呼び鈴を鳴らす。しかし、返事はない。

すでに空や町は紺色に染まっていた。クロウは家の様子確かめるが、居間などは照明がついていない。しかし、アンジェリカの部屋だけは小さな灯りが見えた。

もう一度鈴を鳴らす。けれどもやはり応答はない。しばらく待っても出てくる気配はなく、クロウはしかたなく郵便受けに預かった封筒を入れ、自宅へと向かった。

途中一度だけ振り向いたが、幼なじみの家はしんと静まり返っているだけだった。

帰宅しても、クロウはアンジェリカのことを考える。どうしたら彼女がまた元気になれるのか。けれども、同じ専門職とはいえ、自分と彼女の職業はかなり違うのだと実感せざるをえなかった。

季節菓子職人は、専門職のなかでも人気が高く、なりたがる者が多い職業だ。鳥使いや影使いのような生まれつきの超自然的な能力はらず、とにかく華やかで見栄えがするのが大きな要因となっている。

彼らは四季の折々に通じ、そのときそのときにふさわしい菓子を作る。ジェミアは空中都市ゆえに、季節の移り変わりは大まかなことでしか感じられない。季節菓子職人は、旬の食材やあらゆる文化知識を使い、市民の生活に華を添える存在だった。その素晴らしさは地上にも知れ渡り、鳥使い同様、ジェミアでも指折りの観光資源となっている。

しかし、初等学校の適性試験で、志望者の半数以上が不合格となる。それは単に技術が未熟という理由ではない。

発想の豊かさはもちろん、広い知識を求められる。そのため、常に勉学に励まなくてはならない。また、顧客と相談して作品を作ることも多く、コミュニケーション能力も欠かせない。そしてなにより、重い鉄板や粉袋、作品の入った箱を動かすための体力が必要だ。

浮かれた夢をみていた子どもたちはここで挫折し、普通科コースに進む。残った者たちがその後の厳しい修行に臨むのだ。

菓子職人の見習いは、コンクールなどのイベントでしかポイントを貯められない。そのせいで、期限ぎりぎりまで見習いでいる子どもも多い。先輩の級持ちと争うことも多く、入賞も容易ではない。

アンジェリカは見習いのおかげから将来を有望視されていた。出場したコンクールは全て入賞。見習いだけのコンクールでも圧倒的な実力差を見せつけ、イベントでも彼女の菓子は人気だ。玄人の間でも彼女の名前は知られていた。

そんな順風満帆な職人街道を邁進していたというのに、五月のコンクールで、彼女は選外という結果を出してしまった。級持ちになった直後のコンクールでも先輩にまじって評価を得ていたため、周囲も騒然となった。

本人のショックはそれ以上で、なにが悪かったのかもわからない。そのときは地上でも高名な職人がゲストとして来ていて、彼がアンジェリカの作品をまったく評価しなかったという。

結果を聞いて呆然としていたアンジェリカは、すぐに気を取り戻して、どこが悪いのか問うた。しかし、明確な回答は保留とされた。

確かに、コンクール出場や入賞に早くも慣れてしまっていた彼女だが、五月のときだって自分の実力を発揮した出来のはずだった。なにも評価されなかった作品と向かいあい、彼女は悩んだ。

他人からもたくさんの助言をもらったものの、いまだに答えを出せていない。

彼女が菓子づくりに迷うようになったのは、それからだ。見習いのおかげでさえほとんど失敗はなかったはずなのに、簡単なミスが連続した。

プライドの高い彼女はそんな己が許せず、挽回しようと躍起になる。しかし、そうなればなるほど、歪みは大きくなった。

七月にも中規模のコンクールがあった。しかし、アンジェリカはエントリーすらしなかったという。理由は、なにも出せるものがないから。

そして、とうとう休暇を急遽与えられることとなった。本人は反抗したが、上司直々に説得され、七月に入ってから休職扱いになっている。

こうした状況は、アンジェリカの心はますます乱すばかりだった。

友人たちとは距離を置き、一日中図書館か自宅のキッチンにこもっている。誰かが様子を見にきても追い返すだけ。

たまに他の場所に出たかと思えば、商店街の花や食べ物を飽きずにじっと眺めて涙ぐんだりして、慌ててその場を立ち去る。また、知り合いと出くわしたらあからさまに避けるようになった。

そんなアンジェリカの最近の様子を聞いたり実際に目にすると、心が苦しくなる。

長いつきあいだから、彼女が転んだときは自分で立ち上がらなければ気が済まない性格だと知っている。それでも、手助けくらいはしたかった。

「マダオ嬢チャンノコトヲ考エテイルノカ？」

寝ているはずだったラーヴァに声をかけられてびっくりする。

「うん……」

「アレダケ何年モケチョンケチョンニ言ワレツヅケテルノニ、ヨク親身ニナレルナ」

「アンジェリカは、自分にも他人にも厳しいだけだよ。それに、八つ当たりで理由なく怒る子じゃない」

クロウは幼いときのアンジェリカの言葉を思い出す。

「リフジンっていうのはね、自分ではどうしようもないことを言うの！」

どうしようもないこと。高所恐怖症はどうしようもないことに含まれるのだろうか。

「そういえばさ、初等学校卒業する前、アンジェリカがいちばん心配くれていたな」

「……アレヲ心配ッテ言ッテイイノカ？」

鳥使いの道に進むにあたり、絶対条件である鳥との意志疎通能力はクロウも満たしていた。しかし、レインアローに乗れるかどうかは危ういわけで、アンジェリカは何度も言った。

「ちょっと、大丈夫なの？ 鳥とお話していればいいってわけじゃないんでしょ？ 飛べなかったらどうするの？ それで見習いのまま終わったら大変じゃない」

それでもクロウは鳥使いになることを選んだ。そして、今も行く末を周囲から心配されている身だ。

「オ嬢チャンノ心配ハ正シカッタナ。俺、イツカアノ子ガオ前ニ『鳥使イヤメロ』ッテ言ウト思ッテタケド、ズバットソレヲ言ウコトハナカッタナ」

いつかのときも、どうなろうと構わないという言葉だけで、諦めろとは言わなかった。クロウは頷く。

「かなりきつい子だけどさ、アンジェリカはアンジェリカなりに、見守って、応援してくれてたんだと思う」

「ダカラ、次ハ自分ガ、トカ思ッテルノカ？」

クロウが肯定すると、ラーヴァは考えこむ。

「クロウヨリアノ子ノハウガ自我ガ強イシシッカリシテイル。ソレヲ踏マエタウエデ、オ前ガデキルコトヲスレバイインジャナイカ？」

「うん、そうだね……」

アンジェリカを励まそうと思うこと自体、身の丈に合っていないのかもしれない。それでも、クロウはいつもの彼女に戻ってきてほしいと願った。

翌日の昼休み、クロウは中央市庁舎の敷地の外れを目指した。

ここには、ジェミア唯一の図書館がある。町の規模にしては多すぎるほどの蔵書量が自慢だ。

菓子職人は勉強が大事。アンジェリカは常日頃そう主張している。教養がなければ、芸術的な季節菓子は作れないと。

だから、ここに行けば彼女に会えると確信していた。

「アンジェリカ」

案の定、彼女は歴史書が並んでいる部屋の席にいた。いつも以上に渋い顔で、机においた分厚い本を見下ろしている。

「や、やあ……」

刃のような視線を向けられ、怯んでしまう。彼女とのつきあいは長いはずなのに、やけに緊張してしまった。

声をかけてみたものの、次の言葉が思いつかない。

「さ、最近、どう？」

とりあえず口に出したものの、この場では一番の禁句だったような気がして、クロウは大量の汗をかいた。

アンジェリカは目をそらす。長いまつげが彼女の肌に影を落とした。

「どうもこうもないわ」

気まずさが増すばかりだった。

迷った末、クロウは彼女の向かいの席に座る。それにも文句を言われるかと思ったが、アンジェリカは本とスケッチブックを見つめるばかりで、苦情はなかった。

彼女はアイデアを書き留めるために、いつも小さなノートを持ち歩いている。

クロウは前に中身を見せてもらったことがあった。歳時記の書き写しや他の職人が作った菓子の感想、目に入ったものの写生、ふと思い浮かんだ図像。そんなものであふれていた。

今持っているもので何冊目になるのだろう。気づくと表紙の色が変わっているので、いくつも消費してきたはずだ。

アンジェリカはメモ書きしているところをあまり人に見せたがらない。表紙を立てて鉛筆を走らせるのだ。今も赤い表紙をこちらに向けている。それが彼女の心の壁のようにも思えた。

「.....あんだって知ってるでしょ。この間、私が選外だったの」

クロウは何も言えなかった。アンジェリカは構わず続ける。

「自己最低どころか、順位も出ないなんて」

「でも、コンクールは入選する人がいれば落選する人も必ず出るものでしょ？ たまたま今回がそうだっただけで」

アンジェリカは乱暴に立ち上がった。思わず周囲の人々がこちらに視線をよこしてくる。

「ア、アンジェリカ.....？」

彼女はスケッチブックを広げた。真っ白で、なにも書かれていない。

「紙を前にしても、いろんなお菓子を食べても、どんなものを見ても、全然浮かばないの。こんなこと、今までなかったのに」

いつもの鋭く明瞭な口調を感じさせないほど、声が震えている。

「だって、初めてコンクールで入賞できなかったのよ？ 選外だったの。見習いのおときも、級持ちになっても、何かしら評価はもらえていたのに」

前回のことはクロウもよく覚えている。

級持ちになってから初めてのコンクール。アンジェリカは過去最高の順位を獲得した。これ以

上ない、幸先のよい始まりだった。

それが、まさか五月の催しで何も賞を得られなかったなんて、彼女自身も周囲の人間も予想していなかった。

「そういうときもあるよ。アンジェリカだったらまたー」

彼女の目つきが一瞬で鋭さを増す。

「あんたにはわからないわ！　いつもいつも落ちこぼれのくせに、偉そうなこと言わないで！」

怒鳴った直後、アンジェリカは息をのみ、涙で瞳を濡らした。

「……次も、その次も、もうこれから先ずっと、今までのように評価がもらえないかもしれない。その怖さなんて、あんたには理解できないでしょ。こんな時期でもまだ級持ちになるまでまだまだ遠いあんたがどうして私を慰められるのよ。私のことよりも自分のこと心配しなさいよ」

クロウは口ごもる。それでも、彼女になにか言葉をかけたかった。

「確かに僕はそうだけども、劣等生が誰かを心配してはいけないっていうのはちがうよ。能力と気持ちはちがう」

「だから？」

「いや、その。とにかくアンジェリカ、一回の失敗でそこまで考えることはないだろ。次のコンクールは、またいつもどおりの結果が出るかもしれないじゃないか」

「次？」

アンジェリカは冷たく微笑む。

「こんなになんのアイディアも出ない状態でコンクールに参加するなんて。もう、私……一生出られないかもしれないわ。出たくない……」

そして、小刻みに震えながらクロウを一瞥し、無言で去ってしまった。

細い後ろ姿は今にも折れてしまいそうだった。クロウは思わず追いかけてみたかったが、この状態で彼女を元気づける言葉は思いつかない。

「あの一、静かにしてくださいね？」

いつの間にか館の職員が近くにきていた。アンジェリカに気を取られてまったく意識しておらず、クロウはわざとではないとはいえ大きな声を出してしまった。一斉に周囲の厳しい目が向けられる。

「ご、ごめんなさい」

また失敗してしまった、と落胆する。いつも彼女を怒らせてばかりだ。

とぼとぼと出たところで、待機していたラーヴァがやってくる。

「オ疲れサン。サッキ、オ嬢チャンガ通ツタケド」

クロウはうなだれる。

「ラーヴァ、失敗だったよ。怒らせたってどうか、刺激しちゃっただけとどうか」

「……ソウカ」

ラーヴァはクロウを慰めるように肩に止まる。

「どうすればいいかな」

しばらく沈黙したあと、ラーヴァはくちばしを開く。

「嬢チャンサ、ヤッチマッターッテ顔シテタゼ」

「やっちまった？」

「クロウヨ、仕事終ワッタラアノ子ノ家ニ行カナイカ？」

アンジェリカが苦手なはずのラーヴァがそんな提案を出すとは思わず、クロウは目を丸くする

。

「アレダト、モウ一度話シテミテモイイカモシレン」

ラーヴァの提案に従い、急いで仕事を片づけて定時で上がったクロウは、再びアンジェリカの家を訪れた。今日は居間にも他の部屋にも灯りが確認できたが、反対にアンジェリカの部屋は暗かった。

呼び鈴を鳴らすと、アンジェリカの母が出てきた。

「あら、クロウくん」

「こんばんは、おばさん。ご無沙汰してます」

専門職コースに進んでからはアンジェリカの家を訪ねる頻度も減り、見習いになったあとはほとんど近寄らなかった。

思えば、先日、封筒を届けにきたときが久しぶりの訪問だった。アンジェリカはクロウの母や姉と仲はよく、時折やりとりしているのだが、クロウは本人としかまともに顔を合わせていなかった。

「鳥使いはどう？」

「……まだ見習いです。恥ずかしいんですけど」

アンジェリカは同期のなかでも級持ちになった時期は早かった。そんな彼女の家族に、まだ自分が見習いであることを告げるのは気まずい。

しかし、アンジェリカの母は優しい表情を浮かべる。

「別に、まだ何ヶ月かあるのでしょうか？ それに、人にはそれぞれのペースがあるんだから、恥ずかしがることはないわよ」

彼女と同じ茶色の瞳を持つ人にそう言われると、なんだか新鮮だ。

「アンジェリカは……」

「ああ、あの子ならちょっと散歩よ。気分転換に」

「あの、まだ落ちこんでいますか？」

見上げた顔の様子で、それが是だと伺えた。

「たった一回の失敗なのにね。でも、あの子にとってはその一回が大きいよね」

アンジェリカの母の笑みに、すこしだけ苦みが加わる。

「おばさんは普通の人だからよくわからないけれどね、あの子もあなたもまだ十三歳じゃない。それで人生決まるのは過酷だと思うわ。お菓子職人になってくれたことは嬉しいけど、ときどきハラハラしてもどかしいときもあるのよ」

「おばさんは、アンジェリカにやめてほしい？」

クロウの問いに、彼女はわずかに首をかしげた

「苦しいならね、それもひとつの道だと思うわ。でも、きっとあの子はそんなことしないでしょ？」

クロウは頷いた。それを見て、アンジェリカの母はほっとした様子を見せた。

「クロウくん、悪いけれどあの子呼んできてくれる？」

「いいですよ」

「ありがとう。あなたもお仕事でいろいろあるでしょうけれど、あまり無理しないようにね」

クロウは頭を下げて、アンジェリカの家をあとにした。

このあたりは彼の地元でもあるので、土地勘は十分にある。あの少女が選ぴそうな道を順に回り、やがてふらふらと歩いている人影を見つけた。

クロウは最初、それが自分の幼なじみがどうか判断に迷った。アンジェリカといえば、いつもは早足で目的地まで一直線という歩き方なのに、どうも頼りない。別人と言ってもいい。

しかし、やはりそれはアンジェリカなのだ。図書館でのやりとりが脳裏をかすめる。クロウは逡巡したうえ、勇気を出して声を出した。

「アンジェリカ！」

ゆったりとした足取りが、ぴたりと止まる。

彼女は振り向かない。夏のやわらかな空気は二人の間で停滞してしまい、まるで時が止まったようだ。

通りの向こうにある噴水の音以外、なにもなかった。

クロウはさらに声をかけようとしたが、一瞬声が喉に引っかかってしまう。深呼吸してもう一度呼ぼうとしたとき、彼女が振り向いた。

「クロウ……」

薄手で簡素なワンピースを着たアンジェリカは、自分の服装を見下ろすと少しバツが悪そうな顔をした。いつもはきちんと整えている髪も、今は適当にくくっただけだった。

「なに？ まだなににか言いたいなの？」

「えっと、昼間のことを謝りたくて」

アンジェリカは顔をしかめただけで、沈黙する。

「あ、あ、あと、おばさんが呼んでたよ」

彼女はうつむき、唇を歪ませる。

「まだ帰りたくない。気分転換できてなから」

「でも、いくら夏でも夜になったらその恰好じゃ寒いでしょ？」

「放っておいて」

突き放す言い方だったが、声は震えていた。

「放っておけないよ！」

思わず出た自分の声の大きさに驚き、クロウは慌てる。これではいつもと真逆だ。

アンジェリカも一瞬動揺するそぶりを見せたが、また元の態度に戻ってしまう。

彼女は近くにあったベンチに座りこんでしまう。クロウもつられて横に腰かけたが、拒まれはしなかった。

無言が続く。噴水の音の変化を聞きながら、クロウは変化していく空をぼんやりと見上げた。日が沈むまではまだ時間があった。

ふとアンジェリカは口を開いた。

「クロウさ、私の作ったお菓子、どう思う？」

今さらそんなことを聞かれるとは予想していなかった。

「え、美味しいけど」

「味以外に、なにか感じない？」

そんなことを言われても困ってしまう。クロウは、彼女の質問の意図がわからなかった。

アンジェリカは霞のような声で言う。

「心弾まないって言われたの」

「え？」

「五月のコンクールの特別審査員に。『君は評判通り上手だね、でも食べていて楽しくない』って」

アンジェリカは両手を頭の側面にやる。

「私、まったくその意味がわからなかった。見た目も味も完璧だったはずなのに、食べていて楽しくないと言われるなんて予想もしなかった。どうしてそう思うのか聞いても、理由はとうとう教えてもらえなかったの」

だから彼女なりに考えてみた。甘さ、舌ざわり、飾りの状態、季節に合っているか。けれども、それらに評価に値しないほどの欠点は思いつかなかった。

それは周囲の職人も同じで、彼らから考えつくだけ意見を集めたものの、どれもじっくりこなかった。

手探りで、日ごろ紙に書きとめたアイデアをいくらか改変してみるが、むしろひどくなるばかり。作ってみなくても美味しくないとわかるし、レシピを見ただけで心が浮き立つどころか沈んでしまう。

そんなことをくりかえすうちにどんどん自信は失われていく。普段の仕事でさえ、自分が正し

いのか間違っているのか判別がつかなくなってしまった。

「あんなんかに、なんて昼間は言っちゃったけど……本当はそんなこと言う資格なんて私にはなかったのよ」

「資格なんて、そんなの」

クロウは内心動揺する。彼女はよほど追いつめられているのだと察してしまった。

「もうこれ以上考えても一生答えは出ない気がして」

「アンジェリカ、発想を変えようよ！ どこがダメで心弾まないのか、じゃない。どういうものに心が弾むのか、とかさ！」

アンジェリカは真顔でクロウを見つめる。

「どういうものに？」

クロウはぶんぶんと首を縦に振る。

アンジェリカは呆然とした。ダメだったところを探してばかりで、そんなことをまったく考えていなかった。

「私、私は……」

アンジェリカは、小さく震えた。

菓子にどんな感情を抱いていたのか。顧みても、思い出すのは自分がどれだけ素晴らしい作品を生み出せるのか、彼女はそればかりを考えていた。

「美味しくて見た目も綺麗で、その場にふさわしいものだったら、それで私は満足していた……つもりになっていたのかな」

アンジェリカは下を向き、自分の指をじっと見つめる。

「クロウはお菓子、好き？」

クロウが即座に首肯すると、アンジェリカは力なく笑った。

「そうね、聞くまでもなかったわ。私も……好き。トーレスも、シャーロットも、この町の大半の人は好きだと思う」

ジェミア市民は享樂的な気質を持っており、音楽や芸術、服飾、運動など、遊ぶ文化が発達している。もちろん、食べることも大好きだ。

「お菓子は夢なのよ。料理やパンとちがって、お菓子は食べなくても生きていける。だからこそ、それを食べる喜びというものがある。そして、ジェミアは花の種類が限られているし、海があるわけでもないし、畑だってそんなにない。そう、季節を感じられるものは少ない……。お菓子も季節も、ジェミアにとっては憧れなの。だから、季節菓子職人は、誰かに幸せな夢を与える人だって思うんだ」

クロウは彼女を見つめがら控え目に頷く。クロウ自身、甘いものを前にすると、特別に心が浮き立つ。

カフェに寄るのは習慣で、それについて今まで意識しなかったが、普段の食事では味わえないなにかを求めているのかもしれない。

彼女は、絞り出すような声で言う。その「誰か」のことを、いつの間にか省みることもなかった、と。

「私は、みんながあっと驚くお菓子を作りたかった。コンクールに出るからには評価がほしい、ありきたりなものじゃだめ。そんなことばかり」

アンジェリカには才能があった。他の菓子職人も舌を巻くほどの技術とセンス、そして知識。それらを駆使して作り上げれば、華やかで美味しく、評価の基準をすべて満たす作品が出来てしまう。

「アイデアはどんどんわいてくる。努力すれば、腕を磨いて知識を増やせば、それで結果が出せた。だから、賞を取れない人は努力が足りない人たちなんだって思ってた」

アンジェリカは大きくかぶりを振る。

「私、すっごく嫌な子。ずっと、落選した誰かの落ちこむ顔を見ても、励まそうなんて思いもしなかった。そんな人間、誰も幸せになんかできないわ。自分のことばかりで、他人のことを置き去りにしていたの。だから、相手がどんなお菓子を食べたら嬉しいかなんて考えなかった」

アンジェリカは、口をへの字に曲げたまま目を押さえる。

「慢心していたんだわ。あの子たちとは違うって。自分のことばかり。それが作品に出たのよ」

実際にその方針で評価を得てきたのなら、それもしかたない。そう思いつつ、クロウは面食らった。

彼は欠点ばかりで、ようやく前進しなくてはと足掻くようになった段階だ。トーレスやアンジェリカのような実力がある人間は、躓くことなどない。そう感じていた。

才能がある者でも悩むし、それゆえの問題も起こる。それは、クロウにとって思いもよらぬ現実だった。

アンジェリカは月を見つめる。不十分な円の光は、街灯とまざりながら彼らを照らす。

「今まで偉そうにしてたのが馬鹿みたい……本当に、馬鹿みたい」

アンジェリカの目から、滴が二粒、三粒とこぼれ出す。

クロウは焦ってしまう。アンジェリカに泣いてほしくない。元気を出してほしい。その一心で、必死に言葉を探した。

「でも、僕、アンジェリカがいろいろ怒ってくれるの嫌いじゃないんだ」

アンジェリカは、まるで不気味なものを見るかのような目をクロウに向ける。思わず涙も引っ

こんだ。

「は？ あんたなに言ってるの？」

「だって、アンジェリカは理不尽なことは言わないだろ？ いつだって悪いところを指摘してくれるじゃないか」

「.....バッカじゃない？ 意味わかんない」

指で目尻のあたりを拭いながら、アンジェリカは笑う。クロウはほっとした。

「ようやく笑った」

きょとんとした彼女は、バツが悪そうな表情を浮かべるが、それでもすぐに笑顔に戻る。

「僕は、いつものアンジェリカがいいと思うよ」

「あんなにいろいろ言ってるのに？」

クロウは思いきり頷く。

「むしろ、怒って厳しいこと言わなきゃアンジェリカじゃないよ！ 初等科のころだって」

クロウは具体例として、今までの出来事を思いつく限り口にしていく。長い付き合いだけあって、話題はいくらでもある。

彼としてはまったくの善意のつもりだった。しかし、思い出話に幼なじみの頬が徐々に引きつっていったことに気づけないクロウであった。

「昔さ、アンジェリカと一緒に花冠作ったよね」

やや精神的に疲労したアンジェリカは、力なく天を仰ぐ。

「あー、せっかくあんたが作ってくれるっていうから待ってても、時間はかかるし出来はイマイチで、ほとんど私が完成させたようなやつね」

クロウは苦笑いを浮かべる。小さいころから二人の関係は変わらない。

「それが風に飛ばされて、木に引っかかって。取りに行ったのはいいけど、僕が下りられなくなって二人で泣いたね。そうしたら父さんとラーヴァが通りかかって助けてくれたんだ」

「あったあった。もう、あんたってばあのときから」

アンジェリカは小言を始めそうになったが、珍しくクロウは遮った。

「.....あのとき、アンジェリカは下りられたけど、僕が一人になるから一緒にいてくれたんだよね」

彼女はそっぽを向く。

「別に、あんたが落ちたら私のせいになりそうだし」

「そのときのこと思い出してさ」

彼女とは生まれたときからの付き合いだからか、思い出はいくらでもある。

「あれから花冠作らなくなっちゃったね」

「花冠ねえ……」

「でも、アンジェリカは女の子らしいものが好きだったよね」

彼女の顔は、薄暗いなかでもよくわかるほど赤くなった。

「別に、それほどでも」

「そう？ 女の子の夢だって言ってたじゃない」

恥ずかしくて震えたアンジェリカは、ぼかぼかとクロウを拳で叩く。

「ちょ、アンジェリカ？ 待って、待ってったら」

その瞬間、彼女の手が止まった。きょとんとして表情を覗きこもうとしたクロウのことなど考えず、彼女は顔を上げる。ぶつかりそうになったクロウはとっさに仰け反った。

「それ、それよ！」

鼻が触れあいそうなほど近く、彼女の目の光もよく見える。

「女の子の夢！ お花、冠……そこに白いレース……」

アンジェリカは目を輝かせた。ついさっきまで虚ろな様子でいたのが嘘のようだ。

「そうよ、これ！ どうして私ったらこんな簡単なこと思いつかなかったの！ やっぱり定番をどう見せるかが大事よね！」

「アンジェリカ？」

「いいアイデアが思いついたわ！」

アンジェリカは周囲を見渡して慌てる。

「どうしよう、スケッチブックがない！ 私、先に帰るわね」

「え、ちょっと」

「あとで、またあとでね！」

風のような速さで、彼女は去ってしまった。残されたのは、一人と一羽。

「ナンダァ？ アノ嬢チャンオ礼ノ言葉スラ忘レタノカ？」

「うーん、でも、元気になってよかったじゃない？」

久しぶりにあんなに生き生きとした幼なじみを見られたのだ。ラーヴァはいまひとつ納得しきれていないようだが、クロウは満足だった。

カーテンを閉めていても、強い日差しは容赦なく室内に侵入する。

ラーヴァに起こされる前に目覚めたクロウは大きく伸びをした。久々に清々しい気分だった。

いつものように朝食を口にして、出勤の準備を終えたクロウが玄関の扉を開けると、両手を腰

に当てて背筋をピンと伸ばしたアンジェリカが立っていた。その不意打ち具合は、トーレスに似ている。

まさかいきなりはち合わせるとは思わず、クロウは固まる。対照的に、アンジェリカはズイッと彼に近づく。

「クロウ、今日は暇？」

「え？」

「え、じゃなくて。今日は残業ない日よね？」

「うん」

「じゃあ、あんたの好きな三色柑橘のケーキごちそうするから、仕事終わったら食べにきてよ」

クロウはきょとんとした。アンジェリカは目をそらす。

「このあいだはひどいこと言ったでしょ。そのお詫び。……ごめんなさい」

「そんな、別にいいのに」

アンジェリカは肩をいからせながら言う。

「もう！ 私、悪いことをしてそのままにいるのが我慢ならないの！ そんな自分が許せないの！ それくらいわかってよ！」

長い付き合いなんだから、とアンジェリカは仁王立ちする。クロウは気圧されてしまし、なぜか謝ってしまった。それでアンジェリカにまた叱られる。

「とにかく、食べにきてね。今日のは絶対美味しいから。なんならトーレスと一緒にでもいいわよ。でも、ラーヴァはちゃんと籠に入れるとかして、受付で待っててもらってね」

早口でそう捲し立て、彼女は駆け足で行ってしまった。去っていくアンジェリカのバッグに金色の光が反射していた。

「チョットハ素直ニナツタガ、マダマダダナ」

ラーヴァは笑う。つられて、クロウも苦笑した。

夏の日差しは厳しいが、こういうときに冷えた菓子を食えるときが何よりの至福だ。三色柑橘の甘酸っぱい味を思い出すと心が浮き立つ。クロウは仕事終わりが待ち遠しかった。

「さて、今日もお仕事がんばりますか」

「オウ、遅レヲ取ルナヨ！」

意気揚々とクロウは石畳を歩く。

アンジェリカの元気が戻ったのなら、自分も奮って仕事に取り組みたかった。彼女の復活に、勇気をもたらったような気分だ。

クロウのポイントは現在八二三。残り六七七。卒業期限まであと七ヶ月。

秋になると、一般教養と基礎実習をすべて修了した子どもが見習いとして入ってくる。

今年はクロウ以来の新人がやってくるということで、鳥類局の期待は大きかった。

「今度の子は高所恐怖症でないといいな」

何人かの先輩がげらげらと笑う。

居心地悪い思いではあったが、事実なのでクロウは何も言い返せなかった。

ざわついていた室内は、扉を開ける音を境に静まった。

局長が入ってくる。そのあとに、クロウより背の低い少年が続く。

「我らが鳥類局にも待望の新人がやってきた。ラーク、自己紹介できるね？」

「はい」

まだ幼さが目立つ顔は、緊張で若干固い。それでも精いっぱい礼を欠くまいと、背筋を伸ばしている。

「ラーク・エイリーです。よろしくお願いします」

ぺこりと彼が頭を下げると同時に拍手が起こり、期待の視線が一斉に注がれた。

クロウも手を叩きながら、初めてできた後輩の存在に胸を躍らせていた。

「しっかりしてそうな子だね」

「オ前ハ初ッ端カラ転ブシ、喋ッタラ嚙ムシ、オ辞儀シタラ机ニ腰ヲブツケルシ散々ダッタモンナ」

ラーヴァの言葉に、つい身体を小さくしてしまう。最近はもう思い出すことも少ないが、当時は三日眠れなかったほど恥ずかしくてたまらなかった記憶だ。

局長に連れられたラークは、一人一人に挨拶して回る。その様子を見ながら、クロウは自分の初出勤日を回想する。

あの日は、ただでさえ人見知りなのに緊張のあまり一気に頭が熱くなって、だんだん自分がなにを言っているのかもわからなくなっていった。それに比べたら、ラークは本当にしっかりした少年に見えた。

「クロウ・フェアウェザーです。よろしく」

握手をかわす。クロウとあまり変わらない大きさの手だ。

「彼は十三歳で、君と同じ見習いだ。歳は近いから、クロウ、面倒を……と言っても君よりラークのほうが頼りになりそうだな」

周囲に笑いが起こる。

ラークは目を丸くして、クロウを見つめた。

「え、もう十三歳なんですか？ それなのにまだ見習い？」

素直だが、耳が痛い言葉であった。

「年明けに十四歳になるんだけどね、うん、まだ見習い」

呆れたような嘆息を聞き、クロウは顔が赤くなった。

見習いの期間はおおよそ二年半。鳥使いは常時ポイントを稼げる職種なので、級持ちになる時期は比較的早いと言われている。それが最後の年の秋になってもまだ見習いというのは、あまり前例がない。

「この二年間、なにしてたんですか？」

「オイオイ、坊ちゃんヨ。サスガニソレハ失礼ッテモンダロウ」

ラーヴァが割りこむ。ラークは顔を赤めながらもそっぽを向いた。

「まあ、彼にはちょっと事情があつてね。まあ、君になにも問題がないなら、ここまで級持ちへの昇格が長引くことはないさ」

「……事情、ですか」

ラークは再度クロウを見る。とても友好的な態度とは言えない。年下が相手なのに、クロウのほうが身体が硬直する。

局長に連れられ、ラークは敷地内の見学に向かった。その背中が見えなくなった瞬間、思わずほっとしてしまった。

「なんか、すごい態度のやつだな」

シーガルに囁きかけられ、クロウは苦笑いを浮かべた。

「はっきりした子ですね。鳥たちにあなどられることはないかも」

シーガルはクロウをまじまじと眺め、彼と同じような表情を浮かべる。

「そうだな。まあ、二個もちがうんだから、お前なめられないようにしろよ。鳥たちよりも厄介だぞ、あれは。でも、ようやく新戦力が入ってきて安心したよ」

その言葉に、まだ自分は半人前なのだと実感させられる。春以降、訓練を積極的にするようになってだいぶ仕事内容や周囲の態度は変わったはずだった。けれども、まだ足りない。

頑張らなくては、と拳に力を入れ、ふと彼は気づく。

「そういえば、ラークは自分の鳥を持っていないんでしょうか」

鳥使いの多くは相棒となる鳥を持っている。しかし、ラークにはそれらしき存在が見当たらなかった。

クロウのときは、父から引き継いだラーヴァがいてくれた。彼は上司や先輩たちとも面識があ

るおかげでクロウの橋渡し役を見事にこなし、最初から劣等生ぶりを見せつけたクロウのフォローに回った。そのおかげで、鳥類局職員たちからなんとか見捨てられずにいるようなものだった。

「まあ、別に決まりじゃないしな。必要になったら自分から求めるだろう」

シーガルにそう言われ、クロウは頷く。しかし、あんなに周囲を威嚇しているようなとげとげしさを持つ彼がなんだか寂しそうに思ってしまった。

こうして後輩が入って数日。歳は違えど同じ見習いなので、クロウはラークと行動する機会は多かった。

レインアローの大きな翼が広がり、雲と芝生の間で悠然と風に乗る。

クロウはそれを見上げて思わずはしゃいだ。

「うわあ、ラークってすごいね！ こんなにすぐ飛べるなんて」

クロウの言葉に、降下してきた彼は顔をしかめる。

「むしろ、一年以上いるあんたがなんでここまで飛ぶの下手なのか疑問なんですけど」

「そうだな」

「新人乗セテ飛ブ感覚、ナンダカ思イ出シテキタヨ。普通ハコンナモノンダッタナ」

主任とゲイルにまで言われてしまったら、返す言葉も出ない。

「そんなに大げさなことではないでしょう。実習でやったことを実践しているだけですから」

先輩相手とは思えないほど冷たい口調だ。思わず主任も苦笑いになる。

「では、今日はここまでにしておこうか。クロウ、ゲイルとジェイドを連れて行ってくれ。私はラークを大部屋に案内するから」

「はい」

二羽を両側に従えながら、クロウはレインアローの小屋をめざす。

「ゲイル、ジェイド、アイツハドウヨ」

ラーヴァがふざけてゲイルの背に乗る。ゲイルは嫌そうなそぶりを見せるが、気にせず歩きつづけた。

「マア、最初ノクロウヨリズットイイ」

それを聞いたジェイルは笑いを押し殺す。

「デモ、教科書ドオリダナ。命令スルダケダ。ソレニ、高圧的ダナ。騾担当ナラアレデモイイケドヨ」

「私モ同感」

二羽がそろってそう言うとは思わず、クロウは面食らう。それを察したゲイルはさらに続ける。

「クロウ、前二俺ガ言ッタダロ？ 鳥ト話セルダケジャダメダッテ」

「うん」

「アノ坊チャンモソウサ」

「アノ子、キット鳥嫌イネ」

ジェイドの言葉に、クロウは驚きの声をあげてしまう。

「ええ？ 鳥使いなのに？」

「アナタノ先輩ノナカニモイタワヨ。言葉ガ通ジルカラトイッテ、好キニナルトハ限ラナイワ。人間同士ダッテソウデショ？」

確かに、と言いつつ、クロウには予想外の見解だった。

鳥と意志疎通できる者――鳥使いの大半は、鳥を友人のように思っている。クロウ自身、鳥を嫌ったことはない。

「オ前ハマダ若イケド、覚エテイタハウガイイ。自分ガソウダカラッテ他人モソウダトハ限ラナイ」

「そんなの、わかってるけど……」

「クロウミタイナ単ニデキナイ子ヨリ、アアイウ子ノハウガ危ウイノヨネ。クロウ、後輩ハイラナイ？」

クロウは首を横に振る。

追い抜かされるのはしかたないし、自分の立場がなくなるだけだとしても、仲間は一人でも多くほしい。

「ジャア、チョット気ニカケテアゲテネ。ゾンザイニ扱ワレチャ、私タチダッテ不満ヲ持ツモノヨ」

小屋に着き、二羽の手綱を外す。レインアローたちが新人の感想を尋ねるが、どちらも無難な感想を言うに留まっていた。

事務室に戻る道を行きながら、気にかけるとはどういう意味かを考える。

いつもクロウは誰かに気にしてもらう側だった。自分で考えて動いていても、どこかで他人の手を借りている。

辛辣な言葉をかけられることも少なくはなかったが、思い出すのはいつも誰かの優しさだった。

。

夕日が沈んで、太陽の気配が若干残るだけになったころになって、終業の鐘が鳴った。ラーク

は即座に自分の荷物をまとめると、すばやく挨拶して出て行ってしまった。クロウも身支度を終えると、さりげなくそのあとを追う。

「ラーク、今日はどうだった？」

彼は愛想のない顔で答える。

「どうもこうも。まだ簡単な仕事だけだし、一週間もすれば覚えられるんじゃないでしょうかね」

「はは、僕は一ヶ月かかっちゃったけどな」

ラークは軽蔑したような視線を向けるが、クロウにはたいしてダメージがない。

いろいろ話しかけてみるが、反応は薄い。どうしたものかと思っていると、不意に背中を叩かれる。

「よ！」

トーレスときたら、あいかわらず唐突に現れる。クロウもさすがにすっかり慣れてしまったが、ラークは驚いて硬直した。

「また新しい菓子が出たみたいだから食べにいこうぜー」

「あ、うん！そうだ」

クロウは後輩のほうを振り向く。

「ラーク、よかったら一緒にどうだい？ あのカフェは僕らの同期が働いているんだけど、その子の作るお菓子って本当に美味しいんだよ！」

彼は戸惑ったような嬉しいような複雑な表情を浮かべたが、無言で頷いた。

カフェへ向かう途中、クロウは気を使ってラークにたくさん話しかけた。しかし、彼は上の空で、ちらちらとトーレスを見ていた。

「えっと、ラークだよな？ 家族は？」

トーレスに尋ねられ、ラークは姿勢を正す。

「父さんは技師で、母さんは通信局で働いています。あと、兄さんが高等学校に通ってます」

「じゃあ、みんな専門職じゃないんだ」

「はい、僕だけで.....。鳥の声が聞こえるから半分自動的に専門職コースに回されたんですけど」

「ま、そうなるよな」

話しながらなじみのガラス扉をくぐると、すぐそばにアンジェリカがいた。

「なに、あんたたちもよく来るわね」

「そんなツンケンするなよ。それで、今日の新作は一？」

「練蜜芋プディングのアイスクリーム添え」

大好物だとクロウが無意識に満面の笑みになると、アンジェリカは一瞬眉を中央に寄せたが、呆れたように笑った。

「今出してあげるからちょっと待ってて」

秋になって、彼女は調子を取り戻したようだ。以前にも増して仕事に励んでいる。熱心すぎるほどだ。しかし、忙しいにもかかわらず生き生きとしていて、クロウはそのほうがアンジェリカらしくてよいと思った。

席につくと、トーレスは肩を回す。

「今日は巡回の途中で二人捕まえてさ、余罪が多くて一日その対応。先輩たちは徹夜じゃないかな」

ラークは意外そうな顔をする。

「トーレスさんほどの人でも巡回をするんですか？」

その言葉にトーレスは思わず噴き出した。

「九級から八級まではあんまり変わらないよ。巡回は下っ端の役目。それに、俺、巡回好きだしさ」

ラークの目がさらに真ん丸になる。

「巡回がお好きなんですか？ あんな地道なのが？」

トーレスは誇らしく、そしてどこか照れくさそうにして頷いた。

「まあね。幼学校くらいのときは、正義の味方っていうのに憧れていたんだ。俺も素質優先で影使いになったわけだけど、こうして警護兵と連携して仕事もできるからさ」

ジェミアの治安を守る。その簡潔な信念を掲げることで、彼は犯罪の取り締まりに意欲を出し、実績を積んでいった。そしてこの夏、最年少で八級に昇格できたのだ。

トーレスの言葉を聞いたラークは、感嘆の息をもらす。

「やっぱりトーレスさんってすごいなあ」

トーレスは否定するが、まんざらでもない様子だった。

「まだまだだよ。せっかく昇級できてまだ八級じゃ軽く見られるんだ。たくさん仕事して、たくさんの人を助けて、どんどん実力を発揮していかないと」

「そんな、たった一年ちょっとで八級になった時点でも実力が出てるじゃないですか」

仕事中とはうってかわって口数も増え、ラークは熱心にトーレスへ質問を繰り返す。次第に、彼は今までにないくらい明るい表情になっていった。クロウは、ラークを誘ってよかったと安堵した。

「僕、ずっとトーレスさんに憧れていたんです」

「俺？」

トーレスはきょとんとしながら自分を指す。すると、ラークは元気よく頷いた。

「下級生でトーレスさんのこと知らない人なんていません！ トーレスさんに憧れて影使いを目指す人も少なくないですよ」

そう口にした瞬間、ラークはとても悲しそうな表情になった。

「だから、うちの学年の人たちも、影を操る能力がなくてがっかりしていたんです」

「ああ、確かに今年もうちは新人入ってこなかったな。こればかりはしかたないか。でも、よかったな。鳥類局は新しいやつが入ってきて」

友人の笑顔に、クロウはあわてて頷く。

「ラークは僕よりずっと優秀だから、すぐに戦力になるんじゃないかな。うちの部署も安泰だよ」

その瞬間、ラークはいきなり立ち上がった。ぎょっとした二人に、ラークは無理矢理作ったような笑顔で言う。

「ごめんなさい。今日はあまり遅くなれないんです」

「そ、そうか。ごめんね、誘ったりして。ここの支払いはいいから。また明日ね」

「……はい、また明日」

足早に出口へ向かう彼の姿は、まるで逃げるようだ。

アンジェリカは、去っていくラークを見やって首を傾げた。

「トーレスに憧れるなんて、あの子の学年大丈夫？」

「おい、アンジェリカ。どういう意味だ」

二人の口論を聞き流しながら、クロウはラークの表情の変化を気にする。

また、なにか気にさわったことを言ってしまったのだろうか。

フォークを動かして、アイスクリームとプディングを一緒に掬う。

まだ自分は他人の気持ちに寄り添えないのだと痛感してしまった。また食べられるようになったアンジェリカの菓子はとても美味しいのに、せっかくのそれを味わえない自分がいた。

それからというもの、ラークはぼんやりとしてばかりだった。

「何があったんだ？」

「……僕にもわかりません」

クロウは首をかしげた。

「おいおい、あれじゃクロウ二号じゃないか」

その言い方がじゃっかん引っかけたが、もちろん反論できる権利を有していないクロウであった。

クロウはカフェでの出来事が引かかっていた。ラークの態度がおかしくなったのは、あきらかにあのときからだ。

ジェイドの言葉が急によみがえる。

「アノ子、キット鳥嫌イネ」

そして、カフェでの自分の言葉。

「ラークは僕よりずっと優秀だから、すぐに戦力になるんじゃないかな。うちの部署も安泰だよ」

(もしかして僕は押しつけがましいことをしてしまったかな)

鳥嫌いで鳥使いとしてやっていくことに迷いがあるのだとしたら、あれは負担だったのかもしれない。そう思うと急に己の配慮のなさが恥ずかしくなった。

けれども、直接話すことしか相手を元気づける方法を知らないクロウは、悶々と彼を見つめるしかなかった。

ラークの無気力さは飛行訓練でも変わらなかった」

「クロウ、あと一回交差するように飛んで。ラーク、もっと高く」

芝生に立つ主任からの指示に応えたのはクロウだけだ。一瞬だけ二人を間違えそうになった主任は、首を傾げる。

「ラーク、聞こえるか？」

ラークを乗せたジェイドは緩やかに上昇する。

「マッタク……」

ゲイルは呆れながらクロウに言う。

「クロウ、アイツラノトコロへ行クゾ」

「了解」

クロウは手綱を動かし、それに合わせてゲイルは仲間に近づいた。

「オイ、ジェイド。ドウシタ」

「下ノ声ハ聞コエテタワヨ。デモ、坊ヤノ命令ガナインダモノ」

ゲイルとクロウはラークを見る。姿勢は正しいものの、ぼんやりとジェイドの頭を眺めているだけだった。

「ラーク、大丈夫？」

ぴくりと瞼を動かした彼は、そこでようやくクロウたちが寄ってきたことに気づいた。

「大丈夫です」

「ボンヤリシナガラモ落ちナイナンテ、オ前器用ダナ。ダッタラモウチョット真面目ニナッテモラオウカ。モツタイナイ」

「ソウネ。女性相手ニ上ノ空ハ嫌ワレルワヨ」

レインアローたちの言葉に意思もなく頷くラークを見て、クロウはゲイルを下降させる。

「どうした？」

「主任。今日はもう、ラークは止めにしたほうがいいかもしれません」

主任は顔をしかめる。

「クロウがようやくまともになったかと思ったら、次はラークか。泣きたくなるな」

反応に困ることを言われ、クロウは無言になってしまう。脇にいたラーヴァが抗議の声をあげるが、主任はあえて無視をする。

「下りさせるか」

「アア、ソウシテクレ。アレジャ、ジェイドガ気ノ毒ダ」

主任は笛を吹く。ジェイドはすぐに着地した。

「ラーク。なにか問題があったか？」

「いえ」

「だったら、集中しないと。いくら身体を固定しているとはいえ、気を抜くと落ちるぞ」

ラークは口を結んだままで、なにも返さない。

「クロウ、彼らを頼む」

「はい」

ラーヴァも連れて、クロウはレインアローの小屋へ行く。

背中の方こうで、主任の叱責の音が聞こえた。数ヶ月前までは自分が怒られてばかりいたので、無意識のうちにクロウはうなだれてしまう。

「困ッタワァ。次ハ私が貧乏クジ？」

「オイ、ジェイド。マルデ今マデハゲイルガ貧乏クジ引イテイタミタイジャナイカ」

ラーヴァが翼を広げてジェイドの頭に乗る。

「誰モソコマデハ言ッテナイケド？ ソレト、女性ノ頭ニ乗ラナイデヨ。野蛮ネ」

二羽の口げんかを横目に、ゲイルはクロウに話しかける。

「ナニカアッタノカ？ マスマスヒドイジャナイカ」

「うーん、カフェに連れて行ったんだよ。そうしたら、急にあんな感じになって」

「マア、ヤッパリクロウガ原因ダッタノ？ モウ、余計ナコトシテ」

そんなことを言ったって、とクロウは頭を搔く。

レインアローの小屋に行ったら、ちょうどはち合わせた先輩に鳥類園まで連行されてしまった。そこで細々とした用事を終わらせて、クロウが事務室に戻ると、すでにラークも戻っていた。

席に着き、書類仕事をしていたラークだったが、ペンは動いていない。

クロウもすぐに処理しなければならないものをカイトに渡され、机にかじりつかなければならなかった。

夢中で仕事をしているうちに、終業の鐘が鳴ったことも先輩たちの大半が帰ったことも気づけないでいた。

顔を上げると、室内にはクロウとラークしかいなかった。

こっそりラークの机を確認する。やはりほとんど進んでいない。

「ラーク？」

声をかけても反応はない。立ち上がったクロウは彼の肩を叩く。

「もう終業だけど、どうする？」

「え？」

そこでようやくラークはクロウを見上げた。

「僕はもう帰るけど君はまだいる？ 戸締まりのしかたは教えてもらった？」

見習いになったばかりの少年は、首の動きで静かに否と答えた。

クロウは室内をあらためて見渡す。荷物は残っているから、数人は席を外しているだけのようだ。しかし、無人の事務室を施錠もせずに放置して帰るわけにはいかない。

「一緒に出る？」

曖昧な声が出ただけで、ラークはいっこうに立とうとしない。

仕事に身が入っていないなら、注意をしなくてはならない。しかし、クロウはためらってしまう。自分は確かに彼の先輩ではあるが、注意をできるほどの立場だと思えなかったからだ。

後輩の姿が、先日の幼なじみの少女と重なる。だから、なにか口にせずにはいられなかった。

「どうしたの、ラーク。元気ないよね？」

ラークはじっとクロウを見つめる。ふたつも年下なのに、その目に怖じ気づいて、クロウは半歩後ろに下がった。

ラークはクロウの浅葱色の瞳を見つめて、呟くような声で尋ねる。

「ねえ、クロウさん。なんであんた鳥使いになりたかったの？」

いきなりの質問に、クロウは戸惑った。しかし、ラークは視線でクロウの返事を要求する。

「父さんが、鳥使いだったんだ。それで、ラーヴァとは生まれたときから一緒に、物心ついたときには彼とも話せていて……」

しゃべりはじめたときの記憶はないが、父の嬉しそうな顔はすぐに思い浮かんだ。

「小さいときからずっと、自分は鳥使いになるんだって、そう思ってた」

自分から尋ねたはずなのに、ラークは半ば聞き流しているような態度をとる。

「それで、夢破れたりって感じなんですか？」

「ま、まだ破れては」

ラークはいらついた表情でクロウに迫る。

「だって、もうすぐ十四なんですよね？ もう二年は経つんですよね？ それなのにまだ見習いだなんて、なれないって気待ったも同然じゃないですか」

「まだあと五ヶ月くらいはあるよ」

そう言い返すものの、五ヶ月しかないと思うと内心焦る。

父が鳥使いで、自分も鳥と会話できるからというのは他人から見れば単純かもしれない。けれどもクロウは、他の職業になるよりも、鳥使いとして生きたかった。その願いはもう、心の奥底にまでしみついていた。

鳥たちも人間のように、それぞれの個性を持って生きている。彼らなりの考えに触れて成長することもある。そして、高いところはまだ苦手だけど、鳥に乗って空を飛ぶことには憧れがあった。

ふと気になったクロウは後輩を眺めて口を開く。

「ラークは？」

「はい？」

「ラークはどうして鳥使いに？」

彼は口を固く結んで、目をそらす。

「別に、素質があるから引っ張られただけです。専門職になれるんだったらそれでよかったし、わざわざ役所のほうから誘ってきたなら断るわけないし。だから、とりあえずなっただけです」

その声はかすれていて、悲しみを帯びていた。

クロウは喉のあたりがぎゅっと締まって苦しくなる。

「そんな、だって」

「だから、もう専門職で働けるならそれでいいんですよ。将来の心配なんてしなくていいし」

「……じゃあ、鳥使いになりたくはなかったの？」

クロウの問いに、ラークは口を開きながら立ち上がろうとする。そしてすぐに我に返り、座り直してしまう。

「……ただ単に、鳥と話せるだけじゃないか。空を飛べるのはいいかもしれないけど」

ラークは悔しげに唇をかむ。

「僕は、本当は影使いになりたかったんだ。こんなじゃなくて」

専門職は本人の希望を優先することが多いが、例外もある。影を操る影使いや鳥と意志疎通できる鳥使いは、生まれつきの能力によるところが大きい。

これらに関しては素質優先で振り分けられ、もとは専門職すら志望していなかった者が鳥使いになった例も存在すると、ジェイドが教えてくれた。

「鳥使いになりたかったわけじゃない。こんな仕事、全然楽しくない」

「そ、そんな、そんなことないよ……鳥使いだって」

「トーレスさんが言ってたような、僕も町の人を守るような、そんな仕事をしたかったんだ。トーレスさんに、なりたかった」

ラークは拳を握る。

「どうして、自分の望む能力が与えられなかったんだらう。影使いになりたいって言っても許されはしなかった。同じ特殊能力だとしても、鳥を操れたってなにになるんだ。誰かを助けられるわけでもないし、かっこよくない」

クロウは、どう声をかけていいのかわからなかった。

今まで、他の職業になりたいだなんて考えたことはなかったし、高所恐怖症ではあっても鳥使いの道を進むことはできた。

まさか、見習いとして働くことも許されないという状況なんて、想像もしていなかった。

だから、次に出された質問に戸惑ってしまった。

「クロウさんは、高所恐怖症でしょ？ それで鳥使いを諦めようとは思わなかったんですか？」

なんとかしてくれ、大丈夫か、などの言葉は数え切れないほどかけられた。けれども、それで落ちこんだり自己嫌悪に陥ることはあっても、本気でやめようと思ったことはない。

「でも、僕はずっと鳥使いになりたかったんだ」

「レインアローにちゃんと乗れないのに？」

クロウは笑う。笑おうとした。

「乗れないのに」

ラークは苛立ちをいっそう露わにして、自分の荷物を手に取る。

「僕は、クロウさんのこと、よく理解できません。飛べないんだったら、余計にこの仕事楽しくないじゃないですか」

ラークは顔を背けて言い捨てると、そのままどこかへ走って行ってしまった。

二人のやりとりを天井の止まり木から見ていた見ていたラーヴァが、相棒を慰めるように下りてきた。

「大変ダナ」

「うん……」

「他ノヤツラニ聞カレナクテヨクッタナ。カイトガ聞イタラ、即座ニ地上ニ突キ落トサレルゼ」
確かに、とクロウは頷いた。

カイトは鳥使いの仕事に誇りを持っている。それゆえに、なかなか成長しないクロウに苛立っていたのだ。そんな彼が今のラークの言葉を聞いたら激昂するにちがいない。

「俺モ結構ナ歳ダガ、アソコマデ鳥使イヲ否定スルヤツハ初メテダ」

かっこよくない。幼くて直接的なその言葉は、痛みをともなう響きを持っている。

なぜ鳥使いになりたかったのか。鳥使いでいる意味はあるのか。もっとまともな返答ができなかったのかと後悔がやってくる。

仕事ができないあまりに自信をなくし、弱気になっていた時期はあった。けれども、クロウは鳥使いの仕事嫌いになれなかった。

鳥たちもジェミア市民の一員であり、都市のために働いている。困らせられることもあったし、逆に自分が彼らを困らせたこともあった。人間と同じで、自分の態度とつきあいかた次第で彼らはよき仲間になる。

もっと真剣に飛行訓練に取り組もうとしてから、クロウは勤務に対してどんどん意欲的になっていった。自分が変われば相手とのやりとりも変わる。たとえまだ完璧に空は飛べなくても、失敗が続いてしまっても、先輩たちや鳥たちとの日々は楽しさを増した。

「とりあえずなっただけ、か」

クロウは俯く。

「僕は、『とりあえず』の気持ちで鳥使いをやるのはもったいないと思うんだ」

「ソレハ俺ダッテ同ジサ。デモ、無理強イハヨクナイ。マダオ前ノ言葉ニハアイツヲ動カスチカラッテノガ備ワッテナイ」

いつもクロウに甘いラーヴァだが、彼はあえてその言葉を選択した。

クロウの口内に苦みが広がる。

鳥使いとしての能力は低くても、クロウは鳥使いという仕事が好きだ。だからこそ、自分ではラークの心を変えられないという現実は悲しかった。

ラークの本音を聞いて以来、ますます彼とは気まずい関係になってしまった。ちょっとした言葉をかわすにしてもどこかつかえてしまう。

飛行訓練も、ラークがぼんやりと指示に従うそぶりを見せるだけで、主任の嘆きがさらに大きくなった。

ジェイドも不満を口にするが、肝心の乗り手が上の空でまったく耳に入らないのだから、暖簾に腕押し状態だ。

それが何日続いただろう。ある日、二人が通常どおり飛行訓練をしていると、主任に席を外さなければならない用事ができた。

ジェイドもゲイルもいざというときの対処のしかたを知っているし、ラーヴァもそばにいるのだからと、自主訓練として市庁舎周辺を一周するように主任は言い残す。

「言ワレタトオリニスルノニ、『自主』ナノカネ」

「主任がいないときに飛ぶのは全部自主なんじゃないのかな？」

クロウはラークの様子を確認する。変化のない、気の抜けた表情だった。

「ラーク、とりあえずついてきて」

「ホウ、クロウモー丁前ニソナコトヲ言ウヨウニナツタカ」

ゲイルがからかうように言う。ジェイドは投げやりな笑いをよこしてきた。

「行こう」

ラークはそっぽを向くが、ジェイドが間髪入れずに上がる。

「あ、ちょっと、なに？」

「行コウツテ先輩ニ言ワレテルンダカラ、行カナキャダメデシヨ」

「勝手に決めないでよ」

「アナタガ適当ダト私ノ株モ下ガルノ。怪我シタクナケレバ捕マッテイルコトネ。落トスワヨ」

ジェイドはゆっくりと上昇する。ラークはしぶしぶ手綱を握りなおした。

石畳の道が遠い。人が指人形に見える。

普段は見上げている屋根ですらずっと下にあり、クロウの顔はひきつる。中途半端な高さのほうがずっと怖いときもある。

下のほうで、数人が手を振ってくる。子どもではないので観光客のようだ。

クロウは恐る恐る手綱から右手を離し、大きく振る。後輩のためにも頑張りたかった。

「大丈夫ですか？」

肝心の相手は馬鹿にするような息まじりで言う。

「だい、じょうぶだよ」

「声震えてますよ。まあ、あの人たちからは見えないでしょうけど」

言いながら、彼は投げやりに手を振る。それでも観光客たちは大喜びで、浮かれた叫びが二人のもとまで上がってくる。

「もう戻ります？」

「いや、まだ……」

「おーい」

クロウの言葉に割って入る声がひとつ。

「おーい、二人とも、こっちこっち」

「やあ、トーレス」

「トーレスさん！」

トーレスはひらひらと手を振ってくる。なにをしていたのやら、民家の屋根に立っている。

「巡回？」

「そう。そっちは訓練？」

「まあね」

トーレスは足元の自分の影を垂直に伸ばして、二人のいる高度まで上る。

「トーレス、器用だね」

足場は狭くてレインアローに乗るよりも不安定なはずなのに、彼は涼しげな顔だ。

「普段はあんま使わないけどな」

けらけら笑うトーレスを、ラークは感心した様子で見つめる。自分がなにをやっても興味なさそうにするのに、トーレスと会ったとたんこれだから、クロウも複雑な気持ちになる。

雑談を二、三交わし、トーレスがそのまま町中に戻ろうとした瞬間、ラークは左側を見て無意識に呟いた。

「あれ、あそこ……」

初等生と思われる子どもたちが、すこし遠くの城壁にのぼっているのが見えた。

市民に開放されているエリアは限られているが、そうではないところを警護兵の目を盗んでわざわざのぼるのがジェミア流の度胸試しなのだ。

「小さい子のはぼりたがるよねえ」

とはいっても、クロウはいつも嫌がって置いてけぼりにされることが多かったのだが。当時の記憶を思い出して、クロウは苦笑する。

「まだああいうのやってるんだ。最近は何市庁舎の幽霊とか聞くけど」

「ああ、流行ってますよね。でも、いるかどうかはわからなくて得体のしれないお化けよりも城壁のぼりのほうが度胸試しには手っ取り早いし」

トーレスとラクの会話に頷きながら、クロウは手綱を動かす。

「一応注意しなきゃね」

レインアローで城壁に行くと、外の景色がよく見える。本当は行きたくないが、これも仕事だ。

「ちょっと、大丈夫ですか？」

ラクが呆れたような声を出す。確かに、ゲイルの上に立つ脚はまだ頼りない。

「だ、大丈夫だって。ト、トーレス、乗る？」

「いや、俺は自分のペースで行くよ」

彼は言いながら下降し、今度は影を横に伸ばして屋根と屋根の間を跳ねるように移動する。

ラクは目を丸くしながらそれを見つめる。そして、情けない先輩の後ろ姿に大げさな溜め息をついた。

そんな気配にも気づかず、クロウはゲイルとともに前進する。そして、やっとのことで、なんとか道に着地する。

「こーら、そんなところ危ないよ」

子どもたちは一斉にクロウのほうを向く。

「わあ、レインアローだ！ かわいい！」

数人が集まってくる。ラクもクロウに続いて到着すると、彼らはますます興奮した。

「撫でていい？」

「ゲイル、いいよね？」

「マアナ」

ゲイルはうんざりした声を出しつつも羽をしまう。

子どもらの興味はレインアローに移ってしまった。ゲイルから下りたクロウは方々から飛んでくる質問に答える。

そして、壁の近くにいた一人の子がみんなの関心が自分から逸れてしまったことに膨れて移動したのに気づけないでいた。

トーレスも追いついてきて、危険な遊びはほどほどにするように注意している最中、ラーヴァが妙な声をあげた。

「オ、オイ、見口ヨ！」

クロウとラクは顔を上げて、息をのむ。二人の視線の移動に気づいて、その先を辿ったトー

レスもぎょっとした。

短時間のうちにどこをどう行ったのか、見張り台の脇、安全柵の向こうに男児が立っていた。

「ほら、見て見て！」

振り向いた子どもたちは最大級の歓声をあげる。これで彼は英雄だ。得意げに笑った。

「ちょっと、君。今すぐこっちに戻るんだ！」

「やーだ」

少年はおどけて、もっと不安定な姿勢を取る。

トーレスは鳥使い二人を横目で見て、クロウに囁く。

「クロウ、バックアップ頼む」

反射的に、クロウはさりげなくゲイルに乗った。あの子どもを戻すために、向こう側で補助に回るつもりだった。

その間にトーレスが駆け寄る。

「あのなあ、そんなんで落ちたら父ちゃん母ちゃん泣くぞ。今すぐこっち来い。ほら、手貸してやるから」

「大丈夫だもん」

「んなわけないだろうが」

ゲイルは軽く地面を蹴り、一度離れた地点の柵を越える。子どもたちははしゃいだ声をあげた。

その間に、トーレスも柵の外に出て、彼に呼びかける。

「ほら、俺に捕まって」

「やだよ、このままジェミア一周するっ！」

「んな無茶な――」

トーレスが言い切る前に、少年の体が傾いた。

とっさにトーレスがその手首をつかもうとしたが、彼にとっても一瞬の出来事で、自分すらもろくに支えられない姿勢になった。

少年の足がレンガを離れる。トーレスはすばやく腕を掲げた。

クロウは無意識に手綱を操った。

まるで糸がほどけるように、影は伸びていく。それは子どもの身体を確かに捕らえた。それとほぼ同時に、クロウは宙で止まった子どもを抱きとめた。

呼吸が速くなる。自分が落ちる想像をしていたときよりも何億倍も恐ろしい光景を見た。涙が出そうだ。

トーレスも、もうひとつ伸ばした影に乗って近づいてきた。

「おう、ありがとう。ちょっと俺だけじゃ厳しかったわ。影の粘度がイマイチだった」

「トーレスさん！クロウさん」

ラークがやってきた。

「間一髪！ はあ、心臓に悪い」

「君、大丈夫？」

助けられた子どもは顔面蒼白、小刻みに震えてクロウを見上げ、泣き出した。

抱きつかれたクロウはよろめいて、つい下を見る。黄金色の大地を、雲の影が優雅に滑っていた。

「う、怖かったね。僕も.....今怖いよ」

「クロウ、もう限界かも。乗せて」

トーレスはゲイルの背中に乗り、自分の足に絡ませていた影を消す。

「トーレス、本当によく平気だよね」

いくらなんでも、影だけを支えにして空へ飛び出す勇気はクロウにはなかった。

「自分の力信じてるからさ」

彼はクロウにくっついて離れない子どもの頭を優しく撫でた。

「ああいう遊びは加減が必要だからな、よく覚えておけよ」

さらりとした口調に、年長者の余裕のようなものを感じる。クロウは彼がすこし羨ましかった。

。

トーレスが影越しに伝えたおかげで、警護兵も駆けつけ、子どもは無事にジェミア市内に戻ることができた。

そちらは警護兵に任せ、クロウとラークは局長への説明のために鳥類局に戻った。居合わせた者として、トーレスも一緒だ。

まだ心臓が平常に戻っていないクロウの報告は要領を得なかった。代わりに、トーレスが見事に語ってみせた。少々大げさすぎて、クロウ自身も戸惑うほどに。

トーレスは余所行きの微笑みを作る。

「クロウがいなかったら、僕もあの子ども死んでいたかもしれません」

クロウは飛び上がって、小声でトーレスに話しかけようとするが、彼はそれを遮る。

「ねえ、ラーク？」

いきなり名前を呼ばれたラークはあわてて背筋を伸ばす。

「は、はい！」

局長は二人を交互に見て、軽く頷く。

「そうか。では、クロウ。君にはポイントをやろう。期限まであとすこしだ。このまま勤めに励みなさい」

クロウが反応に窮していると、トーレスが足を踏んだ。それで悲鳴のように返答した。

局長が去ったあと、クロウは口を開く。

「ちょっとトーレス、あんなにおおげさに言う必要なんて」

「まあまあ、あそこでああ言わないとき。俺は別に得点なんて不要だし？」

大笑いするトーレスを、鳥使い見習いの二人はぽかんとして見つめた。

いつものように軽く挨拶をして去っていく彼を見つめて、ラークはぽつりと言う。

「やっぱり、トーレスさんはカッコいいなあ」

トーレスはそのまま自分の部署に戻っていった。見送った二人は、あらためて息を吐く。

「はあ、緊張した……」

「オ疲れサン」

右肩に止まったラーヴァは、クロウの頬に頭突きをする。

「今さらだけど、腰が、腰が抜けそう」

「ちょっと大丈夫ですか？」

よろけるクロウを、ラークが支える。

「クロウニシテハ、ガンバリスギタクライダナ。ソレデー人ノ命ヲ救ツタンダカラ、タイシタモンダ」

「そう、かな？」

「去年マデノオ前ダツタラ、ナニモデキナカッタロウヨ。立派ニナッタモンダ」

そこまで誉められると照れくさい。けれども、ラーヴァは本気で喜んでくれているから、自分も嬉しくなるクロウであった。

相棒の言うとおりに、今までのクロウだったら飛び出せもしなかったはずだ。

トーレスだけでもどうにかなったかもしれない。それでも、自分が救出劇に関われたということは、彼の自信となった。

「はあ、でも、本当に飛び出すなんて無鉄砲……」

ラーヴァのご機嫌な声を聞きながら、ラークは小さく嫌みを言う。しかし、クロウは笑顔で後輩を振り返る。

「ね、ラーク。鳥使いもなかなかいいだろ？」

眉間にしわを寄せたラークは、唸るような声を出した。

「どうせなら、ちゃんとした鳥使いの人の口から聞きたいですけどね」

でも、と彼は笑う。

「まあ、せっかくだし、今回はそう思ってさしあげてもよろしいですよ、先輩」

その一言だけで、クロウはこのうえなく嬉しくなってしまった。

その後のラークは、ぎこちなさは抜けないものの、少しずつ局内の人々や鳥たちと打ち解けるようになった。

クロウも、子どもを救出したことでまたすこし空を飛ぶことへの恐怖が減った。訓練にも力が入る。

後輩という存在ができたのはよかったかもしれない、と主任は言う。お手本を見せたいと張り切ることが、技術の向上にもなっていると。

これから世界もジェミアもどんどん寒くなっていく。

気温が下がるにつれて、春が待ち遠しく思う者は多くなる。通常ならクロウも同意していただろう。しかし、冬が終われば、約束の時はすぐそこに迫ってしまう。

それまでに、と思いながら、クロウは空を翔ける。鳥使いの良さを証明するのは、これからの自分だと。

クロウのポイントは現在九七四。残り五二六。卒業期限まであと四ヶ月。

クロウの家には、一枚の写真がとりわけ大事に飾られている。ラーヴァを肩に乗せて穏やかに笑う男性——彼の父ロビンだ。

彼は有能な鳥使いだったが、突然倒れ、家族が心の準備をする暇さえなく亡くなってしまった。

一月の初めの寒い朝、いつもどおり目覚めたクロウは、まずその写真の前に向かった。父親似の彼は、大人になったら自分もこんな顔になるのかと、写しとられた笑顔をまじまじと見つめた。

「父さん……僕、十四歳になったよ」

その日はクロウの誕生日だった。いざ迎えてみると、歳をひとつ重ねる嬉しさよりも、迫りくる期限への悩みが大きかった。

同じ鳥使いだったロビンは、十四歳の誕生日を迎えたときにはとっくに級持ちになっていた。比べてもしかたないとはわかっているけど、クロウは自分の力不足を恥じてしまう。もしも父が生きていたら、こんな息子をどう思うか、と。

見習いでいられる期間はあと三ヶ月もない。気を引き締めていかないと。クロウは写真のなかの父をもう一度見つめた。

「クロウ、オメデトウサン」

ラーヴァがいきなり突進してきた。不意打ちだったので、クロウはそのままよろける。

「わっ！ もう、ラーヴァ……」

「悪い悪い。デモ、モウスコシ体幹鍛エタハウガイイゾ」

ラーヴァはクロウの頭に着地すると、ロビンの写真を見やり、視線を下に落とす。

「……オ前モ十四歳カ。アンナニチッチャカッタノニナ」

「ラーヴァくらい？」

「ウーン、イイ勝負ダナ」

ラーヴァはクロウが生まれる前からこの家にいる。家族の一員として彼の成長を見守ってきた。言わば三人目の親のようなものだった。

クロウが微笑むと、ラーヴァは首を動かす。

「ナンダヨ」

「ううん、なんでも」

彼には心配をかけっぱなしだ。いつだってラーヴァはクロウの味方であり、弁護士だった。

他にも、家族だって友人だって局の仲間だって、クロウのことを心配したり励ましたりしてくれる。

部屋のカレンダーを見る。自分のためだけでなく、父のため、みんなのために期限までの残り少ない日々を精いっぱい過ごしたかった。

新年の業務を開始したその翌日、始業の鐘が鳴ってから数分経って、局長のパロットが現れた。

「月末のことなんだが」

地上から大規模な視察団がやってくる。その行程には、鳥類局の見学も含まれている。今回はかの国の王族も参加することから、鳥使だけでなく視察団を相手にする部署すべてがいつになく気合いが入っていた。

大まかな予定は決まっているが、細かい予定は直前まで先方とすり合わせる。

「今回は、リチャード王子だけでなく、そのご長男のオリバー王子もご一緒だ。そこでなんだが」

局長はクロウを見る。

「オリバー王子もちょうど十四歳なんだ。それで、見習いに同い年の子どもがいると知ったリチャード王子が、ぜひクロウにもレインアロー飛行を披露してほしい、とご希望だ。あと、できれば今回の滞在で案内役にも加わってほしいとも」

局内全体がざわつく。クロウ自身、目を丸くする。

「お言葉ですが、局長」

丁寧に拳手をしながら、カイトが口を開く。

「おおいに不安があります。いくらなんでも、これまで民間人相手の催しにもほとんど参加したことないんですよ？」

「先方の強い希望だ。それに」

パロットは微笑みながらクロウに向き直る。

「この半年と少しでだいぶ君も力をつけている。せっかくお話を頂いたのだから、頑張ってみなさい」

地上から時折訪れる視察団は、観光客とはまたちがった存在だ。

ジェミアのようなある意味世界の異分子となっている土地は、他国との交流が難しい。なるべく友好的な関係を築かなければならないし、自分たちが持つ特殊性もうまくアピールしなければ

ならない。

視察隊の前で仕事内容を見せることは重要な役割であり、上から信用を得ているといってもいい。

「ぼ、僕にできるかな」

「先方は鳥使いのことを深く知っているわけではない。多少のことならごまかせるし、オリバー王子の相手も君一人でやるわけではない。とにかく、気楽にやりなさい。最近の調子ならできるさ」

「でも、ラークのほうがいいんじゃないか？」

誰かの揶揄に笑いが広がる。

「ラークも順調に点を獲得しているが、クロウにまだ分があるだろう。それに、今回はあちらのご意向に沿いたい。クロウ、やってくれるね？」

「はい！」

クロウは意気揚々と返事をした。これ以上ないチャンスを与えられたなんて、まだ半分信じられない気持ちがあった。

そんな部下を見て、局長はクロウを別室に誘導した。

「……みんなの前では言えなかったが、オリバー王子は少々難ありでな」

「難、ですか？」

パロットは言いづらそうに顔をしかめる。

「中等学校に入ってから素行が悪くなって、問題をたびたび起こしているんだ。今回は公務に参加させて、王族の自覚を持ってもらいたいとの意向があるという話を聞いた」

思ってもみなかった話の内容に、クロウは困惑した。その様子を目にして、局長は付け加える。

「影使いからはトーレスが出る。彼とは仲がいいだろう？」

今年十四歳になる代で、こういうときに駆り出される職業は、クロウかトーレスしかいない。もしも一人前になれば、自然と一緒にすることも今後増えるはずだ。

「二人で協力して、オリバー王子の行動に注視してほしい」

単に大人たちと一緒に王子について回るだけならともかく、そういう情報を聞かされると不安になってくる。

「なにかやらかしたら……」

「君はあえて失礼な態度を取るような人間でもないから、それについては安心しているが。まあ、緊張するなよ？ それだけ気をつけてくれ」

「はい！」

パロットはラーヴァに視線を送る。

「ラーヴァ、補助は頼んだぞ」

「オウヨ」

なにはともあれ、今まででは考えられないくらいの大仕事だ。

高揚感を抱えて、その日は一秒も惜しんで急いで帰宅した。濃紺の空に浮かぶ冬の星座を眺める余裕もなかった。

玄関のドアを開けて、そのまま居間に駆けこむ。すでに帰ってきていた姉のフィグも母のマグノリアも、ぼかんとしてクロウを見つめた。

「母さん、姉さん、僕、ぼ、僕ね……」

溜め息とともに、フィグは水を注いだグラスを弟に渡す。

「もう、なによ。落ちついてからしゃべりなさい」

ごくごく急いで水を飲み干そうとする。けれども、まだ心臓も肺も大きく動いて収まらない。うまく喉を通らず、むせてしまう。

「大丈夫？」

おっとりとしてマグノリアは息子の背中をなでた。

「クロウ、深呼吸ダ深呼吸。ホイ、吸ッテ……吐ク」

ラーヴァの声に合わせて呼吸を繰り返し、ようやくクロウは平静を取り戻した。

「で、なんなのよ」

「あの、あのね！ 僕、今月の視察団の相手をするんだ！」

これを無事に終わったら、大量の加点をもらえることは間違いないだろう。

「王族の相手なんて、すごい名誉だわ。これでクロウももうすぐ鳥使いになるのね」

マグノリアは嬉しそうに笑う。

「お母さん、まだわからないわよ」

対照的に、フィグはにやりとする。

「二年以上かけてやっと今一二〇〇点でしょ？ あと二ヶ月、なにがあるかわからないわよー」

「フィグ、そんなこと言わないの。クロウはちょっとのんびりしているけど、まじめだもの。三月までに昇格できるわよ」

「どうだか」

わざと意地の悪い表情を浮かべながら、フィグはクロウの頭を指で弾いた。

「まあ、せいぜいがんばったら？」

「もう……」

フィグが弟をからかうのはいつものこと。それでも、もうすこし喜んでやってもいいのではないかとマグノリアは口をとがらせる。

「ねえ、母さん。母さんは披露の日来られる？」

マグノリアは花屋を営んでいる。いろいろと忙しい立場で、休日は一般の勤め人よりも少ない。

彼女は記憶のなかの予定を探って首肯する。

「大丈夫よ。みんなにも言っておくから。昼食は母さんが作っていかなくていいの？」

「そんな、初等学校じゃないんだから」

顔を赤くする息子に苦笑しながら、マグノリアは亡き夫の写真を手に取る。

「クロウもそこまですになったのね。お父さん、きっと喜んでいるわ。クロウと一緒に空を飛ぶのが夢だっていつも言っていたものね」

ふと彼女はまぶたを震わせるようにしながら、一瞬言葉を切る。

「兄さんも三月には帰ってくるわ。そうしたら、みんなでお父さんに報告にいきましょう」

三月。その言葉にクロウは反応する。

同時に、椅子に座っていたフィグが乱暴に立ち上がって、自分の部屋に向かう。

「フィグ、もうすぐお夕飯だけど」

「課題があるから、ちょっとだけ。クロウ、あんたも鞆置いてきたら」

クロウは慌てて姉のあとを追う。

一度だけ居間を振り返る。ロビンの写真を、マグノリアはぼんやりと眺めていた。

ふいに、過去の出来事が浮かび上がる。

父親が倒れてから亡くなってしまふまでの数日間、クロウの記憶はひどくあいまいだ。

兄姉は無理に学校へ送り出され、母は医者と話したり方々へ駆け回っていた。まだ幼いクロウは、ラーヴァとともに父のいる部屋に置いていかれ、そこで過ごしてばかりいた。

「クロウ、いるね？」

おとなしくラーヴァと過ごしていると、ふとロビンが呼びかけてきた。この時点では意識を失っていることも多くなっていて、不意に声をかけられたクロウはびくりとしてしまった。

「大丈夫、ココニイルゼ」

ラーヴァに引っ張られ、クロウはベッドの前まで移動した。

あんなにたくましかった腕が、シーツの上ではずいぶん細く見えた。ロビンはそれを必死の様子で上げて、クロウの頭を撫でた。

「ごめんな、父さんだめかもしれない」

涙混じりの声に、クロウは戸惑った。まだ死という概念はおぼろげでしかなく、離ればなれに

なる可能性があるという実感はあまりなかった。

「お前が鳥使いになるの、見たかったなあ」

「でも、僕、高いところ怖いよ？」

息子の答えに、彼は苦笑する。

「慣れだよ、慣れ。父さん、すごく嬉しかったんだ。クロウがラーヴァの声が聞こえるの」

物心ついたあたりから、クロウはラーヴァと会話ができる。ロビンはそれをたいそう喜び、レインアローにもよく乗せてくれた。もっとも、クロウは高いところに上がるたびに震えてばかりだったが。

「高いところが怖くてもいいんだ。それよりも大事なものは、鳥たちへの愛情だよ。クロウはラーヴァのことも他の鳥のことも好きだろう？」

「うん」

「じゃあ、大丈夫だ」

息子の答えに、ロビンは微笑んだ。

「……これからは、大変だと思うんだ。本当にすまない。母さんは弱い人だから、父さんの代わりにお前が守ってやってくれな」

「守る？」

「うん、そうだよ。クロウなら、きっと守れるさ」

あのときのことを思い出そうとすると、混乱してしまう。けれども、その言葉だけは今になってもはっきりと覚えている。

十四歳になったとはいえ、今日までのクロウは他人に助けられてばかりだ。まだ誰かを守るほどの余裕はない。

鳥使いになったクロウを見たかった——ロビンはそう言った。

父がもういないなら、せめて立派な鳥使いになりたいと彼は思っていた。けれども、見習いになってからの日々のなかで、その意識は薄れてしまっていた。

約束は守りたい。まだ力のない自分なりに、精いっぱい。

結局、その後マグノリアを助けるのは、長子である兄の役目になってしまった。その兄も今は地上暮らしでジェミアを離れている。その分、自分が母と姉を支えないと、という思いがクロウのなかに芽生えていた。

その翌朝、いつもどおり通勤の道を歩いていると、交差路で見知った顔に出会った。アンジェリカだ。

「おはよう、クロウ」

「おはよう。パイ、ありがとうね。ごちそうさま」

クロウの誕生日、アンジェリカは王冠パイをわざわざ自宅まで届けにきてくれたのだ。

「すっごく美味しかった。姉さんも母さんも喜んでいたよ」

「.....なら、よかったわ」

王冠パイは一月の風物詩だ。本来は皆で切り分けて食べるもので、あらかじめ中にひとつ入れておいたチャームや豆を引き当てた人間には、一年間幸運が訪れると言われている。そのときに祝福の証として紙でできた王冠をかぶるのだ。

アンジェリカがくれたのは、そうした一般的なものとは少しちがう。

表面には細かい模様が施され、そこに飴細工の王冠が載せられている。花、二羽の鳥、枝が見事にモチーフとして組みこまれた王冠は、思わず唖ってしまうほどの出来栄えだった。

「あんないいものもらっちゃって、逆に悪い気がしちゃったくらいだよ」

アンジェリカはマフラーに顔の下半分を埋める。

「だって、十月にプレゼントもらったんだから、私だってお返ししないといけないでしょ」

そういう言い方が彼女らしい。クロウは苦笑する。

市庁舎までは一緒だからと、二人で並んで歩く。道中、視察団の相手をするようになったことを告げると、アンジェリカはわずかに微笑んだ。

「よかったじゃない。ようやくあんたもまともに人前に出してもらえるようになったのね」

彼女が誉めてくれることなんてめったにない。クロウがパァッと表情を明るくすると、アンジェリカはすぐに顔をしかめてしまった。

「ちょっと、まだ喜ぶには早いんじゃない？」

「アンジェリカが、よかったって言ってくれたんだ。それだけで嬉しいよ」

変な子、と彼女はそっぽを向く。

「は一あ、クロウもようやく見習い脱出か」

「みんなからかなり遅れてだけどね。アンジェリカだって、もう八級に上がるって話だけど」

近ごろ、彼女の評判はいつそう上がっていた。

アンジェリカはぶんぶんと首を振りながら、慌てて口を開く。

「それは噂！ 現実を見れば、昇級はまだまだ先ね。まったく、トーレスが異常なのよ」

ぶつぶつ言いながらも、アンジェリカはいつになくやわらかく笑う。

「私ね、もし八級まで上がったら、アルゼンまで市費留学しようと思ってるの」

「え？」

アルゼンは、世界三大国家と呼ばれるほどの国だ。特に菓子作りに関しては、世界一栄えている場所だと言われている。

「ジェミアでだって修行に励めるけれど、一度本場でしっかり勉強して、それで戻ってくる。そのときは今よりもっともっと素敵なお菓子をいっぱい作って、ジェミア中の人を幸せにするの」

そう宣言した彼女は、やや照れくさそうに続ける。

「五月のときに特別審査員やってくれた人なんだけどね」

その人物についてはクロウもよく覚えている。アンジェリカのスランプの原因となったのだから、忘れようもない。

「あのあと、手紙書いてみたのよ。そうしたら秋に返事が来て、アルゼンで学ぶ気があるなら歓迎するって言ってくれたの」

クロウは息をのむ。

「やったね、アンジェリカ！ 認めてもらったんだ」

「一応、なんで選外になったのかは理解した、ということが伝わっただけよ。信用がマイナスからゼロになっただけ。だから、次はプラスにするためにがんばってみたいの」

「できるよ、アンジェリカなら」

アンジェリカは顔を赤くする。

「……ありがとう」

飛行披露の際は見に行くという約束をして、門のところで彼女とは別れる。

「すごいなあ」

彼女の後姿はいつもよりも穏やかに見えた。けれども、背筋はピンと伸びていて、自信に満ち溢れている。

幼いころから彼女とはずっと一緒だったけれど、いつかはお互い大人になってしまうのだ。専門職というくくりでは同じでも、ちがう職業を選んだわけだから、離れ離れの道を歩むことも十分考えられる。

それはわかっているけど、すこし寂しかった。いつも厳しくて、きついこともたくさん言われようとも、やはりクロウにとって彼女は数少ない友人なのだ。

「留学かあ」

物理的な距離だけでなく、精神的あるいは社会的な距離も感じる。

アンジェリカは仕事にうちこんで活躍しているし、トーレスは七級に上がる日もそれほど遠くないだろうと目されている。自分がまだ見習いのままでいるうちに、友たちはどんどん先に進んでいってしまう。

「やっぱり、僕はまだまだなんだなあ」

俯くクロウの額を、ラーヴァは思いきり蹴飛ばした。

「いて！」

「アンジェリカト自分比べテドウスル！」

「だってえ……」

ひりつく額をさすりながら、クロウは唇をとがらせる。

「前モ言ッタダロウガ！ イツデモオ前ハイッパイイッパイ。成長シタカラ過去ヲ悔ムンダッテ。視察団ノ前ニ立ツンダロウ？ 一年前ノクロウジャ考エラレナイホドノ進歩ダ。イイカゲン身ノ丈ニ合ッタ悩ミヲ持テ！」

クロウは、唸るような悩むような声を出す。

「最近、ラーヴァ厳しくない？」

ラーヴァは赤い翼を広げる。

「ソリヤアナ。前ハ俺クライシカオ前ノ味方ッテイナカッダロ。ソレデオ前ニ甘クナリガチダッタケド、今ハチガウ。オ前ノコトヲ気ニカケテクレル人間ガ増エタ。ダカラ親バカハ卒業スルンダ」

「ええー？」

不満の声をあげるクロウに、ラーヴァは体当たりをする。

「セッカク成長シテキタンダ。甘エハホドホドニシテサ、モウチット踏ン張ッテミヨウゼ。春夏秋ノオ前ガシテキタコトヲ、次ハ春ノオ前ニ渡スンダ」

クロウはレイドを救出したこと、会議場まで初めて単独で飛行したこと、落下しそうになった子どもを助けたことを順に思い出す。

四月までの自分は弱気で、すべてのことにびくついていた。けれども、今はちがう。まだ足りないところはあっても、全力で仕事に取り組んでいる。

初めてのこととはいえ、今の自分ならなんでもできる気がした。

「今回ノ仕事ヲ終エタラ、級持ちハホボ確定ダロ。ハーア、長カッタナア」

その言い方が、さっきのアンジェリカと一緒にだ。クロウはおかしくて吹き出す。

「やきもきさせたよね」

まったくだ、とラーヴァはこぼす。

「オ前ニハ野心ッテモノガナイカラナ。ノンビリ生キレバイイサ」

「……のんびりかあ」

まだ見習い。彼女やトーレスからはだいぶ遅れているが、まずはそこから抜け出して級持ちになることを考えなくては。

見習いになって初めての大事な仕事の到来が、楽しみでもあり不安でもあった。

そしてとうとう視察団を迎える日を迎えた。鳥使いだけでなく、今回視察団と接する公務員すべてが緊張感を漂わせていた。

鳥類局で港まで迎えに行くのは、局長ほか要職の数名。残りは、最初の歓迎式典や飛行披露の準備に奔走していた。

視察団のジェミアでの滞在は四日ほど。彼らが鳥類局を訪れるのは三日目だ。

対応の流れについてはすでに説明を受けている。視察団は、港から今回滞在するホテルへ移動する。そこで行われるクロウやトーレスなど、案内役を務める者たち全員と顔を合わせる。その後、予定に沿って市内を巡るのだ。

広い部屋に待機していると、視察団一行の到着の知らせがやってきた。クロウは、見よう見まねでせいっぱい直立不動の体勢を作る。

幾人もの護衛に囲まれて入ってきたのは、背の高い男性だ。ひときわ目を引く。迫力を感じさせるのに、どこかやわらかく優雅――リチャード王子だと一目でわかった。

彼がジェミアを訪れるのは初めてだが、社交的で他国との交流を積極的に行っている人物だ。各国の風習については詳しく、エッセイや論文などをたびたび発表している。

「このたびの来訪が実現できたことは、我が国にとっても大きな喜びです」

口を開けばその声質も穏やかで、人の心をつかみやすい話し方だった。

彼とは正反対のように、明るい色の金髪の少年が、ムスツとした顔でその脇に立っていた。彼がオリバーだ。

式典が終わると、クロウとトーレスがいきなり呼ばれた。不意打ちで緊張しながらも二人の王子の前に出る。

「やあ、今回はすまないね。このオリバーと同じ年というものだから、つい頼んでしまった」

対照的に、リチャードは朗らかな様子だ。

「オリバー、彼らはお前と同じ歳だ。それなのに見てのとおり立派に仕事をしている。ジェミアでは、専門職に就いた子どもたちはこの年齢でもう働きだしているという。そういうところもし

っかり見ておきなさい」

オリバーは曖昧な返事をした。リチャードは一瞬顔をしかめたが、ごまかすようにクロウたちに笑顔を向けた。

「大変だろうが、どうぞよろしく」

クロウは緊張を露わにした笑顔で返事をするしかなかった。

「どう思うよ」

挨拶が終わり、一行はさっそく市内を見て回るために車に乗りこむ。その移動の最中にトーレスはクロウに耳打ちした。

「どう、って……」

「ちょっとやんちゃそうだけど、この状況なら問題は起こさないかな」

一国の王子が二人も来訪するということもあり、警備の数はいつもよりも多めだという。トーレスも、これからは基本的にオリバー王子の護衛となる。

トーレスは要人の相手をした経験があるが、クロウはなにもかもが初めてで、王族という存在も今まで目にしたことがなかった。

「僕は、よくわからないや……」

一日目は恙なく終わり、二日目もクロウたちは同じように王子たち一行に付き従った。

町中を巡るリチャードは、さまざまなものに関心を示したが、オリバーは聞こえよがしに溜め息をつく。そして、大げさに踵を返した。

「オ、オリバーさま、どちらへ」

「視察だよ、視察。こんなお仕着せじゃなにもわかりゃしない。自分の足で回るさ」

リチャードの目つきが鋭くなった。

「オリバー。王族の行動は、問題が起きないようにきちんと定められている。それを乱すのは――」

「だったら、そっちは予定どおり動いてくれ。こっちはしばらくしたら合流する。護衛は二、三人でいい」

「オリバー」

彼は父親の叱責に構わず、クロウとトーレスに目を向ける。

「彼らを見習えばいいんでしょう？ 同い年で働いているっていうんだからいろいろ話を聞いてみようかな」

言いながら、彼はクロウの腕を引っ張りながら去ろうとする。

「うわ！」

とっさにトーレスが笑顔を作りながら、二人の王子の間に割って入った。

「では、町中を少々ご案内してまいります。時間は守りますので殿下のことはお任せください」

トーレスは、オリバーたちが自国から連れてきた護衛に目配せする。彼らが頷くのを確認し、さりげなくクロウを避難させるように離す。

「殿下、こちらへ」

オリバーはつまらなそうに、彼のあとをついていった。そして、クロウはそのあとを慌てて追いかけた。

「別にちょっとふらふらするだけだから、ついてこなくていいよ。どうせ、うちの護衛は離れないし」

「一応体裁整えなきゃならないので」

トーレスの返答に顔をしかめつつ、彼は両腕をさする。

「寒いなあ。温度調整システムあるんじゃないの？」

「作動していますよ」

「だったらもうすこし温めればいいのに。どうしてわざわざこんな中途半端な温度に設定するのかな」

クロウは苦笑いになる。

「ジェミア市民は地上と同じような季節を重んじます」

「だったら地上に住めばいいのに。わざわざ寒いのを楽しむなんてどうかしてるよ」

「でも、寒いと温かいものが美味しいですよ、ほら」

クロウが指した先には、シチューの屋台。大量の湯気が上っていた。

「ああいったものがジェミア市民の冬の楽しみなんです」

「……へえ」

感心したような声を出しながら、オリバーは屋台に近寄った。

「食べたいなあ」

やや離れたところから見守っている護衛が困った顔をしたのが見えた。

「ねえ、金ある？」

「え？」

クロウは慌てて、きょろきょろと周囲を見渡す。そこに口を挟むのはトーレス。

「じゃあ、おごりますよ。なにがいいですか？」

「……チキンシチュー」

「じゃあ、おじさん、それ二つ。クロウは黄甘瓜シチューでいいか？」

「あ、うん」

すばやくトーレスは財布を懐から取り出して代金を払うと、袋シチューを三つ受け取る。

袋シチューは、無発酵のパンに切れ目を入れ、汁気の少ないシチューを流しこんだものだ。町中を歩きながら食べるのに適しており、ジェミアではあちこちで見かける。

「さすが、ジェミア。食事はやっぱりいいな」

若き王子は湯気の軌跡を追うように天を仰ぎ、そのまま視線をクロウへと巡らす。

「ところで。こういうときさ、普通、賓客に合わせないか？ 自分だけ別なんて」

「ああ、こいつは鳥使いなんで、鳥肉は食べられないんです」

クロウはおそろおそろ頷いた。決まりではなく、感覚の問題だった。

彼の亡き父ロビンも同じで、フェアウェザー一家の食卓に鳥料理はほとんど乗らない。

「僕が食べないだけで、他の人が食べるのは嫌ではありませんが」

「なるほどね」

オリバーはシチューを頬張る。

「そもそも、なんで鳥使いになったの？」

「鳥の声が聞こえるからです」

クロウは簡単に専門職について説明する。

「あと、父が鳥使いだったというのもあります。レインアローに乗る父はとてもかっこよく見えて、あこがれました」

オリバーは顔を思いきり歪ませる。

「ふーん。それで、父親と同じ仕事するの？ うちの父が聞いたら羨ましがらるだろうな」

若き王子は皮肉たっぷりに笑う。

「あーあ、なんで王子なんかに生まれてきたんだろ。どこに行っても護衛ばかりでさ、まったく不自由だよ」

「そのかわり、衣食住に困らないのはうらやましいですけどね」

トーレスがぼそりと呟いたのを、オリバーは聞き逃さなかった。

「じゃあ変わってやるよ。もう、うんざりだよ。自分で勝手に子ども作っておきながら、王族の責任とか偉そうに語る親父にも」

オリバーは大きな身振りになる。

「だってさ、俺が王族になったのだって、別になりたいからじゃないさ。生まれたら王子だったってだけだよ。それなのに、一族がどうたら、国がどうたら。知るかっていうの」

どうせ王位は伯父や従兄のものなのに、と彼は吐き捨てるように言う。クロウもトーレスもなにも言えず、ただ顔を見合わせた。

「あんたらもさ、そういう生まれつき進路がほぼ確定って人生、嫌じゃないの？」

「え？」

「鳥の声が聞こえるから、影を操れるから。そんな理由で職業が限定されちゃってるようなもの
だろ？」

クロウは口ごもる。

「それは……」

「僕は、影使いであることに誇りを持っていますし、今の仕事には進んで就きました。嫌ではあ
りませんよ」

トーレスはきっぱりとした口調で言った。

「……僕も、鳥が好きですから、鳥使いの仕事も……好きです」

高所恐怖症でまともに飛べなかったことはさすがに言えない。クロウは思わず俯いてしまう。

オリバーはその返答が気に入らないようだった。

「あーあ。俺は二人とちがうなあ。自分で働いて稼いでいるわけじゃない。あんたらとちがって
俺は自分の財布ひとつ自由に出せないんだ」

しかめっ面でシチューの残りを一気に食べ尽くすと、苦い顔で視察団のところへ戻ろうとする
。護衛がそのあとを慌てて追いかけた。

「ど、どうしよう、怒らせちゃった……よね？」

「怒っているわけじゃないと思うよ」

歩きながら、トーレスもパンごとシチューを口のなかに押しこむ。まだ熱いそれが喉を通る
瞬間、彼はすこしだけ眉間に皺を寄せた。

「反抗期ってやつじゃない？ ラークがあのもまちょっとでっかくなっただけなんだよ」

「え……」

「お前もそれ食べちゃえよ。戻ろうぜ」

クロウも焦りながら、カボチャの甘みを味わうこともなく無理やり胃に収める。

「反抗期、かあ。考えたこともなかったな」

小走りになりながら、クロウは胸のあたりをとんとん叩く。食道あたりで引っかかるような感
覚があった。

「俺たちはそんなことしてる暇あったら働かなきゃいけないからな」

トーレスの言葉にクロウは迷いながらも頷いた。

どこか引っかかるような気持ちのまま、飛行披露の日が訪れた。

最終調整を行うため、クロウは予定よりも早めに出勤した。

「クロウ、本当に、本当に、本当に、大丈夫だな？ 頼んだぞ」

主任の顔色は真っ白だった。これまでずっとクロウの指導を行ってきた人間としては、ここ一ヶ月は不安のあまり胃が痛んでばかりだった。

「は、はい」

「マアマア、見テロツテ」

ゲイルは呆れたように主任を見た。

「ムシロ、俺ノコト心配シロヨ。モウ年寄りダッテイウノニサ」

「ごめんね、ゲイル」

どうせなら若いレインアローのほうが披露にはいいのではないか、という声もあった。しかし、クロウはこれまでずっと訓練につきあってくれたゲイルに頼みたかった。

「気ニスルナ。オ前ナンテ怖クテ乗セラレナイトカ言ウ若造モイル。ソレニ、コノ歳デコンナ衣装ヲ着セラレルトハ思ワナカタサ。悪クナイ」

式典などハレの場では、レインアローは精巧な模様の織が入った布を身にまとう。風を受けることや空中での旋回を考えるとあまり好ましくないが、見栄えはする。

ここ数日は本番を想定しての飛行を繰り返していた。あまり続けるとゲイルが疲労してしまうし、本番は一度きり。成功するには集中力が重要だ。

周囲の不安に反して、クロウの仕上がりは及第点に達していた。

「カイトさん、どうでしょうか？」

不本意ながら付き合わされることになったカイトは、ムスツとした顔で主任と一緒に空中の後輩を見守った。いつもなら飛行時間の倍は小言があるはずなのに、今回は違う。

「こんなものじゃないか？ どうせおまけの新人……って言っても年季入りつつあるが。要は取るに足らぬ余興なのだから、もうこれ以上の完成度を求めてもしかたないだろう」

これまでで最大級の褒め言葉だった。クロウは嬉しくて飛び上がりそうになる。

すこし心が軽くなった気がしてクロウが表情をゆるめていると、扉を開ける音がした。

驚いて振り向いたクロウは目を見開く。オリバーだった。その側にはリチャードもトーレスもいない。連れてきているのは、役人と護衛合わせて三人だけだった。

「殿下、どうしてこんなところに……」

「小屋とかあるらしいじゃん。ただ見にきただけだよ。なに、文句あるの？」

主任は柔和な笑顔を向ける。

「あちらでお父上がお待ちのようですよ。こちらは披露のあと改めてご案内いたします」

「うるさいな、今見たいんだ」

鳥使いたちが困惑していると、オリバーの世話役をしている者が恐縮しながら言う。

「恐れ入ります。まだ披露まで時間があるので、先に見せていただけますでしょうか」

「は、はあ……」

主任は頭を掻く。彼としても気が進まないのは確かだが、わざわざ断るほどの理由もない。

「十五分前までよいのならどうぞ」

主任が開けた小屋のドアのなかに、オリバーはつつかと入っていく。クロウもそのあとに続く。

柵やケージを見渡ししながら、世話役の男性は溜め息をつく。

「ここには何種類くらいの鳥がいますか？」

「現時点は六十種ほどです。鳥類園に出すのはその七割ほどで、残りの三割は完全に研究用です」

オリバーは、主任の説明にはあまり興味を示さなかった。

「あっちの小屋は？」

「あちらはデューパールとレインアローの専用の小屋です。この二種は、僕たちが仕事で特に世話になるので、別に管理しているんです」

クロウはそれぞれの鳥がどのような役割を持っているのか説明する。

「レインアローはこのあとの飛行披露で飛んでいるところをお見せします」

「……そう」

クロウは首を傾げた。自分から見ると言って入ったわりには関心が薄い。

「クロウ、ソノ人誰？」

傍らの鳥が尋ねる。

「地上の国の王子さまだよ。視察にいらっしゃってるんだ」

「はあ？」

オリバーが眉をひそめる。

「独り言？」

「いえ、鳥たちも殿下のことが気になっているみたいで」

オリバーは怪訝そうな顔をした。

「……本当に声聞こえるの？」

クロウは主任と顔を見合わせながら頷く。ふと、さっきまで一緒にいたはずのカイトの姿がないことに気づく。

見渡そうとすると、オリバーが続けて尋ねてきた。

「どういう仕組み？」

「仕組み……」

鳥の声が聞こえたり、獣の声が聞こえたり、影を操れたりできるのは、ジェミア市民の一部にだけ現れる能力。世界でも希少だった。

ジェミアの前身となった国の秘法によるもの、特殊な民族であったジェミア市民の先祖の隔世遺伝など諸説あるが、まだ具体的な説明はなされていない。

クロウにとって鳥の声が聞こえるのは当たり前のことであり、わざわざ深く考えたことはなかった。

「よくわかりません。なんというか、耳にというよりも脳に直接話しかけられているような感じですよ」

オリバーは胡散くさそうな視線をクロウに向けた。それだけでなんだか緊張してしまう。

「じゃあ、こいつがなにを言ってるのか、通訳してみろよ」

そう言いながら、オリバーはいきなり近くのケージを手の甲で叩いた。金属音と、中にいた鳥の羽ばたきが響く。

「ウワァ！」

「あ、や、やめてください。その子は繊細なんです」

クロウの動揺ぶりを見たオリバーは、無表情で格子の隙間から鳥を突こうとする。

「や、チョット……！」

「オイ、嫌ガッテルダロウガヨ！」

天井から二人の様子を見守っていたラーヴァも、下りながらけたたましく鳴く。オリバーは不快そうな顔になった。

「それは？」

視察団に付き添うときは、ラーヴァは離れたところでの待機を指示されていた。オリバーと対面するのは初めてだった。

「僕の相棒です。ラーヴァといって、元は父の相棒だったのを……」

「また父親？ お前も好きだねえ」

苛立ちがいつそう露わになる。クロウは困惑した。

「くっだらねえ」

吐き捨てるように言いながら、オリバーはからかうように再度別の鳥かごを鳴らす。

「ヒャ！」

「オイ、何スルンダヨ！」

鳥たちの動揺が、クロウの頭に直接流れこんでくる。ざわざわとした不快感に、肌が粟立つ。

主任も青い顔をして駆け寄り、そっと囁く。

「肝心なときだ。賓客に対して問題になるようなことは――」

クロウは止まる。

「ラーヴァも」

ラーヴァはひどく不服そうな態度をしながらも、クロウに言う。

「……職務ツテヤツダ、放シテヤレ」

「ラーヴァ……」

主任の言うとおりに、今はとても大事なときだ。この仕事さえ無事に終われば、正式な鳥使いになれる。

身近な人々の顔が浮かんだ。マグノリア、フィグ、ラーヴァ、トーレス、アンジェリカ、鳥類局の先輩たち。

そして、父のロビン。

みんな応援してくれている。自分が鳥使いになるよう願ってしてくれる。

ここで問題を起こしたら――加点を逃して鳥使いへの道が遠のいたら、悲しむかもしれない。呆れるかもしれない。

けれども――。

「大事なものは、鳥たちへの愛情だよ」

あの日、父はそう言った。

その言葉に突き動かされるように、クロウは腕を伸ばした。

「や、やっぱり、ダメです！」

クロウは必死になって、ケージをいたずらにいじるオリバーにしがみつく。

「なんだよ、放せ」

「と、とと、鳥たちが、怯えていますっ。乱暴な真似は、しないで、ください！」

オリバーの顔が赤くなる。

「ちょっと脅かしただけじゃないか。たかが鳥にそんなムキになるなよ。バカか？」

護衛があわてて、クロウを引き離そうとする。

「君、一国の王子に対して失礼だろう」

「でも、これだけは……」

「クロウ、よしなさい」

主任は苦い表情で、クロウの肩を押さえた。

「で、でも、主任……」

「オリバー、いるのか？」

抑えようとする側近を跳ね飛ばすようにして、リチャードが中庭に入ってくるのが窓から見えた。その背後には、カイトとトーレス。

あちらからもクロウたちの姿が見えたようだ。リチャードは一步進むごとに眉間のしわを深くしながら、こちらへ向かってきた。

オリバーは舌打ちをする。

「いいかげん放せよ、公務員のくせに！」

振り払おうとしたオリバーは、勢い余ってバランスを崩す。その踵はそのまま床から離れ、彼は仰向けに倒れこむ――彼の腕をまだ放さずにいたクロウとともに。

鈍い音がした。胸に痛みが走る。

「う……」

オリバーが肩を押さえて呻く。

クロウは頭が真っ白になった。

「殿下！」

護衛たちがクロウをどかし、オリバーを抱き起こす。

「肩、肩が……」

痛みを訴えるオリバーを見て、クロウは足が震えた。目の前の光景が、ずいぶん遠くに見えた。

「ご、ごめんな、申し訳……」

「いいから」

護衛の声はひどくぴりついた感触だった。そこに、駆けつけた局長の声が続く。

「ひとまず、飛行披露は中止だ。オリバー王子を医務室へ」

しばらくして、待機していたクロウたちのもとに、オリバーを診察した医師がやってきた。

「ご安心ください、打撲ですが大事には至りません。数日以内には痛みもひくでしょう」

リチャードはほっと息を吐く。

「あれほどおおげさに痛がっておいて……我が息子ながら情けない」

「心よりお詫び申し上げます」

市長と鳥類局局長のパロット、警備局長がそろって謝罪する。

それを見たりチャードはあわてて手を否定の形に振る。

「よい、よい。私も一部始終は見ていたからな。むしろこんな騒ぎになって申し訳ない」

リチャードに視線を向けられたクロウはびくりとし、硬直する。

「ええと、君の名は……」

「ク、クロウ・フェアウェザー、です」

「そうか。クロウ、息子が鳥に無礼な真似をしてすまなかった」

自分の父親と同じくらい年齢、しかもずっと身分の高い男性に謝られ、クロウは狼狽する。

「いえ。僕が悪いのですから……」

リチャードは、責任者たちに向き直る。

「できれば、穏便な処分で済ませてくれないだろうか。うちのオリバーが馬鹿なことをしなければよかっただけの話だ」

「いえ」

もっとも険しい顔をしたのはパロットだ。

「他国の王族を負傷させるなど言語道断です。彼は即刻解雇、今後二度と鳥使いの職に就けないようにします」

市長と警備局局長も、その早い決断にぎよっとする。

驚いたリチャードは立ち上がる。

「それだけはどうか容赦してくれないだろうか」

「いたしません。でないと、他の者に示しがつきません」

「しかし、それでは私も困る。息子が粗暴な振る舞いをしたあげく、それを止めようとした少年が重い処分を受けたとなると、こちらの面目が逆に立たなくなる」

友好関係を築くための今回の視察だというのは、こちらも変わらない。リチャードはそう主張する。パロットの言うとおりにすれば、むしろリチャードたちの名誉に傷がつくのだと。

「双方のためにも、どうかオリバーの怪我に……もう怪我というのもなんだが、とにかく不問にしてほしい。この程度のことで大げさに騒いだら、逆に我が国の恥だ」

「殿下。ご寛大な心、感謝申し上げます。ですが、我々としてもここで甘い決断をすると、今後に差し支えます」

王子一行をホテルに返し、鳥使い一同は事務室に集合した。クロウはその前に立つ。いろいろな感情のこもった視線が彼に集中した。

眼鏡の奥にあるパロットの瞳は疲れと険しさに染まっていた。

「君の欠点は、その場のことしか考えられないことだな。事情は理解できるが、さすがに局長として不問にできない」

彼は大きく溜め息をつく。

「ラーヴァ。お前がついておきながらどうしてこうなるんだ」

「悪い、パロット。……デモ、ウチノ坊主ガ間違ッテイルダナンテ、クチバシガ折レヨウト翼ガネジレヨウト俺ニハ言エナイ」

自分のこめかみを人差し指でつつくパロットの表情は険しかった。

「さいわい、リチャード王子も大げさな処罰はしないようにとの仰せだが」

彼はクロウの正面に立って向かい合う。

「君の行動の理由は承知している。だがな、クロウ。けじめはつけなければならない」

「はい」

「二〇〇点。これを現在の君の点数から引く」

室内にざわめきが広がる。

クロウの現時点のポイントは一二九九。それが一〇九九まで下がるということになる。

「局長、さすがにそれは酷でしょう」

主任が声をあげる。数人が同意の声を漏らした。

「残り二ヶ月。そこで四〇〇点取るのは不可能ではない。よほどの労力が必要だが」

局長はクロウの肩に手を置き、彼の浅葱色の瞳をじっと見つめた。

「やるか？」

できるか、とは尋ねなかった。

クロウは掌に汗をかいた。ようやく十ヶ月かけて七〇〇点追いつけることができたのに、残りたった二ヶ月で四〇〇点も取れるとは思えなかった。

しかし、ここで首を振るわけにはいかない。クロウは精いっぱい強がった表情で頷いた。

解散が告げられ、真っ先に寄ってきたのはシーガルだった。

「減点が二〇〇か」

シーガルは頭を搔く。

「局長もまた、微妙な数字にしたな。多すぎる、でも取り返し不可能というほどじゃない」

彼はクロウの髪をぐしゃぐしゃにする。

「あの王子さまの態度、俺も腹立ったよ。だから、お前のこと怒れない。他の部署ならともかく、鳥使ってのはそういうもんだ。すくなくとも、俺以外にもそういうのは何人かはいるからな」

「俺は含めないでくれよ」

低い声でそう呟いたのはカイトだ。

「今までの準備が全部台無しだ。来賓を迎えるのに準備してきたのはみんな同じだぞ」

気まずそうに視線をそらす数人を見て、クロウは頭を下げる。

「本当に……みなさん、ごめんなさい」

涙が出そうになるのをこらえる。今は泣いている場合ではない。

その日は早めに帰されることになった。自宅まで、とても遠く感じた。

母は見に来ていただろうか。披露が中止になった理由が自分の息子の失態であることにどう思うだろうか。

ジェミアのために働くどころか、都市の――鳥使いの名誉を傷つけてしまった。

悔しくてたまらない。

とぼとぼと歩くラーヴァはクロウの頭から肩に移る。

「クロウ、パロットノコト、厳シイト思ッタカ？」

クロウはしばらく考えたのちに、首を横に振った。

「俺ハ、アイツニ感謝シテイルヨ」

「感謝……？」

ラーヴァは何度か足の位置をかえる。

「モトモト、小サイ王子サマハ問題児ダッタケドサ、ソレデモ大事ナ立場ダ。アソコデ、イノー番ニパロットガオ前ノ処分ヲ重メニシテ告ゲタダロウ？ ソウナルト、アチラハ慌テルシ、糾弾モシニククナル。結果的ニ、先方ノ要求デノ解雇ハ回避サレタワケダ」

鳥使いが問題を起こしたならば、局長の立場だって悪くなるはずだ。それでもまだチャンスを残してくれた。

今は嘆いている場合ではない。

クロウは唇を噛む。

「クロウ！」

呼ばれて後ろを向くと、トーレスがラークとアンジェリカを伴って走ってきた。

追いついて、まず口を開いたのはアンジェリカだ。

「ばっかじゃないの？」

アンジェリカは涙目で、口をへの字にしていた。トーレスやラークから事情は聞かされたようだ。

「放っておけばよかったのに。どうするのよ。二〇〇点も減点されちゃって」

彼女の肩を、トーレスが叩く。

「もうそんなこと言ってもしかたないだろ。起こったもんはどうしようもない」

「でも……！」

トーレスはクロウに向き直る。

「お前がそういうやつだっていうのはとっくにわかってるからな。大丈夫、二〇〇取られただけで、次は四〇〇点取ればいいだけの話だ」

「それ、トーレスだから言えるんだよ」

クロウは苦笑する。彼のその軽い口調が、こんなときでさえなんだか楽しく思えてくる。

「笑ってる場合じゃないわよ。あと二ヶ月で四〇〇も取れるの？」

「なんとかするよ」

「なんとかって……」

「ナントカスルッテ言ッタンダカラ、ナントカナル。ウチノクロウハソウイウヤツサ」

きょとんとするアンジェリカに、ラークが通訳する。

「もう、ラーヴァまで」

焦っている自分が馬鹿みたい、とアンジェリカは頬をふくらませる。

彼女が心配するのは当然で、この時期になってようやく一三〇〇ポイントを越していたクロウが残り二ヶ月で挽回できる可能性は低い。

さいわい、鳥使いは常時ポイントを稼げるタイプの職業ではあった。それに賭けるしかない。

「僕、最後の最後まで、がんばるから」

ふと、視界に白いものがちらつく。小さな雪の粒だ。どこからか風で飛ばされてきたようだ。

その儂い姿が、届きそうで届かなかった級持ちへの夢のかけらに見えてきて、切なくなる。

しかし、今、クロウは最後の最後までがんばると宣言した。それは、トーレスたちとの約束であると同時に、自分への誓いでもある。

(まだ、まだ取り返せるはずだ……)

クロウのポイントは現在一〇九九。残り四〇一。卒業期限まであと二ヶ月。

三月は気候がいいせいか、外からの客が増加する。そのおかげで、ジェミアの観光関連職は大忙しだ。

それは鳥使いも例外ではない。

「クロウ、十二時に四人の予定だ。迎え頼む！」

「はい！」

「クロウ、今日のデューパールの若いやつらの訓練頼んでいいか？」

「はい！」

「クロウ！」

「はい！」

大きな仕事を優先しても数が多すぎて追いつかず、小さい仕事は余計に回らない。クロウは手が足りないものはなんでもやった。普段は苦手な観光客の相手だって怖気ついてはいられなかった。

なにせ、残りわずかな期間で大量にポイントを稼がなければならないのだ。少しでも多く仕事をこなす必要があった。

彼の状況については局内の全員が理解していた。自業自得だと不干渉を宣言する者もいれば、ここまで来たのだからと彼を支援する人間もいる。後者はなるべくクロウに頼みごとをしていた。そうやって彼が一点でも多く獲得できるように。

クロウもそれをわかっているので、いっそう熱心に仕事に励んだ。質を落とさずに迅速にというのは骨が折れるが、甘えたことは口に出さない。それが、応援してくれている人々への誠意だった。

しかし、必死にやれば疲れでくたくたにもなる。二月からはカフェに寄ることもできず、そのままずっと帰宅する日々が続いた。

ふらふらと道を歩くクロウの肩を不意打ちで叩く手があった。彼が振り向くと、アンジェリカが立っていた。

「お疲れ。今帰り？」

「うん……」

彼女はクロウの顔を見る。疲れを隠す気力もないような有様だ。

「まだ頑張るの？」

「うん」

アンジェリカは泣きそうな顔を見せる。

「あと何点必要なのかは、わかってるのよね？」

三月も後半になった現時点で、ようやく一三〇〇まで回復したところだ。

一発逆転のチャンスがなければ、昇格には届かないだろう。彼女の心配はよく理解できた。

「でも、最後まで諦めたら、今度こそみんなを本当に裏切ってしまうでしょ？」

披露当日まで見守ってくれた人、アドバイスをくれた人、応援や励ましの言葉をくれた人。一月のあの日、彼らの期待に応えられなかった。

ここで諦めたら、もう一度彼らをはがっかりさせてしまう。今度は、挽回の機会など訪れない。

「ねえ、アンジェリカ。僕、もうやめたほうがいいと思う？」

ほう、と溜め息をついたのはどちらか。

「.....それは私が答えてもしかたのないことだわ。頑張るクロウの気持ちも、諦めるクロウの気持ちもよくわかってしまうから」

アンジェリカは一瞬だけ目をそらす。

「でもね、クロウ。私は、鳥使いになったあなたを見てみたい」

クロウは言葉に詰まる。アンジェリカはそのまま行ってしまった。

同じことを、彼は母にも言われた。かつて、父のロビンにも。

一月の選択を後悔してはいない。けれども申し訳ない。

見捨てないでくれている人がいる限り、やらなくてはならないと思う心が強くなる。それが、今一番の彼の原動力だった。

「すみません、局長はいらっしゃいますか？」

総務部の男性が入ってきた。

最も扉の近くにいたクロウが対応に出る。

「いえ、来客があつて.....」

「じゃあ、これ渡しておいてください。この書類はサインが必要なので、今日中にこっちまで持ってきてもらいたいんです」

「は、はい。わかりました。伝えます」

男性は、事務室内を見渡す。

「鳥類局はのんびりでいいですねえ。明日は式典なんだし、準備しっかり頼みますよ」

紙の束をクロウに押しつけるようにして、男性はすぐに行ってしまった。

ラークは肩をすくめる。

「最近、総務の人たちピリピリしていますね」

シーガルは声を潜めて、クロウとラークを近寄らせる。

「下からまた無茶言われてるらしいぞ」

ジェミアは一都市でありながら、特定の国家に属さず、独立国のようなものだった。世界政府からもそれは認められている。

しかし、観光地としての人気はあるものの、国際的な立場はさほど強くない。

「僕が、迷惑かけてしまったから」

こういう土地だからこそ外交は大切だ。食料や資源は輸入に頼るところも多く、ときには市民の生命に直結する。

本来、一月の失態は未成年の見習いだとしても許されることではない。

「……確かにあれはまずかったですよね」

言いながら、ラークは微かに笑う。

「でも、うちの母親が言ってたんですけれど、あれ以来オリバー王子はそこそこまじめに過ごしているらしいですよ」

彼の母は通信局に勤めており、他国の最新情報に明るい。

「頭打ったんじゃないかって言われてるとか。クロウさん、むしろ感謝されるべきなんじゃないですか？」

「……うーん」

市長とリチャード王子の判断で、あの事件はなかったことになっている。クロウ自身、あのときの選択に後悔はない。しかし、けしてふんぞり返れる立場ではないともわかっている。

クロウが俯くと、シーガルが彼の頭を叩く。

「今もめてるのは、あの国じゃなくてロートルだよ」

ロートルは、アルゼン、リングトンと並んで世界三大国家に数えられる強国だ。古くよりジェミアとの貿易や交流も盛んだが、そのぶん軋轢も多い。

「関税とかの見直しで、結構高圧的な態度をとってきているって話だ」

「ジェミアは立場弱いですもんね」

精いっぱい皮肉をこめたラークの口調に、シーガルは苦笑いになる。

「市長はがんばってるけどな」

クロウは、数度だけ会ったことのある市長の顔を思い出す。オリバーとの件で大事にならずに済んだのは、彼のとりなしも大きい。

市長はジェミアの独立性を高めようと、市内の産業の発展に意欲的だ。国際交流の機会も増

えた。自身が地上への留学経験も二度あることから、市費留学制度を改革し、能力のある者に積極的に世界の知識や技術を学ぶよう推奨している。

そうした働きが評価され、市民からは絶大な支持を得ている。その一方で、ジェミアの存在感が増すことを好まない一部の国からは警戒されている。

「でも、古い人たちは市長のこと、あんまり好きじゃないでしょ？」

シーガルは最年少の後輩の口をあわてて塞ぐ。

「おい、ラク。役所のなかであんまりそういうこと言うなよ」

市民からは人気があっても、改革を好まない年長の役人受けはあまりよくないのは事実だった。

「ひとまず、俺たちは明日のことを考えよう」

ジェミアの成立を記念する式典は翌日。鳥使いたちは飛行披露をすることになっている。

クロウは今回乗り手にはならないが、その分裏方としての仕事があった。

そのため、翌日も朝一番で、式典の会場となる旧市庁舎公園に彼は召集された。

十代の若い人間は雑用で重宝される。他部署の人間からの指示で、公園のあちこちを走り回るはめになってしまった。

式典が始まるまでまだまだ時間はあるというのに、クロウは早くもクタクタになった。春に比べてずいぶん体力は増したとはいえ、慣れない仕事はやはり辛い。

きちんとした休憩をもらえるのは、昼過ぎの予定だ。そうしたら絶対、町で甘いものを食べようと決意した。確か、アンジェリカたちが花束クレープを売りに出しているはずだった。

「クロウ、その鳥貸してくれないかな」

公園の隅から旧市庁舎前まで戻ろうとすると、いきなり設営担当に声をかけられた。

「ラーヴァですか？」

「ごめん、ちょっと西支部に至急の確認が」

クロウはラーヴァの顔を窺う。

「……俺ハデューパールジャナイッテ伝エテクレ」

「これ、頼んだぞ。もう開始まで時間ないから」

ラーヴァの声が聞こえるわけもなく、間髪入れずにメモを渡して担当は行ってしまふ。

「ラーヴァ、お願い」

「ショウガナイナア。スグ戻ッテクルカラ、ソレマデチャントサボラズニイロヨ」

「もちろん」

青い空に羽ばたく赤い翼を見送る。

「お兄ちゃん、鳥使いなの？」

いきなり声をかけられる。

幼学校の制服を着た子どもが二人、クロウを不思議そうに見上げていた。

「そうだよ」

「見えな—い」

鳥使いには特に制服があるわけでもない。クロウが現在身につけているのも、兄のお下がりの背広だ。もちろん、オリーブバッヂもない。

肯定したものの、自分はまだ正式な鳥使いではないことに気づいて内心慌てる。

「えっと……君たちも式典に参加するんだね？」

「うん、お歌で」

式典に児童が合唱を披露するのも恒例の行事だった。

クロウは周囲を見渡すが、幼学校の団体は見えない。

「先生たちのところに戻ろうね。連れて行ってあげる」

子どもたちはクロウをからかうように走る。

「や—だよ！」

「あ、こら！」

クロウは慌てて追いかけた。関係者以外立ち入り禁止のエリアもある。そこに迷いこんだら問題だ。

「ま、待って！」

足の早さはこちらが勝っているが、ちよろちよろと物陰から物陰へと動き回る。しかも、彼らは二手に分かれ、一人を捕まえてもう一人確保しようとする間に手を振りほどかれる。

握りすぎると、大げさに痛がるので、年下の扱いに慣れていないクロウは困惑してしまった。

そうこうしている間に二人とも見失う。

「はあ、どうしよう……」

溜め息混じりで二人が消えていった市庁舎の裏に回る。しかし、やはりいない。

「どこ行っちゃったんだろう」

どこかに幼学校の引率教師がいるはずだ。これで見つからなかったら、一度そちらに確認してみよう。

そう思いながら見渡すと、壁に沿って設営用の資材が高く積み上げられているのが見えた。ただし、完全に壁につけているわけではなく、若干の隙間がある。

(あんなところに隠れてなんか……)

もしも崩れて埋まったら大変だ。クロウは建物に近寄る。

そこには地面に近い場所に換気用の窓があるだけで、子どもらの姿はなかった。

それどころか、周囲に人がまったくいない。普段は警護兵が周辺を回っているけれども、表の会場に人手を取られているようだ。

「いない、か……」

念のため上半身を隙間に入れるようにして確認するが、気配すらない。

「あれ？」

窓は閉まっているが、ガラスごしに鍵が開いているのが見えた。

クロウは違和感を覚える。

四月にここに来たことを思い出す。あのときは確かラーヴァが内側から鍵を開けた。

(確か、ラーヴァが案内してくれたのってここじゃなかったよね)

ラーヴァが開けたときに、上るのに苦労した覚えがある。あきらかに別の窓だ。

自分たちが開けっ放しにしたわけではないことに安堵する。しかし、本来は施錠すべきことを考えると、ほっとしている場合ではない。

手をついて動かすと、簡単にガラスはずれた。小さい子なら難なく入れる大きさだ。

「ま、まさかこんなところに入ったわけじゃないよね……」

クロウはとっさに顔を入れて、内部を覗く。

埃っぽい廊下だ。市長はこの建物の保護も検討しているが、他の政策に追われ、棚上げにされたままだ。

幽霊が出るという噂もあって、建物のなかに入ろうと思う人間は少ない。むしろそれを利用して、肝試しをたくらむ人間もいるが、たいていは未然に終わる。

静寂に支配された室内。四月のときと同じだ。

「やっぱりいないか」

管理担当に一応知らせておかなければと思いながら戻ろうとすると、かすかに足音が聞こえた。

上の階だ。

「え、ゆ、幽霊？」

緊張が走る。

彼は耳を澄ませた。足音は、複数人のものだ。

「あの子たち、ここまで入っちゃったのかな」

奥に行くのはなんだか恐ろしかった。本能のようなものが警鐘を鳴らしているような。

しかし、もしも足音の主が子どもたちだとして、誤って上の窓を開けて落ちたら一大事だ。

ほんの数年前まで使われていた建物に幽霊などいない。そう自分に言い聞かせて、クロウは身

体を窓のなかにねじこませた。

四月のときの記憶を頼りに、階段を探して二階に上る。

踊り場まで来ると、足音はより鮮明に聞こえるようになった。

「もう……」

そのまま四段ほど進んで、クロウは目を開く。

確かに足音はする。しかし、子どもではない。明らかに大人のものだ。

息を潜め、彼はもう二段上がった。

話し声がする。

「開始まであと一時間か。平和なものだねえ」

「そのうち騒ぎになるんだ。せいぜい楽しんでもらおうぜ」

低い男の声がふたつ。

「あの市長さんも気の毒なことで。故郷のために尽くして、その故郷の人間に裏切られるなんて」

「物語みたいでいいじゃないか。皮肉なの、俺好きだよ」

(なんの話だろう?)

クロウがもう一段上がろうとしたとき。

いきなり後頭部を思いきり殴られた。

「あ！」

視界が回る。

「なんだ！」

「ガキだ」

すぐそばから、別の声。

「ガキ？」

離していた二人が近寄ってくるのが聞こえたが、顔を上げるどころか意識がどんどん遠のいていく。

「どうするよ？」

「無駄玉を今使ってもしかたないだろう。まずは本題優先だ」

気絶していたのは、ほんの一瞬のような気がした。

急に世界に光が現れたような感覚。瞬きすると、見覚えのある光景が目の前にあった。確か、塔の最上階だ。

動こうとしても動けない。腕が後ろ手で縛られていることを悟ったのは、一拍遅れてからだ。

「なんだ、もう目が覚めたのか」

視線をさまよわせる。三人の男がクロウを見下ろしていた。声をかけてきたのはそのうちの一人、帽子を目深にかぶった男だ。

全員、動きやすいが式典にいてもおかしくない程度に整った格好をしていた。設営関係者だろうか、とクロウはぼんやりした頭で推測した。しかし、彼らがなぜこんなところにいるのかは見当がつかなかった。

「あ、あなたたちは――」

声を出そうとした瞬間、顔を石の床に押しつけられる。

「お前、誰だ？」

クロウは沈黙した。

「いい子なら、大人に聞かれたことには素直に答えようぜ。な？」

長髪の男がクロウの胴を蹴る。一瞬、痛みで呼吸を忘れる。

「おい、子ども相手だ。ほどほどにしてやれよ」

「子どもねえ」

ひときわ背の高い大男が、クロウの紅茶色の髪をつかんで顔を確認した。

「せいぜい中等生ってとこか」

「専門職ならこのくらいの歳でもいるぜ」

大男は髪から手を離すと、クロウの襟の後ろ側を持ち上げる。首のあたりが一気に圧迫された。

「どうしてここに入ってきたのか、聞かせてくれよ」

クロウは必死に頭を働かせる。迂闊な発言をするわけにはいかない。

「専門職……。確か、影使いには若いので目立つのがいたな」

「ああ。でも、こいつじゃない。市長の警護しているの見たことあるけど」

「ば、僕は！」

大きな声を出そうとするがうまくいかない。

「南区の、中等学校の……」

「中等生が、どうしてここに？」

そう微笑んで尋ねてくる帽子の男のまとう空気にぞっとする。しかし、ここでひるみたくはなかった。

「その、せっかくだから、式典の写真を面白い角度から撮りたくて……。僕、新聞部なんです」

「学生証は持ってるか？」

身分証なら上着の隠しポケットに入っているが、見せられるわけがない。

もしもクロウが現時点で級持ちになっていたら、おそらく見えるところにバッジをつけていたはずだ。それで公務員だと彼らに知られてしまっていたかもしれない。今回は見習いであることが幸いした。

「ぶ、ぶぶ、部室に置いてきました」

疑わしい視線が降ってくる。

床についた胸から聞こえる心臓の音。それはとても大きく思えた。

今までピンチが訪れたときは、彼の周囲には常に誰かいた。しかし、ここにはトーレスもラークもいない。

吸いこんだ埃は容赦なく彼の喉を痛めた。

「とりあえず、市長のあとに始末か？」

「そんな暇あるか？」

「さっき殺さないって言ったのお前だろう。でも、さすがにこいつ運ぶのは手間じゃないか？」

「いっそのこと保険で人質ってことでどうだろう。一般市民なら迂闊に手出しできんだろう」

「おいおい、俺たちの仕事わかってんのか？」

「だから、万が一だよ。成功すれば別に荷物はいらん」

クロウのことはそっちのけで交わされる会話。

(市長……)

そのとき、ようやく長髪の男が担いでいるものに気づく。銃だ。

クロウは息をのむ。彼の視線の先にあるものに気づいたのか、その隣にいた帽子の男は、にこりと緑の目を細めながらクロウの頭を撫でる。

「ちょっと待ってろな。順番だ」

「そろそろ観客もそろってきたな」

男たちは耳を澄ます。会場に集う人々のざわめきが風に乗ってここまで届く。

「大声出されたら邪魔だ。そいつ、口でもふさいでおくか？」

六つの目が彼に集中する。

クロウは震える。彼らがなにをしようとしているのか、考えることを脳が拒否する。

しかし、この状況ではいやでも事態を把握してしまう。

(この人たち、市長を狙っているんだ)

危険を下に知らせなければ。しかし――。

腕に力をこめても、固定されているのでまったく自由はない。足も縛られている。

こんな状態で床に転がされては、身じろぎするだけで精いっぱいだ。

「あー、ちょうど使えるものがないわ」

「まあ、ここで騒いでもあっちには届かんだろう。さて、そろそろちゃんと位置についておこ
うか」

長髪の男は銃を持ち直して、いじる。

「十時ちょうどに開会、五分ごろに演説だ」

彼が覗きこんだ窓のガラスは、不自然に穴が開けられていた。そこに銃口を当て、角度を調整する。

クロウは会場の図を思い浮かべた。客席と待機スペースを挟んだその正面に壇がある。

この場所は、ちょうど人々の後方かつ上方に位置する死角で、さらに登壇する人物と向かうあ
うという、襲撃にはうってつけの場所である。

「お、始まったか」

ラッパの音が響く。開会を告げるものだ。

「経路確保は」

「心配ない。打ち合わせどおりな。じゃあ、俺は先に下のやつらと合流しているから。お前はこ
いつ頼むな」

帽子の男は確認するかのようにクロウを蹴って、階段を下りていった。

「ったく……」

大男は、面倒くさそうにクロウに近づいた。

「ん？ なんだこりゃ」

彼はクロウの首元に注目する。先ほどのやりとりで襟元が乱れ、銀色の鎖がかすかに隙間から
覗いていた。

男はそれを指にかけて引っ張り出す。クロウがいつも身につけている烏笛が姿を現した。

「笛か？」

「……お守りです」

クロウの答えに、大男は口の片端を上げる。

「こいつを鳴らせば助けにくるとか？」

クロウは唾を飲みこんだ。

鳥笛は、人間の耳には聞こえない、鳥だけ届く音が鳴るようにできている。

真下には鳥類局の者たちが待機している。彼が吹いてくれれば、誰か異変に気づくかもしれない。

少なくとも、ラーヴァは今ごろクロウがいないことを疑問に思っているはずだ。彼ならきっと気づいてくれる。

「鳴りませんよ。壊れていますから。……それ、父の形見なんです。試してみてもいいですよ」

「へえ」

鎖ごと笛を取り上げた大男は吹き口を拭いて、自分の唇をつける。それを見た長髪の男は顔をしかめた。

「おい、笛なんてこんな場所で使うなよ。勘違いされたらどうするんだ」

「わかってるって」

大男は鳥笛を放るようにして、クロウの脇に投げた。

失敗か。クロウは顔をゆがめる。

危険を知らせようと無理に叫ぼうとしたところで、さすがにここからでは声は伝わらない。

(やっぱり、笛を……)

男たちの視線が会場に向いている隙に、クロウは必死に身体をよじる。

(早く、早く……)

自由を制限されているとはいえ、ほんのわずかしか動けない身体がもどかしかった。

音を立てないようにしながら、すこしまたすこしとゆっくり距離を縮める。首を伸ばしてもまだかすかに遠い。

「お、市長さまのご登場だ」

長髪の男が銃を構える。

(くそ……！)

クロウは床に歯を立てるようにして、鎖をくわえる。

「声、聞こえるか？」

「ちょっと遠いな」

「あっち開ける。俺が手を挙げたらそのまま撃て」

「最初の挨拶が終わったタイミングでだぞ」

「おう」

大男はクロウの横を通り、別の窓をわずかに開ける。市長の声がかすかにクロウの耳にも届く。

(逃げて……)

男たちに悟られないようにいながら、クロウは首をすこしずつねじる。そうやって、笛を口の届く位置まで持ってきた。

大男の手がびくりと動く。

クロウは首を伸ばして唇をつけ、思い切り息を吐いた。それは、押し殺したような銃声よりも数秒早かった。

「エ、エ、エ！」

「ナニ、笛？」

鳥たちのざわめきが聞こえた。レインアローだ。

長髪の男が舌打ちをする。

「くそ……外した！」

「当たったんじゃないのか？」

「殺し損ねた」

ばたばたと翼を動かす音がする。同時に、人間のざわめきもどんどん大きくなる。

「なんだ？」

ガツ、と大きな音がする。

「なんだ、こいつ」

「オイ、坊主！ ラーヴァノ坊主ダロ！」

目を開ける力がない。首を動かすのに精いっぱいだ。

「オーイ、ココダ！ 誰デモイイカラ来テクレ！」

「邪魔だ、どけっ！」

鳥の声はますます騒がしくなり、ガラスを叩く音も増える。

「くそ、レインアローが」

「はあ？ なんで」

「まずい、気づかれたかもしれない。中止だ。おい、そいつ盾にするぞ」

大男はクロウの胸ぐらをつかんで無理やり起こそうとする。

「足だけほどけ。自分で歩かせろ」

曖昧となった意識で立たされ、クロウは引きずられるように塔の階段を下りる。

「あれも鳥使いが？」

「かもしれないな」

「他の鳥は飛ばさないって話だったろ？」

大男は苛立った様子でクロウの肩を押す。

「おい、坊主。死にたくなかったらしっかり役に立てよ」

「クロウ！」

その声がした瞬間、クロウの視界はぱっと明るくなる。待ちわびていた赤い色が目の前にあった。

「ラー、ヴァ……？」

「あ？ なんだ？」

首を傾げた瞬間、大男の身体が天井まで浮かび上がった。

「うわああ！」

そのまま一気に叩きつけられる。

とっさに長髪の男がクロウを押さえつけ、銃口を彼の頭に当てる。しかし、その感触はすぐになくなった。

「ご愁傷さま」

その言葉と同時に、彼の身体は壁に吸い寄せられ、縫い止められる。

クロウは数度瞬きをした。

「……トーレス」

彼以外にも、ラークや警護兵たち数人が駆けつけてきた。

「おいおい、これどういうことだよ」

トーレスは、クロウの腕を自由にさせる。

「えっと……」

トーレスは長髪の男の腕をつかみ、手錠をはめる。大男は、小柄な警護兵が拘束する。

「お前がいなくなったから、ラーヴァも心配したみたいだぞ」

聞けばラーヴァは、西から戻ってすぐにクロウがいらないことに気づいた。鳥使いに聞いても行方は誰も知らず、ずっと相棒を探して飛び回っていたらしい。

そこで出会ったのが、野の鳥たち。彼らは公園の周辺にクロウがいらないか探し回ってくれた。その最中に鳴った、鳥笛。

「アレ、オ前ノ笛ダッテスグワカタヨ。下手ダモンナ」

野の鳥の顔役は笑いまじりに言う。

「あれは、腕もまともに動かせなかったから……」

クロウの居場所を野の鳥たちから告げられたラーヴァは、ラークを伴ってトーレスのもとを訪

れた。

それで、単独で駆けつけたところ、ちょうど警護兵の一隊と合流したというわけだった。

「そうだ、し、市長は？」

トーレスはかすかに笑む。

「命に別条はない」

突然鳴った鳥笛に、レインアローたちはいっせいに驚きの声をあげた。それに反応して市長は一瞬、身体をそちらのほうに向けた。そのおかげで急所は避けられたのだ。

クロウは、自分が捕まってからの出来事を簡単に説明する。

「まさかこんなやつらが……」

トーレスは、長髪の男の顔を覗く。

「あ、完全に気絶してる。事情は聞けないか」

「ロートル人ですかね？」

制服がやや合っていない小柄な警護兵が、彼らの身につけているものを確認しながら呟く。

「そもそも、俺たちが巡回してるのに、なんで……」

クロウは手を叩いた。

「そうだ、もう一人！」

「え？」

「もう一人いる！ 帽子をかぶった男の人。その人が言ってたんだ」

――俺は先に下のやつらと合流しているからな。

「まだいるのか？」

トーレスは周辺を見渡す。

廊下の奥の部屋から、金髪の警護兵が一人、顔を出した。

「こちら異常なし！」

「上、誰もいません」

そう言いながら下りてくるのは、黒眼鏡をかけた警護兵だ。

同時に、階段を上がってきた警護兵が二人。

「下も確認済みです」

トーレスは難しい顔をしながら考えこむ。

「……ミラ班長、どうしましょう」

「とりあえず一度、局長に報告だ」

ミラと呼ばれた中年男性の言葉に、トーレスは頷いた。

「局長だったら、今、市長のところにいらっしゃるはずですよ。俺、行きます」

「あの、僕は……」

おそるおそる尋ねるクロウに、その場の全員の視線が集中する。

「クロウ、悪いけど一緒に……」

「彼、怪我しているじゃないですか」

金髪の警護兵が駆けよってくる。

言われてみて、クロウが自分の頬に手をやると、かすかに血がついていた。

「一度、医務員に見せるべきでは？ 連れていきますよ」

「そうだな」

班長は頷く。

「君、よろしく」

「友達なんで俺が連れていきますよ」

「トーレス、お前は周辺の警戒にあたれ。まだ油断できないんだから頼むよ」

クロウはおろおろする。

「えっと、僕」

「クロウ、甘エテオケ」

そう諭すのはラーヴァだった。

「俺ハ、パロットニ報告シニイク。アイツモスッゴク心配シテタカラナ」

「うん、お願い……」

ラーヴァはラクを引っ張るようにして連れて行く。

「では、行こうか」

金髪の警護兵に促され、クロウもその場をあとにした。

式典は急遽中止となったため、公園内は警護兵でいっぱいだった。その場にいた民衆は留めおかれ、不安そうな表情だ。

クロウは今さらズキズキと痛む身体を引きずるように歩いた。

「大丈夫かい？」

警護兵はクロウの肩に手を置いて、後ろから支えるようにして横を歩いてくれた。

正直、トーレス以外の警護局関係者はほとんど知らない。一緒にいるとなんだか緊張する。

「……平気です」

笑顔を作って見上げて、緑の瞳と目が合う。

その瞬間、世界が止まったかのような感覚になった。

肩に食いこむ指が痛い。

「遅い、ようやく気づいたか」

そう囁く声は優しい。

「やっぱり、中等生じゃなかったんだな。鳥使いだって？」

クロウはなにも返答しなかった。しかし、彼の目の前でラーヴァと会話したうえに、トーレスとのやりとりも聞かれている。否定のしようがない。

「だったら、どうするんですか？」

「さあ、どうしようかね」

言いながら、彼は短銃を取り出す。

クロウは思わず身じろぐが、彼はけして逃がしてはくれない。

「悪いけれども、まだ死にたくないならつきあってもらおうか」

「……どこに」

「来ればわかるさ」

彼はクロウと自分の身体で銃を隠しながら、一步踏み出す。押されて、クロウも進むしかなかった。

せっかく助け出されたと思ったのに、さきほどよりも状況は悪化している。

背に当てられた銃口は、ひんやりと冷たい。

どこに連れて行かれるのだろうか。クロウは周囲を見渡す。

彼が警護兵の格好をしているせいか、周囲はクロウたちを怪しむことなく行き交っている。鳥

類局の面々がいると思われるエリアは遠い。

(……外?)

「ご苦労さまです」

とある場所にさしかかったところで、男は正しい姿勢でその場の警護兵たちに敬礼する。

「その子は？」

「ああ、さっきの騒ぎで怪我してしまっただらしくて……」

「悪いが、一般人は誰も出さないようにって——」

「ああ、この子は鳥使いです」

警備兵はクロウの顔に注目する。

「あ、トーレスの……」

「ああ、オリバー王子のときの。しょうがないな、邪魔にならないようにしろよ」

「了解」

愛想よく返事した男は、そのままクロウを押しつつさらに進む。

「なんだ、案外顔広いんだな。ちゃんと名乗ってもらおうと思ったのに」

トーレスの友人であることとオリバーの件で、警護局の一部には顔が知られているのだ。

クロウの足はだんだんと重くなる。

彼は、クロウを利用し、まんまと逃亡しようとしているのだ。

(この人をこのまま公園から出してはいけない)

そう考えた瞬間、クロウは思わず振り返って男の腕を払いのけた。

「な……」

誰か、と叫ぼうとしたが、こんなときに喉がかすれる。うまく声が出せない。

「あとちょっと我慢してりゃいいものを」

男は銃を構える。クロウは身体が硬直した。

(撃たれる……!)

クロウが目を閉じた瞬間、風を切る音がした。

ラーヴァだ。彼はまっすぐ男の手に突撃し、短銃は弾け飛んだ。

舌打ちした男は、懐から何かを取り出す。

笛。クロウがそう認識すると同時に、彼は二度それを鳴らした。

一拍遅れて、どこからか盛大な爆発音が轟いた。クロウの髪を浮かせる爆風は、悲鳴と煙を運んできた。

ひるんだ隙に、男は身を翻す。

「ま、待て……」

クロウは腕を伸ばしたが、その間に混乱した民衆たちが割って入った。

「オイ、クロウ！ 大丈夫か？」

「ラーヴァ、どうして……」

「ソリヤア、医務員ノイル場所とは反対方向ニ向カッテルノ見タラ不思議ニ思ウサ」

ラーヴァはクロウの袖を引っ張り、彼を公園の端へと誘導する。

「ケドヨ、銃持ッテルヤツニ丸腰デ飛ビカカッテドウスルンダ！ コノ無鉄砲！」

返す言葉もなかった。

「ラーヴァ、ごめん、ありがとう……怪我はない？ 思いきりぶつかったけど」

「ソナナコト気ニシテル場合カ！」

ラーヴァは小言を続けようとしたが、ふと人混みに視線をやると高く飛んだ。

「トーレスダ！」

「クロウ、大丈夫か？」

濁流のような人混みをかき分け、トーレスがやってきた。

「ラーヴァは目印になるな。お前、さっきの男どうした？」

「ア、アッチダ！」

トーレスはラーヴァを見上げ、首を傾げる。彼にはラーヴァの言葉がわからないのだ。

「ラーヴァが見つけたみたい」

「じゃあ追うぞ」

人々の波に乗るようにして、トーレスは駆け出す。クロウは友人の姿を見失わないように必死で追いかけた。

走りながら、トーレスは苦い顔になる。

「ミラ班と合流したときと、お前と会ったとき。人数が違った」

「え？」

「あいつが一人増えたんだって気づいて、それで慌ててお前を探したんだ。そうしたら、ああなって」

トーレスは舌打ちする。

「警護兵は人数が多いうえに、今回みたいなときは臨時の編成になるからな。油断した」

「で、でも、あの班長さん？ あの人は……」

ミラは何事もなく彼にクロウを預けた。

「グルだったんだ。ミラ班長は、反市長勢力だ」

男たちを旧市庁舎のなかへ侵入させたのも、金髪の警護兵一一帽子の男に制服を用意したのも、彼だ。

「さっきの爆発も、班長さん？」

「いや、ミラ班長はすでに押さえてる。でも、まだ他にもいたんだ。ちくしょう！」

トーレスは走りながら強く石畳を蹴る。

「あいつだけは絶対に捕まえる」

今までにないほど、トーレスは頭に血が上っている。クロウは戸惑ってしまうくらいに。

しかし、なんとしても逃がしたくないのは、クロウも同じだった。

「ラーヴァ、どっちに向かってる？」

「港ジャナイ……西ダ」

「西？」

クロウの言葉を聞いたトーレスは、舌打ちをする。

「西……か。クロウ、ラーヴァにうちの局長たちへの伝言を頼んでくれ」

「うん！」

ラーヴァを一度呼び寄せ、クロウは応援を頼むように言う。ラーヴァは了解し、すぐにその身を翻した。

ジェミアの西側は商業地区だ。ジェミア成立記念日に合わせ、どの店も気合いを入れて商戦を繰り広げている。式典に興味のない人々は、ここでの買い物や大道芸を楽しむ。

「あんなところに隠れられたんじゃ厄介だな」

「オイ、坊主！ 今度ハナンダ？」

飛びながら下降してきたのは、野の鳥の顔役。

「どうしたの？」

「ラーヴァニ頼マレタンダヨ。アイツモ鳥使イノアライヤツダ」

こんなときだというのに、クロウはすこし笑ってしまう。

「警護兵の格好をした男の人が、西に向かって走っているのが見えない？ その人を追っているんだ」

顔役は上昇する。

「アイツカ？ マسسグ外レノ方ニ向カッテルヤツナラ」

「トーレス、外れのほうだって」

「……まさか、城壁から直接逃げるつもりか？ くっそ。クロウ、悪いけど先行くぞ。対象がわかってるなら話は簡単だ」

トーレスは思いきり地面を踏み、跳躍する。

彼の影が高く伸びる。その勢いに乗るようにして、トーレスは手近な屋根に上がる。

そしてそのまま影を前方へ伸ばして、風になったかのように進んでいく。

「すごい……」

「坊主、立ち止マルナ。オ前モ進マナイト」

「うん」

旧市庁舎公園の爆音は、ここまでも届いたようだ。不安にかられて宿や港のある北へ向かう旅行者客、逆に南の自宅に戻ろうとする市民で道の流れはめちゃくちゃだ。

「迂回シロ。次の赤い屋台を左だ」

顔役が、進みやすい道を教えてくれる。

「ありがとう！」

「コレデ貸シハ二倍ダナ！ イヤ、サッキノト合ワセルト三倍……イヤ、四倍カ？ 必ズ返セヨ」

「出世払いで」

「チョットデモ出世シテカラ言エヨ」

城壁がだんだん迫ってくる。

走りすぎて、どんなに息を吸いこんでも、まったく酸素を取りこむ感覚がなかった。足ももう、存在しているのかもわからなくなってくる。

しかし、夢中で走ったかいもあり、城壁をのぼる道がはっきり確認できるようになった。上のほうに、トーレスらしき人影が見える。

自分も向かおうとしたとき、クロウはこちらへやってくる警護兵二人の姿を見つけた。

一瞬、あの男かと思った。しかし、両方見知らぬ顔だった。

「ど、どうしたんですか？」

「旧市庁舎公園で爆破があったんだろ？ その応援に」

「え、じゃ、じゃあ、城壁には……」

「伝令役が残ったよ。まったくただでさえ人出があっちに取られてるのに」

伝令役。いやな予感がする。

クロウは話もろくにせず、そのまま坂道を進んだ。

「おーい、城壁での肝試しはなしにしてくれよ」

のんきな警護兵たちの声も、彼の耳には入らなかった。

城壁から逃げる気か。トーレスはそう言った。

仲間が小型の飛行機かなにか用意して待っているのだろうか。しかし、いくらなんでもそんな不審なものがあったら、あの警備兵たちだっつのんびり交代に応じるわけがない。

クロウは疑問に思いながらも、急いで階段を駆け上ろうとすると、突然銃声が響いた。

「うわっ！」

驚いたクロウは、転んでしまう。

「う……」

今日は痛い思いをしてばかりだ。このまま意識を手放してしまいたくなる。

「シッカリシロ！ 上カラ聞コエテキタゾ」

トーレスの顔が思い浮かんだ。クロウは膝や手の埃を落として、今まで以上の速度で進む。

頂上にさしかかったところで、トーレスの怒鳴り声が耳に入った。

「くそ、待て！」

「トーレス？」

そこにいたのは彼だけで、あの男の姿はなかった。

「あいつ、直接降りやがった」

中途半端に伸びた影を漂わせながら、腕を押さえたトーレスは険しい表情で言う。

「はあ？」

クロウは柵の外を見ようと背伸びして、一瞬震える。萌える草原を背景に人影がひとつ、どんどん小さくなっていくのが見えた。

「飛び降りた？ し、しし、死んじゃうよ！」

「いや、装備抱えていたからきっと……」

狼狽する友人を横目に、トーレスはふらついた足取りで柵に手をかける。その肌は真っ赤に染まっていた。

「トーレス、それ……」

「クロウ、ここ頼むな」

「え、え？」

友人の返事なんか聞かず、トーレスは自らを宙に放り出す。

「トーレス！」

血相を変えて、クロウは自分も身を乗り出すが、トーレスの足につながる黒い筋に目を留める。

たしか、秋に子どもを助けたときに使っていた技だ。それは城壁を伝って、どこまでも下へ下へと伸びていく。

トーレスがあとすこしで追いつくというところになって、緑の布が花が咲くように開いた。それは一瞬、草原と同化して見えた。

「な、なにあれ！」

クロウは目を丸くする。パラシュートはジェミアではあまりなじみのない道具だ。

緑の影とトーレスの影が重なる。

「トーレス……！」

もつれるように、トーレスと男は接近しては離れる。

城壁に残った影はどんどん薄く、地上へと伸びる影も細く頼りなくなっていく。いくらトーレスでも、負傷しては限界があるのだ。

「ど、ど、ど……！」

クロウは周囲を見渡す。応援の姿は見えるが、まだ距離がある。

こうしている間にも、トーレスたちの姿はどんどん小さくなる。

(いつものトーレスだったらなんてことはないはずなのに)

彼がこの場に残した影も、もう限界が近づいていた。

このまま見ているしかないのだろうか。クロウは鳥笛を握る。

「坊主、鳥笛使エ」

「え、今？」

「マッタク、マダルッコシイ！」

顔役は窓から出て上昇し、大きな声で鳴く。

それに呼応するようにして、大きな羽音が響いた。

「クロウ！」

ラーヴァだった。その横にはゲイル。

ゲイルはすぐに下方の様子を見て状況を把握する。

「乗レ」

「うん……！」

飛行用の装備なんてなにひとつ身につけていない。けれども、クロウにためらいはなかった。手綱をしっかりと手に絡めて、ゲイルを急降下させる。

風が今までにないほど強く、クロウの全身にぶつかっては通り過ぎていく。息ができないほどに。

しかし、ここでひるんではいけない。クロウは唇を噛んで意識を保った。

次第に二人の姿が近づく。

何条にも分かれた影。男をその渦のなかに閉じこめてはいるが、トーレスの顔色は悪い。

「トーレス！」

クロウは手を伸ばす。

顔を上げたトーレスは、右腕を上げる。クロウはその手をつかもうとするが、タイミングが合わずうまくいかない。すぐに遠ざかってしまった。

「ゲイル、もっと近寄って」

「了解」

ここまできると、ジェミアよりも地面のほうがよほど近い。トーレスを支える影がさらに細くなっていく。男の拘束に全神経をそそいでいるのだ。

そして、ふっと音を立てるようにして、ジェミアと彼をつなぐ糸が消えた。

男とともに、トーレスが真っ逆さまに落ちていく。

クロウは無我夢中で手を伸ばした。そして、トーレスの袖を握る。

重力が一気にクロウの腕にかかった。

ぶるぶると震える自分の身体にむち打つようにして、クロウは友人を影の塊ごとゲイルの背中に引っ張りあげる。

「……ありがと、助かった」

ゲイルの羽毛に手を埋めるようにして、トーレスは座りこむ。

それを目にした瞬間、クロウの膝もそのまま崩れ落ちそうになり、トーレスが慌てて支える。

「お前の腰が抜けてどうするんだよ」

「な、なんか……安心したというか……」

夢中になってトーレスを追いかけたが、彼を回収しただけなのに気が抜けてしまった。

そんな友人を見てトーレスは苦笑し、顔をしかめながらも腕を上げる。クロウも同じようにして、思い切り彼の手を叩いた。

「いって……」

「あ、ごめん……」

トーレスの腕に真一文字の傷があった。クロウは焦ってハンカチを差し出す。

「お、ようやく来たか」

トーレスはジェミアを見上げる。他のレインアローの姿があった。

「任務終了だ」

いつの間にか、太陽は子午線を越えていた。

「どうしてそんなに無鉄砲なんだ！」

警護局長の怒鳴り声が庁舎の一室に響く。

「ちゃんと捕まえましたから、無鉄砲ではないと思います」

「ちょっとは突撃以外の方法も覚えろ！ 指示を待てるのか、この暴走小僧！」

「待っていたら逃げられました」

「思いつきで行動するなって言ってるんだ！」

自分のことを言われているような気がして、クロウはびくびくしてしまう。しかし、当のトーレスは余裕しゃくしゃくな態度だ。

「あのまま逃がしたら、市民も不安でしょう。ところで、あの狙撃犯たちは口を割りましたか？」

「まだだ」

「ロートルですか？」

警護局長は忌々しげな表情を見せる。

「ミラたちはそう証言しているが、どうだかな」

「まだ他にも反市長派っていうのはいるみたいだからね」

包帯を巻いた市長は曇った笑顔で口を挟む。

「誰がどこにどうつながっているかはまだ不明だからな。これからますます忙しくなるぞ」

「では俺……僕も取り調べに参加します」

「腕の怪我どうにかしてから言え。おい、医務員呼べ、医務員！」

鳥類局の面々はぽかんとそのやりとりを見つめていた。一方、警護局のほうはそれどころではないようだ。

市長の狙撃を許しかけたこと。自分たち警護局の者の証である制服が外部の人間に渡ったこと。変装した犯人の言に乗せられて持ち場を離れた者がいること。そしてなにより、自分たちのなかに裏切りものがいたこと。彼らには問題が山積みだった。

「……無鉄砲でも結果を出すか出さないかが、お前との違いだよな」

口を開いたのは、クロウの後ろにいたカイトだ。

「成果をあげれば、ひとまず仕事が速い人間として扱われる。お前の場合は、勝手な判断でトラブル巻き起こすってことになるが」

クロウは苦笑いになる。

「いや、結果を見れば、クロウだって十分仕事をしたさ。トーレスの補佐だけではなく、自分でも」

パロットの言葉に、市長も頷く。

「おかげで命拾いできたからね。恩人だよ」

そう心をこめて言われると、どうしていいのかわからなくて、そわそわしてしまう。

「あ、あの……オリバー王子の件ときは……」

市長は瞬きをし、今度は本当に明るい笑顔を浮かべる。

「まだ気にしていたのか。もう済んだことなのに」

そんなことを言われようと、市長には迷惑をかけたところの話ではないことは事実なのだから、こうして面と向かうとつい謝罪の言葉は出てしまうものだ。

「リチャード王子も、またぜひ来たいと仰っていたよ。そのときは君の成長した姿を見せればいい。あのことは、今回の件で帳消しだ」

そうだ、と市長はパロットに視線を送る。

「鳥類局長、彼にあれを」

パロットはクロウの前に立つ。

「クロウ・フェアウェザー。君には四〇〇点を与える」

クロウは、一瞬、上司の言葉を理解できなかった。

そもそも、点数のことなど頭からすっかり抜けていた。一月の事件から今日まで、そのために頑張り続けてきたというのに。

「え、あ、ぼ、僕にですか？」

一度に四〇〇点なんて、今まで聞いたこともない得点だ。

戸惑うクロウをよそに、パロットは小さな布箱からなにかをつまんで取り出す。

「これで君も正式な鳥使いだ」

差し出された両手に落とされた、わずかな重み。金色に輝くオリーブと鳥の意匠。

オリーブバッジ。この二年と数ヶ月、ずっと得られずにいた存在だ。

約一年前の四月、憂鬱な気持ちで四月を迎えた記憶がよみがえる。

あのときは見習い卒業には全然足りなかった。飛ぶのが怖かったし、鳥たちにだって見くびら

れていた。先輩たちからの信頼もなかったし、アンジェリカからはしきりに心配されていた。

初夏になって、ゲイルに乗って初めて地上との往復をした。自分しか動けない—その状況に動かされ、勢いのまま空に飛び出したようなものだった。

夏の日、自分よりずっと有能なアンジェリカが壁にぶつかってそれを乗り越えたのを目の当たりにした。

秋を迎え、ラーヴァが入ってきた。好きで鳥使いの道に進んだわけではないという彼に、鳥使いの楽しさを教えたいと願った。結局、トーレスに助けられてしまったけれど、子どもを助けた一件でずいぶん距離が縮まった。

そして冬。賓客のオリバーを怪我させるという、あってはならない事態を起こしてしまった。それで、大勢の人たちに迷惑をかけてしまった。

あの一件で、もう手にできないのではないかと心のどこかで思っていた。

今、自分がいるのは現実だろうか。夢ではないのだろうか。頬をつねりたくなるほど、信じられないことだ。

けれども、握ると冷たく、ところどころ尖った感触が確かにあった。

ふと思い浮かべるのは、鳥使いになったクロウが見たい、と呟いた父の顔。

「ヤッタナ、クロウ！」

ラーヴァが、軽くクロウの頭をつつく。続いて、主任やシーガルなど先輩たちが手を握ってぶんと勢いよく振る。

実感がそこでようやくやってきて、クロウは満面の笑みで頷く。

本当に長い二年半だった。そのなかでも、この一年は特に大切な年月なのは間違いない。

レイドを助けたあの四月からこの三月まで、クロウは自分でも驚くほどの変化をとげたのだから。

もう、未熟な見習いクロウはどこにもいない。

クロウは窓の外からジェミアの町並みを見つめた。

この喜びを早く伝えたい人たちがいた—やっと鳥使いになれたのだと。

そして、新しい朝がやってきた。いつものようにラーヴァに起こされ、クロウはベッドから下りる。

服を着替え、忘れないようにオリーブのバッジをつけた。金色の輝きがなんだか落ちつかない。

ラーヴァに急かされ、家を出る。花の匂いが風に乗って届く。

一年前も同じようにこの香りが空気中に漂っていた。しかし、あのときと今とではまったく心境がちがう。クロウは感慨深く深呼吸した。

ふいに、背後から声がする。

「おはよう」

そう言いながら肩を叩いてきたのはアンジェリカだった。

「おはよう」

彼女の視線は、クロウの胸元に注がれる。なんだかすこし嬉しそ弾んだ表情に見える。

「昨日の話、聞いたわよ」

「本当？」

「トーレスが大活躍だったんでしょ」

一瞬反応に困ったクロウの顔を見て、アンジェリカはニッと唇の両端を上げる。

「それも、元はクロウのおかげだっていうのもね。まさか、クロウがねえ」

「うん、なんというか、ちゃんと話せば長くなるんだけど」

「じゃあ、夕方にでも聞かせてくれる？ まだ早いんだけど、紅果実のタルト、お試しで作ったのがあるの」

「本当？」

一秒で顔をこのうえなく輝かせる幼なじみに、アンジェリカはおかしそうに笑った。

「お店には出せないから持って行くわ。私、今日は後片づけ中心で早めに上がれるの」

そう言って顔をしかめる。

「ごめん。そんなわけ出勤いつもより早い。先行くわね」

ブーツの踵を軽やかに鳴らして、アンジェリカは駆けていく。

「相変わらず忙しいんだなあ……」

のんびりとした口調の相棒に、ラーヴァは喝を入れる。

「ホラ、クロウ。オ前モ行クゾ！ 級持ちニナツタンダカラ、モットモットキリキリ働ケヨナ」

見習いを脱したところでまだ九級。鳥使いとしてはむしろこれからが本番だ。

「うん！」

クロウは元気よく駆けていく。もう、中央役所までの道のりで迷いは生じなかった。

今日から鳥使いとしてのクロウの新しい一年が始まるのだから。